第二編 先史から有史時代へ

第 章 先史時代

第 節 先史時代の 概 要

北海道とシベリア

期間が長いからである。 説明することはできない。 北海道の旧石器時代の大部分をしめる細石刃文化は、シベリアを抜きに 気候のうえでも地理のうえでも一体化していた

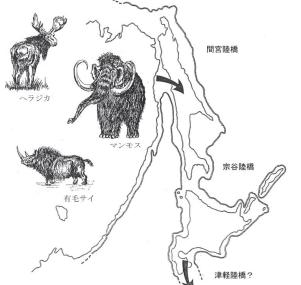
0)

たのである。 広がり、 平均気温は現在より七℃前後低く、 れたものだろう。 て北海道に渡った集団がいたことはまちがいない。 れるが、その結果、 海峡の陸化である。 ない草原が広がり、 海面低下という)。そのころの北海道東部にはツンドラとよばれる林の少 の気温であったようである。海から蒸発した水は雪となって降り積もる一 れている。ちょうど柏台1遺跡や祝梅下層遺跡が残されたころである。 アに連続しているのであるが、気候だけではなく地理的にもつながってい ム氷期)は、一万八○○○年前から二万年前に最も寒い時期を迎えたとさ 細石刃文化の遺跡はその集団やその伝統を受け継いだ人々によって残さ 約七万年前に始まり一万年前に終わったとされる最近の氷河期 融けて海に戻ることがないため、 北海道は大陸からぶら下がる半島のような状態になる。この橋を通 一部にはツンドラもあったようである。そのような気候はシベリ 氷河性海面低下による大陸と樺太、樺太と北海道の間にある もちろん人だけがやってきたわけではない。陸続きであ 水深一五点の間宮海峡、 二万年前には八五~一四〇㍍も海面が低下したといわ 西部は森林ツンドラとよばれトウヒやモミなどの林が 札幌近辺の気温は現在の樺太中部付近 海岸線は沖に後退していた(氷河性 六〇㍍の宗谷海峡は陸橋とな 北海道に残された数々 (ヴュル 年

> ある。 ていたのだろう。 のハンターはこれらの動物を追いながら、 津軽海峡を越えて本州にも渡り、 2)。この時期かそれ以前かは不明だが、 た骨が発見されている。またその近くの下金森遺跡では三万九○○○年前 ジカと大量の野牛の骨が発見されており、その中には槍先状に研ぎだされ り気候も似ていれば動物も自由に往来していたはずだ。その中にマンモス で最も新しい年代をもつ例は、 地層の下からハンマー状の石器 野牛の骨は噴火湾で発見されており、 ヘラジカがいた (図1-1)。北海道で発見されたマンモスの中 羅臼沖で網にかかった約二万年前 人と共存していたことになる。シベリア (たたき石) 北海道に渡り、 北方系の動物が水深一 岩手県の花泉化石床ではヘラ が出土している 狩の生活を送 四○メメ゙ 図 1 1

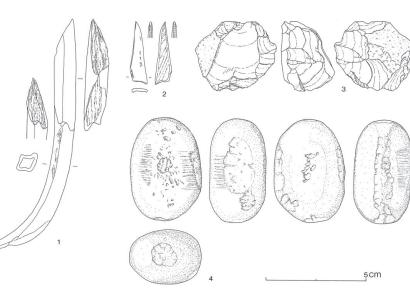
二万年前をピークに徐々に温暖化する過程で、これも陸橋であった可

だから、北海道の 性のある北海道と 旧 ずっと短かった。 ると樺太や大陸と ても、時間的にみ ながっていたとし と本州が陸橋でつ 水没する。 本州の間が最初に つながりよりも 石器時代の内容 北海道 間宮陸橋 宗谷陸橋



陸橋とマンモス動物群の渡来 図 1 **—** 1

近いのは当然のこ がシベリアにより



花泉化石床と花泉下金森遺跡の遺物

(加藤・鶴丸1976)

0)

先

図 1 **—** 2 る以前を意味してお 分がある。 がって、さまざまな区 原史時代、 に文字記録が残される 代区分である。 て区分けしたものが時 「先史時代」 は、文字が使われ 次の段階の断片的

る。しかし、最近は「原 と対置される用語であ 的に使われた歴史時代 文字が日常

史時代」 はほとんど使

史時代」 われることはなく、 有無を基準とする時代概念を用いることへの批判もあって、 の語も使われることは少ない 同時に遺物と遺跡に基づいて研究を行う考古学が文献 最近は 先

列島独自の発展のあり方を重視した時代区分として一般的に用いられてい

一八三六年デンマークのクリスチャン・J・トムセンによる

これは、

本では、

旧石器時代、

縄文時代、

弥生時代、

古墳時代という区分が、

視野の中で理解されるべきそれ以前の時代を「旧石器時代」とし、 ある。 四年のJ・ラボックの区分に対応するものである。 扱っているのである。かつてはこの時代を先土器時代とも言っていた。 時代にほぼ相当する。ここでは「旧石器時代」以外は、日本独自の区分で 縄文時代が石器時代に、弥生時代が青銅器時代に、そして古墳時代が鉄器 センの石器時代をさらに「新石器時代」と「旧石器時代」に分けた一八三 利器の材質に基づいた石器時代、 独自の発展経過と内容を持つ縄文時代以降の文化に対し、世界史的 青銅器時代、鉄器時代の三時期法、 つまり、 旧石器時代 トム

れの段階の特質によっ

した

発展の過程を、それぞ

人類の歴史の変化

時代区分

となのである。

降は本州とは異なる、続縄文時代、 イヌ文化に関連を持つ可能性が指摘されるオホーツク文化がオホーツク海 分が用いられている。また、五~九世紀にかけては、 沿岸に展開する。 北海道では青銅器時代に相当する弥生文化が欠落しており、縄文時代以 擦文時代、アイヌ文化期という時代区 熊送り儀礼で後のア

には少なからず問題があろう。 から、 化)との連続性を考慮した枠組みを考える必要がある。 化を区分するのに、時代区分より下位の概念である時期区分を用いること 常は擦文時代人が土器を捨てた段階をもってアイヌ文化の成立とすること この区分では「アイヌ文化期」という語が今後の課題となるだろう。 擦文時代人とアイヌとは同じ人々であるということになる。その文 「アイヌ時代」とし、その後に擦文時代(文 通

が、 文化が続く。 縄文時代の後期頃に北九州に展開した稲作農耕は本州北部まで普及した 縄文時代からの伝統を踏襲した狩猟・漁撈、 北海道では金属器や一部の文物を取り入れたものの定着することはな それが続縄文時代である。 採集を経済の基盤とする

組み合わせ、 そのある段階に東北地方北半部から土師器がもたらされ、 土器の形、 土器表面の調整法などに大きな影響を及ぼした。 土器の種類の

属器や小鍛冶技術なども導入された。
ギ、オオムギなどの雑穀農耕がもたらされ、それに伴って、農具などの金多くは四隅の丸い方形(隅丸方形という)で南~東壁に竈をもつ。コムまりとしている。また住居も本州の古墳文化の影響を受けた形態をとり、そうして成立した土器を擦文土器と呼び、この段階をもって擦文時代の始

擦文時代の終末については一二世紀から一四世紀の間で、諸説ある。

遺物と遺跡

遺物 考古学は過去の人間が関与したすべての痕跡を研究対象としている。そのひとつは土器、土偶などの土製品、石器とよばれる石鏃、石槍などの石製品、各種の木製品や鉄製品などの持ち運びできるすべての「もどの石製品、各種の木製品や鉄製品などの持ち運びできるすべての「もどの石製品、店間を出る。そのひとつは土器、土偶などの土製品、石器とよばれる石鏃、石槍などのが一般的だが、遺物数という場合には、それらひとつひとつをすべての「もっか」が、縄文時代の遺跡でもやはり土器の破片や石の剥片が大多数を占めるのが一般的だが、遺物数という場合には、それらひとつひとつをすべての痕跡を研究対象としているのが一般的だが、遺物数という場合には、それらひとつひとつをすべての痕跡を研究対象としているのが一点として数えることになる。

これらにはもちろん破片や石製品を製作する過程でできる剥片や鉄製品を た分類として用いられている。 遺物ということも可能だが、人工物かどうかを区別することに重点をおい 以外の遺物を指す。 物や炉址に残る木炭、 作る際の鉄滓なども含まれる。後者は貝や魚骨、 あげた土製品、 遺物はまた文化遺物と自然遺物に分類される場合もある。 石製品、 本来、 種子や植物の断片など人が意図的に作り出したもの 木製品、 人間が関与したものであればそのすべてを文化 鉄製品など人が作り出したものを指す。 動物骨などの食物の残り 前者は、 先に

間的な分布状態が把握される。このようにして捉えられたまとまりを、遺発掘では多くの場合、一点ごとの遺物の出土位置が記録され、遺物の空

たひとまとまりの遺物群を捉えることをまず基本とする。やかとまとまりの遺物群を捉えることをまず基本とする。この方法を通して、製作方法の分析や使用痕分析などによっては、その遺物群の文化内容の一端にせまることが可能になる。考古学ではこのような同一集団が残した、製作方法の分析や使用痕分析などによっては、その遺物群の文化内容の一端にせまることが可能になる。考古学ではこのような同一集団が残したひとまとまりの遺物群を捉えることをまず基本とする。

としているのである。

文化遺物には製作方法や形態、素材、装飾に時間的、地域的な特徴があなれる場合が多い。そこで考古学の分類学ともいうべき型式学によっらわれる場合が多い。そこで考古学の分類学ともいうべき型式学によっな化遺物には製作方法や形態、素材、装飾に時間的、地域的な特徴があ

立体的な遺跡の復元と社会・文化の理解には不可欠なのである。ことになる。このような文化遺物と自然遺物の分析結果を併せた理解が、家に委ねることになるが、文化遺物も必要に応じて自然科学分析にまわす一方、自然遺物は種の同定や年代測定、産地同定など、自然科学の専門

する広場、道、粘土採掘跡なども含まれることになる。し穴、チャシなどの構築物を指す。周堤墓はもちろん、貝塚や集落に付属し穴、チャシなどの構築物を指す。周堤墓はもちろん、貝塚や集落に付属

遺跡の性格を捉え、文化を理解しようとするのである。跡に残された遺物と遺構のさまざまな状況を分析することによって、そのぶして、遺物と遺構が残された場所が遺跡である。つまり、考古学は遺

研究史・モースと北海道

アメリカの動物学者エドワード・S・モースが、横浜から新橋に向かう車明治十(一八七七)年六月、腕足類の収集と研究を目的として来日した

り、科学的考古学の礎として評価されている。 (『大森貝墟古物編』)を刊行する。これが日本における初の学術的発掘であに発掘調査を実施し、十二年に英和両文の報告書『Shell Mounds Omori』ソードはあまりにも有名である。そして九月から十一月にわたって断続的窓から現在の東京都大田区と品川区にまたがる大森貝塚を発見したエピ

残している。 関する講演など多方面な活動を行っている。その過程で北海道にも足跡を写する講演など多方面な活動を行っている。その過程で北海道にも足跡を年再び来日した。動物学・生理学の教授として、専門の腕足類を中心とす東京大学の招 聘を受けたモースは一度帰国し、家族を帯同して翌十一

よって貝類やヒトデなどを採集した後、日本海を小樽に向かう。六日に上陸する。もちろん、目的は腕足類の収集である。函館で曳網にモースは大森貝塚発見の翌年、七月十三日横浜から海路函館に向かい十

篭に入れて置かれている土器の破片に目をとめるのである。 二十六日に小樽に着いたモースは町でただ一つの茶店に入った。そこで

場所に発掘に出かけ、多数の破片と若干の石器を採集したという。のという。モースは早速、鍛冶屋で発掘用具を作ってもらい、午後にその学校の生徒達に他の標本とともに持ち帰るよう言いつけて置いていったも尋ねてみると、外国人の先生が村の近くの貝塚から発見したもので、農

たのみという記載も遺している。モースのスケッチに一一個描かれているの二つを掘ったが、土器はまったく出土せず、骨の破片がわずかに出土しで直径二〇フィート、高さが二フィート半を数える低い塚があり、その中などの資料を目にしたことを記している。また、農学校近くに最大のもの校のブルックス教授に迎えられ、その一室で小樽の貝塚で集められた土器だのブルックス教授に迎えられ、その一室で小樽の貝塚で集められた土器

であった可能性は極めて高い。この塚は、直径六点、高さ七五だというその規模からすると北海道式古墳

きな平屋のスケッチが遺されている。したのは七月三十一日と翌八月一日の二日間である。宿となったかなり大で、その先はふたたび陸路をとって函館に帰着する。その間、千歳に滞在で、その後、千歳・苫小牧を経由して室蘭に至り、そこから森までは海路

マにしていたからに他ならない。
日本考古学黎明期の北海道でも貝塚や塚の存在が知られ、モースや札幌の大学で自ら貝塚を発掘し、腕足類と貝塚を遺したヒトとの関連性を研究のテーれたのも、モースが博物学的な好奇心を有すると同時に、すでにアメリカれたのも、モースが博物学的な好奇心を有すると同時に、すでにアメリカにの外人教師(ブルックスと思われる)によって資料の採集や発掘が農学校の外人教師(ブルックスと思われる)によって資料の採集や発掘が出する。

河野広道と千歳神社下の竪穴の発掘調査

擦文文化期の竪穴住居址を発掘調査している。昭和六(一九三一)年、河野広道はチャシ南東部の谷を隔てた台地で、

どの遺存状況から竪穴住居は火災によって倒壊したと考えられ、その原因ている。西壁に入り口があり、南壁に入り口または窓が認められた。炭なみを施した擦文式土器の深鉢や土師器、東北で生産された須恵器が出土しされた竈があり、この周辺から口唇部に横走する沈線、その上に斜めの刻竪穴住居は径三層ほどで円形を呈し、東壁に粘土、土器片、石等で構築

発された可能性を指摘している。 は死人があったために遺族が家を焼いて去ったか、または噴火によって誘

育てた。 ら、 が、 を学び、昆虫学の松村松年に師事、 導いた」 この調査の学史的な価値を少しも減じることがないのは言うまでもない。 の長男として生まれた広道は、 足りない点や部分的な誤りが指摘できるかも知れない。 じている。こうした年代観は大幅に修正されており、今の水準でみれば物 約二〇〇年前前後、 距てていないとされ、 の生活を終えて北海道学芸大学札幌分校の教授となり、 に着手する。 竪穴遺跡の上の火山灰層は寛文七(一六六七)年の樽前b火山灰、 北海道考古学を「地道な研究、ことに発掘によってこれを学問の正道に (一七三九) 北海道考古学の編年を体系化し、 北海道史研究の草分けである父常吉の薫陶を受け考古学、アイヌ研究 同年、治安維持法違反で同大を退職する。昆虫の研究を進めるかたわ (高倉) のは河野常吉だった。明治三十八 (一九〇五) 年、 モヨロ貝塚、 年の樽前a火山灰で、 全くチャシを廃したのは約一二〇年前前後であると論 北海道奥地におけるアイヌが全く竪穴を廃したのは 東釧路貝塚、 北海道帝国大学農学部、 昭和十 (一九三五) 礎を築いた。戦後一○年に及ぶ浪々 住居の倒壊と噴火とはあまり年代を 朱円遺跡など多くの調査を手掛 年同大助手となる 多くの考古学者を しかしそのことが 同大学院で生物学 常吉 元文

を果すことになると評される(藤本一九六五)。
場」の跡であるとするもので、アイヌ文化の上限をたどる上で重要な役割精神を考えながら「狩猟神の祭り場」すなわちアイヌでいう「もの送りて場という程度にしか理解されていなかった貝塚をアイヌのイオマンテの氏の論文「貝塚人骨の謎とアイヌのイオマンテ」は、先住民族のゴミ捨

この千歳神社境内での発掘は、北海道における近代的な方法で行われた

先駆的な調査であった。

美沢川流域の遺跡群と行政発掘

間空港を建設することになった。間専用空港の計画が進められ、千歳飛行場の東側または西側に、新たな民道の玄関口として発展を続ける。こうした航空輸送需要の増大に伴って民け、四十九年には第二種空港に指定され、道内航空路の拠点となり、北海千歳飛行場は、昭和二十六(一九五一)年九月北海道空港の指定を受

である。

う シュを組み、 年度に予定地全域の分布調査を行うことになる。新空港の予定地は七○○ ら、 Щ たって峰山巌、 なった。こうした広さの分布調査は北海道では例がなかった。 **診に及んだが、この段階では地主に了解が得られた四四九鈴が調査対象に** .灰が堆積する地域を一定の精度を保ちながら調査を進めるには相当な労 た。この重機使用に対しては 四十九年九月の分布調査では新たに三ヵ所の遺跡が確認されたことか (藤本一九八三)。 道教委、 開発局など関係機関が協議を重ね、 メッシュの交点を調査地点として重機で掘削しながら実施さ 大島直行らは調査の均一性を保つため調査区域全面にメッ しかし、 七〇〇診という林地を、 「遺跡をこわす」という抗議があったとい 千歳市教育委員会が五十 **西査に当**

北海道では重機を使った分布調査が主流になっていく。査で美沢川流域を中心に二六万㍍の遺跡が確認されている。これから後、力が必要であり、重機なしでは成しえなかったことは明白である。この調

町 博物館が主体である。 駆けになったのが函館空港の建設に伴う発掘調査だった。 道教育委員会は いたが北海道の場合、 核的な大学が調査指針を提示するとともに、人材供給などの役割を果して が 港などの建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査が行われるようになる。その先 九九三)、市町村の負担が大変であったことはいうまでもない 「村や研究者にお願いして対応」するという立場をとっていたから :北海道はその方式は取っていなかった。また他府県の調査では地域の中 和四十年代の後半から、北海道でも経済の高度成長に伴っ 「開発に伴う発掘調査を道教委で直接行うべきでなく、 北海道大学はその役割を果すことはなかった。 本州では都府県教委が緊急発掘を直接手がけていた 調査は市立函館 た道路、 山 北海 市 空

発掘調査が行われた。 路町遠矢チャシの発掘を皮切りに、 には文化財係を新設し、 野の研究者で、 備事業など大型開発事業が目白押しに計画される中、 年から五十四 しかし、 新千歳空港、 当時星園高校の教諭であった藤本英夫を採用し、 (一九七九) 体制を整えていくことになる。そして四十九年釧 高速道路の建設、 年まで新千歳空港建設予定地で道教委による 五十年広島・千歳間の高速道路、 苫東工業基地開発、農業基盤整 四十六年道教委は在 四十九年 五十

遺構が出土した(第二編第二項参照)。群、水没した美々8遺跡、動物形土製品など各時期にわたる豊富な遺物と群、水没した美々8遺跡、動物形土製品など各時期にわたる豊富な遺物と美沢川流域を中心とした新千歳空港建設予定地の遺跡からは、周堤墓

び、その後全道の市町村の職員として飛び立って行った。その結果、新手調査には本州の大学を卒業した多くの考古学徒が参加し、この地に学

ある。 歳空港の発掘がその後の道内における発掘調査のスタンダードとなるので

いる。数で数量化する今日の埋蔵文化財行政確立のきっかけとも位置付けられて数で数量化する今日の埋蔵文化財行政確立のきっかけとも位置付けられてこの発掘はまた、北海道初の大規模発掘であり、遺跡の発掘事業量を係

くと、 三)という。 とは最も良いことだと思うし、 今も困っている所も多いと思う。 く話し合われなくなっていった。「出土した遺物の保管には泣かされた。 た自治体の要望である「出土遺物の現地での一元的保管と活用」 発掘の主体が道教委から財団法人北海道埋蔵文化財センターに移ってい 当初道教委、 現地保存はよしとして問題はその形と内容である 千歳市、 苫小牧市、 またそのように対応してきた」 出土した遺物は現地で保存、 開発側との協議で話し合われてい 活用するこ (山本一九九 がまった

用など他の府県とは異なる道を選んだのである。結果的に道教委は市町村との役割分担、発掘で得られた遺物の保管、活

遺跡保存

して、 土偶 年、 もある。 A遺跡 道による発見短報が初出のようである。 点と一つのチャシが残されている。この遺跡については昭和七年の河野広 川がある。全長二・五㌔ほどの小河川だが、この流域にA~Wの二三の地 沿内外の楕円形や隅丸方形で、 ウサクマイ遺跡群 A遺跡で土砂採取が行なわれた際に付近の児童によって蕨手刀と男性 (ともに市の指定文化財となっている) が採集されたのをきっかけと 藤本英夫が発掘調査を企画する。 の発掘調査が実施され、 頭部付近に扁平な礫を二個置く例が多く、 市街地から西に約五世、 二八の土壙墓が発見されている。 墓壙の底四隅に柱穴様の穴がみられる例 昭和三十八・三十九・四 時を経た昭和三十八(一 支笏湖へ向かう途中に内別 頭は東南向きで 墓壙は径 十一年に 九六三)

の副葬品に共通する金属器がみられる。に、蕨手刀・横刀、各種の刀子、錫製飾環など東北地方北部の末期古墳横向きに寝た屈葬であるという。副葬遺物には北大式土器や土師器のほか

つオホーツク式土器一点が伴っている。
また、ウサクマイ遺跡群の入り口部分に当たるウサクマイN遺跡が、交場、刀子、鉄斧、小札、針、釘などの金属製品とガラス玉が出土している。また擦文時代では住居址一一軒、墓と考えられる土壙と擦文土器が主体でまた擦文時代では住居址一一軒、墓と考えられる土壙と擦文土器が主体でまた擦文時代では住居址一一軒、墓と考えられる土壙と擦文土器が主体でまた擦文時代では住居址一一軒、墓と考えられる土壙と擦文土器が主体でまた。また、ウサクマイ遺跡群の入り口部分に当たるウサクマイN遺跡が、交また、ウサクマイ遺跡群の入り口部分に当たるウサクマイN遺跡が、交また、ウサクマイ遺跡群の入り口部分に当たる

跡群と評価できる。き窯まで各種の遺構と遺物が発見されており、後世に伝えるべき一級の遺重な内容を有している。また、他の遺跡でも縄文時代早期から近代の炭焼重な内容を有している。また、他の遺跡でも縄文時代早期から近代の炭焼ー 両遺跡の成果はともに南北両地域とのつながりや交流の豊かさを示す貴

買収され公有化された。 買収され公有化された。 とともに一四六診が史跡に指定されている。このうち民有地九八診が市に し、その計画を白紙撤回に持ち込むことに成功した。当遺跡群は自然環境 五十年から三ヵ年分布調査を行い多数の遺跡の発見と遺跡の広がりを確認 たが、この沢を挟む丘の上にゴルフ場の開発計画があった。市教委は昭和 この内別川は支笏湖の伏流水を水源としており、千歳の飲料水でもあっ

石狩低地帯南部にある。 道特有のこの墓は道央から道東に見られるが、その大部分は千歳・恵庭のの土を周囲に盛り上げて土手をつくり、竪穴内に個々の墓を設ける。北海期後半に出現した共同墓地である。直径数点から数十点の竪穴を掘ってそ期後半に出現した共同墓地である。直径数点から数十点の竪穴を掘ってそ

> 二十四 この大きさによるものであろう。 海道庁告示第八四四号をもって、 ぶ。大正十三年河野常吉がアイヌの「チャシコツ」として報告したのは 周堤墓は第二号で、 第三号 二号・第四号が貫かれていることから、 チャシ」となり、 キウス周堤墓群はチャシ川の標高一六~一八㍍の流域に所在する。 ・第四号と第二号・第五号の威容は古くから知られていた。 (一八九一) 年に開通した由仁街道 内務省所管となった(『増補』)。 外径七五次、 内径三四景、土手の高さ五・四景にも及 史跡名勝天然記念物仮指定史蹟キウスの 昭和五 (一九三〇) 互いに連結して並立する第 (現国道337号)によって第 年六月二十二日、 最大の 明治 北

環状土籬から構造や用途をより的確に表す周堤墓に改称された。電和三十九・四十年に第一号・第二号の小規模な発掘が大場利夫・石川となる。昭和五十三年測量調査が実施され、従来見落とされていた第一となる。昭和五十三年測量調査が実施され、従来見落とされていた第一となる。昭和五十三年測量調査が実施され、従来見落とされていた第一となる。昭和五十三年測量調査が実施され、従来見落とされていた第一一号・第二号の七基と、右岸の第六号の計八基が国史跡に指定され、同時に名称が置状土籬から構造や用途をより的確に表す周堤墓に改称された。

の管理団体に指定された。 平成二十一(二〇〇九)年八月二十七日、文化庁長官より千歳市が史跡

昭和三十八・三十九年にここを発掘した松下亘はその重要性にかんが

る。 掘が行なわれ、その後、保存施設が建設されて五十一年より公開されてい掘が行なわれ、その後、保存施設が建設されて五十一年より公開されてい目的として、市教委による発掘調査の実施が決定された。昭和五十年に発後年月をへて老朽化した施設に代わる恒久施設の建設と遺跡の性格究明をみ、市教委に貝層断面の保存施設の建設を依頼し、その実現を見た。そのみ、市教委に貝層断面の保存施設の建設を依頼し、その実現を見た。その

施している。 分布調査 市教委は昭和五十三・五十四年に千歳市全域の分布調査を実

より正確な情報を得るためには掘削を伴う調査が必要であった。面の遺物を頼りにする踏査を主とする分布調査には不確定な要素が強い。の内容や範囲を正確に把握することは困難な場合が多い。したがって地表墓や比較的時期の新しい擦文期の竪穴住居を除けば地表からの観察ではそ墓が出の火山灰(樽前a火山灰)が地表を厚く覆っていることから周堤

した。 年にわたり慣習的に使われているものや、 ている。 地名散歩』を参考に、 陸軍参謀本部陸地測量部発行の五万分の一の地形図、 るものはそのまま使用した。その他の遺跡名は明治二十九(一八九六)年 形を勘案して五〇〇〇分の一の現況図に遺跡の範囲を記入した。 この調査で得られた情報を基に、 各開発機関に配布され、 五万分の一の地形図は一万分の 主に河川名などの旧地名(アイヌ地名)にもとづい 当該区域の開発には協議を行うよう要請 過去の分布調査の成果を加え現地の地 発掘調査その他で報告されてい に縮小、 印刷したものを図書 長見義三の『ちとせ 名称は長

多い。中でも末広遺跡の東側は遺跡公園として六・八鈴が保存されてい調査により遺跡の取り扱いの協議で、開発工事の変更、保存された遺跡も査により遺跡の所在、範囲などを確定させていった。開発行為に伴う分布その後、開発行為はこの分布図をもとに、さらに掘削を伴う詳細分布調

る。

年代測定法・判定法

原子が となる。 らの補給が止まり、 ころが動物が呼吸を停止した場合や、 から、 く。 るので、 素原子は各組織にいきわたる一方で、一定の速度で窒素原子に変わってい 光合成によって二酸化炭素の形で体内に取り込んでいる。体内に入った炭 る動物は酸素やそれ以外のものと一緒に炭素を吸い込んでいるし、 的な数字を得ることができることと、 止まったか、 る方法がある。 年代値を出した方法である。多用される理由は、「何年前」という具体 炭素14法ともよばれるこの方法は、 絶対年代測定法 しかし、 体内の炭素の量は大気中の炭素の量と同じで、 一定の速度で壊れて窒素原子に変わっていく原理を用いる。 測定試料中の炭素4の残量を測ることで、今から何年前に呼 ある一定量の炭素14は五七三○年で半分になることが分かって 光合成が停止したかを知ることができる。 呼吸や光合成を行なっている間は常に炭素が補給されること 柏台1遺跡や祝梅下層遺跡三角山地点のおおよそ二万年前 世界的に用いられている年代測定法に放射性炭素によ 体内の炭素14は一定の割合で壊われて減っていく一方 植物が光合成を停止すると、体外か 測定試料の手に入りやすさにある。 大気中に含まれる一四の重さの炭素 減ることはない。 植物も 呼吸す

したのは何日前か?」という風に考えるとわかりやすいかもしれない。五今一○○○円残っている。さて、一万円持っていたのは、あるいは使い出○年前ということになる。「一万円もっていた。毎日一○○○円使って、測定試料の炭素44の量が半分になっていたら、その試料の年代は五七三

を半減期というが、実際の測定時には五五六〇年を用いている。七三〇年が、ここでは一〇〇〇円に相当する。この五七三〇年という数値

などを用いて、ほぼ四万年前から五万年前までの測定が可能である。この方法では動物の骨・歯・角、貝、サンゴ、木材・炭化物、泥炭、鉄

は数値年代・数値年代測定法とよぶ傾向が強い。あるいは「信頼できる年代」という誤解を招きやすいということで、最近を絶対年代測定法と称していた。しかしその名称では「絶対に正しい年代」炭素14法のように数値をだす年代をかつては絶対年代といい、その方法

跡 料であれば、 残されることになる。 度熱を受けた試料が必要となる。四○○℃で一時間程度の加熱でそれまで 黒曜石の生成年代を示すことになる。 ら、 用する。試料中のトラックの密度はウラン濃度と年代に比例することか に蓄積されたトラックが消えて、冷えてから再度核分裂によるトラックが が核分裂(フイッション)を起こして、キズ(トラック)を残すことを利 適用しやすいのがフイッション・トラック法である。黒曜石を例に上げる の試料が測定されている。 数値年代測定法には他にフイッション・トラック法、 年代値を算出することができる。 熱残留磁気法、 溶岩が冷えてガラス質が出来上がった段階から、 その時の年代がわかることになる。この方法でも、 カリウム・アルゴン法などがあるが、 したがって、 遺跡が営まれていた時に熱を受けた試 ただ、 遺跡の年代を知るためには、 通常の黒曜石を測定すると、 内部でウラン二三八 熱ルミネッセンス 北海道の試料に 柏台1遺 一定程

数のものや事象の先後関係で表したものや、設定した考古学の時代区分のの法則による「A層はより下位にあるB層より新しい」などのように、複学の型式分類による「A式土器はB式土器よりも新しい」とか、地層塁重相対年代決定法 絶対年代に対して、相対年代という言葉がある。考古

もいわれはじめている。どこに属するのかを表したものだ。先の数値年代に対して、非数値年代と

代測定法との違いを示しうるということである。

代測定法との違いを示しうるということである。数値年代と非数値年代という区分はわかりやすい表現だ。ただ注意すべかのまり、独自に○○年前と出せる方法が、絶対年代測定法という語を重要視し立に年代を算出できる」という意味で絶対年代測定法という語を重要視し立に年代を算出できる」という意味で絶対年代測定法という語を重要視し立に年代を算出できる」という意味で絶対年代測定法との違いを示しうるということである。

間で比較する方法であり、独自に数値年代を出せる方法ではない。 る可能性が高いことを知っておく必要がある。 用いた方法と同列に扱われると、 である。それらが炭素14法やフィッション・トラック法などの同位元素を る年代標準資料を基準として、 なる。この方法は黒曜石の表面に発達する水和した層の厚さを複数の資料 ように自然の時計の役割を果たす放射性同位元素を用いる方法だ。 独自に年代を出せる方法とは、 同じような比較の方法をとるマンガン法、 数値年代測定法というと、 たとえば黒曜石水和層法も含まれることに ○○年前という数字を出すことはできるの 大きな誤解を生むと同時に混乱の元にな 炭素14法やフィッション・トラック法 ウラン法なども含めて、 あ

引用・参考文献

モース、 国 加藤晋平・鶴丸俊明『花泉下金森遺跡』花泉町教育委員会 「評伝知里真志保」北海道新聞夕刊 千歳村火山灰下の竪穴住居」 石川欣 訳 『日本その日その日』 『人類学雑誌』五十巻四号 一九六九・二・三~四・二五 1 5 3 一九七〇年 一九七六年/E 一九三二年 /河野広道 / 藤本英夫 「胆振

夫·石川徹『千歳遺跡』 一九六七年

地域にみる埋蔵文化財」『千歳市における埋蔵文化財-上-』一九七九年/大場利下』一九七九・一九八〇年/同『美々貝塚』一九七六年/大谷敏三「千歳市東部流域における考古学的調査』一九七八年/市教委『千歳市における埋蔵文化財上・あれこれ』一九九三年/桜井清彦他『烏柵舞』一九七五年/大谷敏三他『苗別川跡と私』北海道新聞夕刊 一九八三十月二十六日/山本慎一『北海道文化財保護

第二節 文化の移り変わり

第一項 旧石器

北海道の旧石器文化

そのヨーロッパでは、 り、また最近では前期と中期を併せて早期とする立場をとる研究者が増え 万年前)、 銅器時代→鉄器時代という当時のヨーロッパにおける時代区分のひとつ を指す。この区分は一八六五年、 紀更新世にあたる。数値年代でいうと約二五〇万年前から約一万年前まで で区分する際の最古の段階で、地質学の区分 「石器時代」を旧石器時代と新石器時代とに細分したのがはじまりである。 研究の経過旧石器時代とは、 後期 (三万~一万年前) に細分する。この年代幅には異説もあ 前期 (二五〇万~二〇万年前)、 イギリス人J・ラポックが石器時代→青 第一節でふれたように人類史を考古学上 (地質年代)では新生代第四 中期(二〇万~三

つつある。また、「岩宿時代」と呼ぶあらたな試みもある。 日本では、昭和二十四(一九四九)年、明治大学の杉原荘介による群馬日本では、昭和二十四(一九四九)年、明治大学の杉原荘介による群馬日本では、昭和二十四(一九四九)年、明治大学の杉原荘介による群馬田本では、昭和二十四(一九四九)年、明治大学の杉原荘介による群馬

なり合った文化層(人の文化的行為を残した地層)が相次いで発見された地に厚く堆積した富士山の火山灰土(関東ローム)のなかに、何層にも重発にともなう緊急発掘調査をきっかけとしていた。相模野台地や武蔵野台この時代の研究の大きな進展は、昭和四十年代の関東における大規模開

か埋 二者は一 れた。 およそ幅 のである。 ような過程を経て、 に仕上げた石器)→槍先形尖頭器(石槍の形に仕上げた石器)→細石刃 比較検討され、 「解へと向いている。 動物を対象とする狩猟具の変遷過程が明らかにされたのである。その め込まれて使われたものである。 (図1-3)。これらはともに槍の先端につけられた部品であり、 それによると、 点ごとに柄の先につけられ、 一だ以下のカミソリのような形の石器)が入れ替わるように出 各遺跡の地下数量におよぶローム層に残された石器群は相互に ほぼ三万年前から一万年前までの文化の変遷が明らかにさ 現在の関東地方の研究は文化 大きな流れとしてナイフ形石器 細石刃は骨などの槍先の側縁に何枚 いずれにしても突き刺す道具であ (層) ごとのより詳細な (ナイフのような形 お

樽岸遺跡の本格的な発掘へとつながっていく。代の追求を目的とした最初の発掘としてよいだろう。それは翌二十九年の米村喜男衛とともに豊田遺跡の小発掘を試みる。北海道における旧石器文志村高川はこの年、白滝の遺跡を旧石器時代のものと判断するとともに、九五三)年から進み始める。北海道での旧石器発見を志して東京から来た九五三)年から進み始める。北海道での旧石器発見を志して東京から来た九五三)年から進み始める。北海道での旧石器時代研究も、岩宿遺跡の発掘後の昭和二十八(一一方、北海道での旧石器時代研究も、岩宿遺跡の発掘後の昭和二十八(一

る。 に北海道の旧石器時代の輪郭が見えはじめていた。 究法の模索の時代である。 を継続すると同時に、荒屋型彫器 発掘調査を誘発することになる。 これらの発掘はその後の加藤晋平・大井晴男・藤本強らの常呂川流域で この 連の調査、 「系統を追求しつつその活動範囲を道北から道東・道南に広げて 研究の初期から一 名取武光・松下亘らの後志での調査、 九八〇年までは発掘、 そのような中でも着々と事実が蓄積され、 一方吉崎は芹沢長介とともに白滝の調査 (彫刻刀に似た刃先を持つ石器の一タイ 年代にかかわる議論、 大場利夫の全道での 徐 研

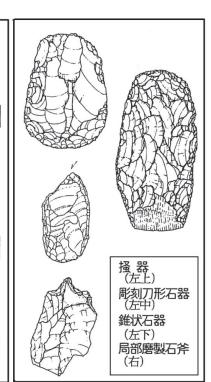


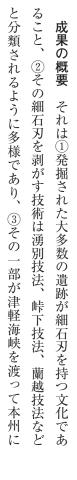
図 1 - 3 関東の旧石器時代の変遷(堤2002)

細石刃

尖頭

器

フ形石器



の連続性とは異なる道を辿っていたことを物語っている。は、本州のとくに関東のナイフ形石器→槍先形尖頭器→細石刃という文化角山地点のような不定形な剥片石器の文化があるなどである。このことれないこと、⑤本州に広く展開する本格的なナイフ形石器が一部にしか見ら至っていること、④一方でそれらの技術はシベリアとの関連を示すものが至っていること、④一方でそれらの技術はシベリアとの関連を示すものが

大枠は見えてはきたものの、しかし、北海道の旧石器時代研究には大きな障壁があった。それは、関東を除く他地域に共通することだが、関東な障壁があった。それは、関東を除く他地域に共通することだが、関東などが得られないために信頼できる数値年代を得ることもできなかった。 たが得られないために信頼できる数値年代を得ることもできなかっために 対応 が の で あった。 同時に、 当時から現在などが得られないために信頼できる数値年代を得ることもできなかったのである。

は一九八○年代に入ってからのことである。は一九八○年代に入ってからのことであり、関東とおなじように潤沢ないの調査であったため、その発掘面積は微々たるもので、発掘される遺物もの調査であったのである。そのような研究は、関東とおなじように潤沢などんどなかったのである。そのような研究は、関東とおなじように潤沢などんどなかったのである。そのような研究は、関東とおなじように潤沢などんどなかったのである。そのような研究は、関東とおなじように潤沢などんどなかったのである。そのような研究は、関東とおなじように潤沢などなが、文化内容を理解するための総合的で詳細な分析にいたることはほどの調査であり、限られた予算と日数では一九八○年代に入ってからのことである。

である。当時は最も古いもので一万四〇〇〇~五〇〇〇年前ぐらいかとい見が相次いだ。そのひとつが、細石刃文化が約二万年前にさかのぼる発見大規模発掘が始まると考古学が対象とする全時代にわたって、数々の発

であった。 うのが一般的であった。それを覆したのは一九九八年の柏台1遺跡の発掘

北海道最古の石器群

石器群である。これらは炭素14法によって約二万年前の年代があたえられや上士幌町嶋木遺跡などの不定形剥片石器の一群と、柏台1遺跡の細石刃理化学的な測定年代を持つ北海道最古の資料は祝梅下層遺跡三角山地点

ている。

三万年前で、昭和五十年代初頭にえられた年代が今も最古である。にもみられる。関東ローム層に累層的に残された石器群の最古の年代は約来三○年以上も最古の位置を保っているのである。同じようなことは関東実はこの最古の年代は昭和四十年代の後半に測定されたのが最初で、以

散乱木遺跡で四万数千年前の日本最古の石器を自ら掘り出した。ぎらぎ時に考古展をみて旧石器文化に興味をもった青年・藤村新一は、 中に並べられた埋納遺構を発掘したのである。 年には六〇万年前の地層から柱穴などの国内最古の建物遺構や石器が穴の ○万年以上前の石器を、 は約一七万年前の石器を、平成六年には五○数万年前の石器、 九八一) 年から平成十二 (二〇〇〇) ある。それは記憶に新しい 一九年間に一八〇以上の遺跡発掘に関与して昭和五十九(一九八四)年に しかし、これらをはるかにさかのぼる年代値が陸続と発表された時 十 「ねつ造」事件が進行していた昭和五十六(一 一年には七〇万年前以上の石器を、 年までの一九年間である。 そして十二 七年には六 宮城県座 それから 期が

し、そのほかはほとんど発掘経験のない学生や一般人が掘り出していたと五○万年前の石器を掘り出すのである。いずれの場合も最初は藤村が発見発掘を続けて二○万年前の石器を掘り出し、また二○○○年には清水町でその間、北海道にも足をのばして一九九八年から三年間、新十津川町で

となり、 たともいう。とんでもない古さの石器の発見はマスコミの格好の取材対象 いう。また、 いつしか「神の手」とあがめられるようになっていく。 藤村が不在の時にはほとんど遺物が発見されることはなかっ

穴を掘って遺物を埋める現場をビデオ撮影することに成功した。 新十津川での早朝の不審な行動を確認した記者たちは、とうとう宮城県で 道支局の遺跡での張り込みであり、 これらの発見がすべてねつ造であることが判明したのは、 その最初が新十津川でのことである。 毎日新聞北海

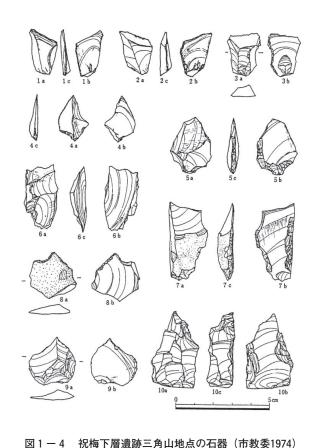
認されたのである。 べての遺物がより新しい時代の石器であり、 つと思われる地層に埋めて自ら発見するという、自作自演であることが確 その後の日本考古学協会の特別委員会の調査で、 意図的にそれら古い年代を持 藤村が関与したほぼす

料に戻ることになった。 その結果、 本州・ 北海道の最古の石器は、 ねつ造が始まる一九年前の資

祝梅下層遺跡三角山地点

壊され、 にのびる延長二○○㍍の独立丘である。その大部分が土砂採取によって破 (側縁に連続して古砂丘が分布している。 、山砂丘は、 不定形の剥片とナイフ様石器 わずかに北側と一部が残されていたにすぎない。 現沖積面との比高差が約一○㍍、幅約七○㍍でほぼ南北方向 千歳川に沿う沖積面より一 この 「千歳古砂丘群」 現在は消滅して 段高い平坦面 の一つ三

半が土取りで消失していたが、ナイフ様石器や尖頭石器、 やかな斜面の支笏軽石層の風下層から発見された (図1-4)。 軽石層下のローム層から黒曜石の剥片が数点発見され、 古砂丘の上部にあった約一万八〇〇〇年前の噴出年代をもつ恵庭 年発掘調査がおこなわれた。 遺物は中央の平坦部を挟んで南北の緩 昭和四十八(一九 削器、 南側は大 敲石な a降下



をしており、 どが出土している。石核は剥片を剥ぎ取る位置を変えるため、 ている。 剥離された縦長の小形剥片をナイフ様石器などの素材にもち サイコロ 状

らは不定形剥片石器、 その周辺などでも確認されており、 種の石器は柏台1遺跡でも八ブロック出土している これに類する石器は十勝の上士幌町嶋木遺跡のほか、 台形様石器の名でも呼ばれてい ほぼ全道的な広がりをみせている。 函館、 ② 1 1 帯広および 10

0)

られているものの中では北海道最古となる。この不定形石器に技術 論のまととなっている。 先行する時期のものにきわめてよく似ていることから、 的に類似する資料は本州東半に広くみられ、 これらは炭素14法によって約二万年前の測定年代を得ており、 関東地方ではナイフ形石器に それとの関係が議 年代が得 · 形態

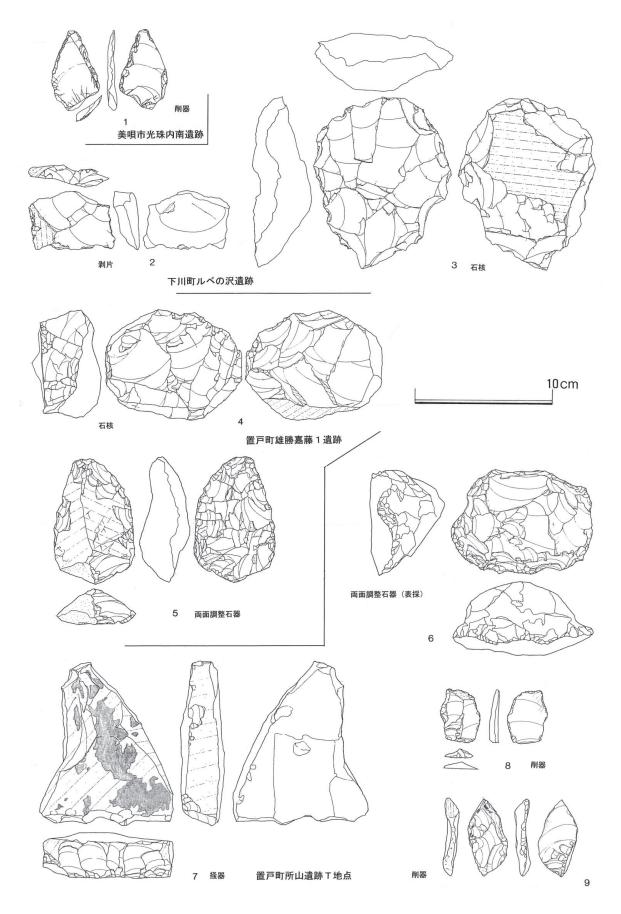


図1-5 後期旧石器初頭?の石器

相台1遺跡にはあとで触れるように細石刃を中心とする石器群もある。 相台1遺跡にはあとで触れるように細石刃を中心とする石器群もある。 をだろう。 がであることから、柏台1遺跡における両者が接触しているかのような状かであることから、柏台1遺跡における両者が接触しているかのような状に、この細石刃技術はシベリアつまり北方に関連をもつであろうことは確けるのか、それとも時間差をもっているのかの追及の過程で明らかにないであることがほぼ確かになった。南方系の不定形石器群に対にがある。

いる。 シベリア・アルタイの中期旧石器、「ムスティエ文化」 内容や成り立ちを知るためにも、 ていない。 灰下の木炭層の下から石器が出ている。 中でも置戸町所山遺跡T地点の資料は興味深い。そこでは大雪御鉢平火山 梅遺跡三角山地点、 る時期のものであることが予想される。したがって、これが嶋木遺跡、 は炭素4法に供する試料を得られなかったため測定値はないが、技術的に の可能性を持つひとつは下川町ルベの沢遺跡出土の石器群である。ここで は予想されるのだろうか。三角山地点や柏台1遺跡等の文化のより詳細な ○○○年前である。 た北海道の旧石器文化ではあるが、それよりも古い遺跡、 平面的・ その特徴から、 同種とみなされる資料は他にもいくつかあるが 時間的広がりの確認 二万年前の石器との間を埋める手掛かりは今もって確認され 柏台1遺跡の石器群に先行する可能性は十分にあるだ しかし、ここの資料自体数が少なくて内容が不明であ おそらく中期旧石器から後期旧石器の過渡期に関わ その追求は必要である。 ねつ造の発覚によって二万年前にもどっ その木炭層の炭素14年代は三万二 のものに類似して (図1-5)、その 現在のところそ 石器文化の存在 祝

本州各地でも藤村が関与しない三万年前以上の古さを持つ遺跡は点々と

おいてもさらに地道な調査研究と資料の蓄積が必要である。節でも触れた岩手県花泉町の花泉下金森遺跡などである。いずれの地域に発見されているが、まだ北海道と同様な状態にある。そのひとつが、第一

石器製作技術の変遷と北海道の石器

ŋ, の段階でも一部に打ち欠きはみられるが、一個の石を一個の道具としてい を使うことにする。猿人は約六○○万年前にアフリカに誕生するが、 る技術が出現する。 量に剥がして、 が新人の段階にはいると、 く少ない。しかもその剥片から作られる道具の種類も限定的である。それ をみせるが工程の制限もあって、 流になる。 決まった剥片をとって、それをそのまま用いたり道具に加工することが主 量も限定的である。次の旧人段階では母岩から二等辺三角形のような形 から複数の道具を作りだす段階に入ったが、まだ剥片の形も不定形で、 る段階だ。次の原人段階には石を打ち割って道具を作る技術が主流にな ら、おそらくまったく加工しないでそのまま使っていたことだろう。 から石器を作っていたという証拠はない。 はあまり使われなくなっているが、説明に便利な用語なのでここではこれ 石器製作技術の変遷 母岩とカケラ(剥片)を加工して使用した石器もみられる。 後の使用のことを考えて定型化した剥片を取る点で数段の進歩 **彫器、** これを石刃技術という。 掻器、 猿人・原人・旧人・新人という言葉がある。 細長い板状の剥片 錐、 一個の母岩から剥離される剥片の数はご 槍先形尖頭器など各種の道具の材料にす 石の道具を使っていたとした (石刃という)を連続的に大 個 最近

らに驚愕の技術が出現する。それが細石刃技術である。る新人の時代・後期旧石器時代の石刃技術である。そしてその後半に、さ方向に歩み続けてきた。その頂点が、現段階では三万年前に始まるとされこのように人類の歴史は貴重な石材をいかに合理的に利用するかという

甲 れば ソリ 大きさの 縁に刻まれ 自分達の 対に この時代の わ -骨に刺さった状態の 埋 :抜け落ちたり欠けたりすれば、 ナイフと呼び習わしている 仕上げられる。 れ続 6.1 6.1 め込まれたナイフ のような形 石刃技術 細 その内の 石核 け、 のである。 生活の場で確保することができ、 石 刃 た溝に数個植え込まれ、 が使われているし、 中近東の農耕・牧畜文化では、 石器は強い (剥片を剥がす母岩) 一〇枚前後を柄に装着すれば、 細 そうしてできた道具を植刃器と呼び 剥片の一種である。 石刃とは、 究極の合理的な道具といえる。 植刃器も見つかっている。この道具は新石器時代も や漁撈用 酸性土壌に残されていて骨が残りにく 幅 (図 1 6 ° のヤスが発見されている。 数 その部分に新しい細石刃を埋め込んでや 中国ではナイフとした例がある。 ずから一 から数十枚単位で剥がすことが可 全体として一つの 細石刃は木や骨で作られた槍先の側 細 ○『,内外の薄く幅 石刃を植え込む柄となる骨は 小麦の刈り取りに使われ 石刃は槍先形尖頭器くら 一つの道具が完成する。 シベリアでは実際に骨 槍先などの道具など 植刃尖頭器とか植 また、 0 せま Ŋ 野牛の ために植 北海道 11 た鎌 能で 力 刃 肩 0

が

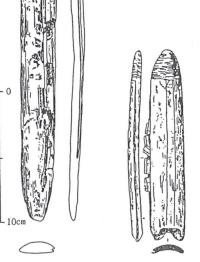


図1-6 ロシア・ココレボ遺跡(左)とコ スティンキ遺跡(右)の植刃ナイフ 共に左縁に溝が切られており、右例には細石 刃が残っている.

だろう。 刃器はまだ発見され てい な e V が、 どこ かに眠 つ 7 いる 可能性 は十 分にある

三点にの とその 削器 たことを示している。 フ形石器や尖頭器文化とも大きく異なるところである。 ては槍先形尖頭器や一 ?狩猟 北海道 から作られた各種の彫器 種 (削り具)、 量 に大きく依存し、 類と量は本州にはみられない豊かさを示してい ぼる掻器はその典型的な例である。 の細石刃技術 掻器の量は卓越していて、 錐形石器や、 部を磨いた斧形の 北 本州以上に骨の加工や毛皮の利用をおこなって 海道 (彫刻刀形の石器)、 磨 0) 石 細 石刃文化には、 砥 本州との細石刃文化はもちろんナイ 石 石器を伴うことがある。 敲石などが伴 このことは北海道の 掻器 細 . る。 (皮なめ 石刃 柏台1遺跡 特に彫器 0) 他 時期によ の その 石器文化 石 道具) 0) 0) 刃とそ 種 道 四 類

類

0

れ

札滑型の が この他に 0) 終末までほぼ一 ?ある。 細 さまざまな技法 石 刃製作の技 も北海道には白滝型、 ほ か、 万年間も続くことが判明したが、 市内の各遺跡から出土している忍 術が継起した。 細 石刃文化が少なくとも約一 広郷型、 柏台1遺跡 幌加型、 の蘭越型、 この 一万年前 路子型、 紅 葉 Щ 間 から旧石 型と呼ば 北海道 ルイカ2遺 下型 石器時 はれるも が には各 あ る。 跡 代 0 0

滝型 向に という工 0) をもち 的 部 そのなかでも、 何 は 分 に知られている 回 両 で甲板に相当する平 程を加えている。 細 面が加工された石槍のような素材を作り出し、 か割りとって舟の 石刃を剥がす時の滑り止めに、 札 滑型・ 図 1 | 前 坦 ような形を作り出 白 7 者はシベリアに広く見られる技術であること 面に力を加えて、 滝型を作り出す それはまず、 甲板部分に線状のキズをつ す。 技 術は ずんぐりして先端が その 石刃を剥が 湧別技 あと札滑型 その縁辺を長 法と呼 は ば 方 れ、 舟 の端 け 0 軸 円 世 É 方

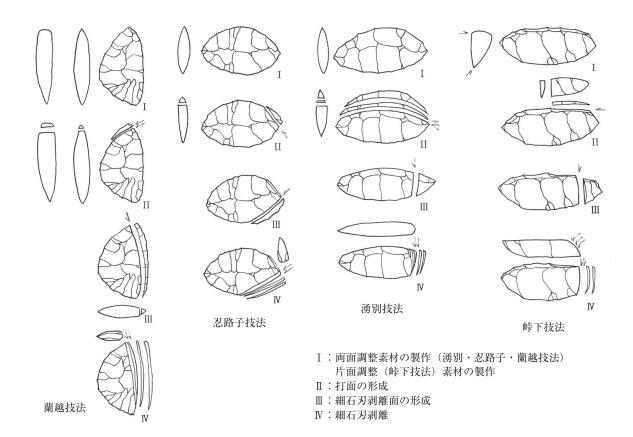


図1-7 千歳にみられる細石刃技術の代表例

16遺跡で出土している。

9

峠下型はキウス7遺跡・オサツ2遺跡・メボシ川2遺跡

オサ

南 南 端

していることが判明している。

山口県まで達している。

また広郷型も山形まで、

白滝型は新潟まで

とつである。

広く展開している技術である

峠下型は現在のところ本州には見られない

が、

シベリアからアラスカに

千歳市内の細石刃文化は、

数が多く大型の遺跡がみられるのが特徴

のひ

つ遺跡は丸子山遺跡・祝梅上層遺跡・

メボシ川2遺跡・オサツ16遺跡

図

今後の北海道の先史文化の解明に欠かせない手続きである。

特に忍路子技法を持つ遺跡が特異であり、

その詳細な分析は

忍路子型を持

から、

おそらくその

地方から伝えられたであろう。

そしてこの技術は津

海峡をこえて、

東北・関東

· 中 部

関西に転々と痕跡を残し、

なんと本州

もたず 生産する技術である蘭越技法を持つ石器群の により遺物・ 跡三角山 資料を伴う石器群のブロック 位にある。 降下年代が一・六万から一・九万年前と推定される恵庭a降下軽石層の下 上にある微高地にある。 九九八) 柏台1 石器群は、 掻器を主体とする不定形剥片石器群の 遺跡 地点と同じく千歳古砂丘のひとつである。 厚く堆積した軽石層に覆われ、さらにその後の地下水位の 年に道埋文によって発掘された。 ・遺構・ 細石刃を生産する技術のひとつである美利河技法に関連する 柏台1遺跡は市街地から南東約二點に位置 埋没林などが良好な状態で遺存していた。 この微高地は北約五〇〇㍍に位置する祝梅下層遺 (集中部をさす) ブロ ブロ 遺物包含層は地表下約四點、 ック八ヵ所である ック六ヵ 平成九、 所、 また別な細 所、 十(一九九七、 石刃技法を 火砕流台 石刃を $\widehat{\mathbb{Z}}$ 上昇

た。

8

同時にこれら遺物集中部からは炉跡

礫群などの遺構も発見され

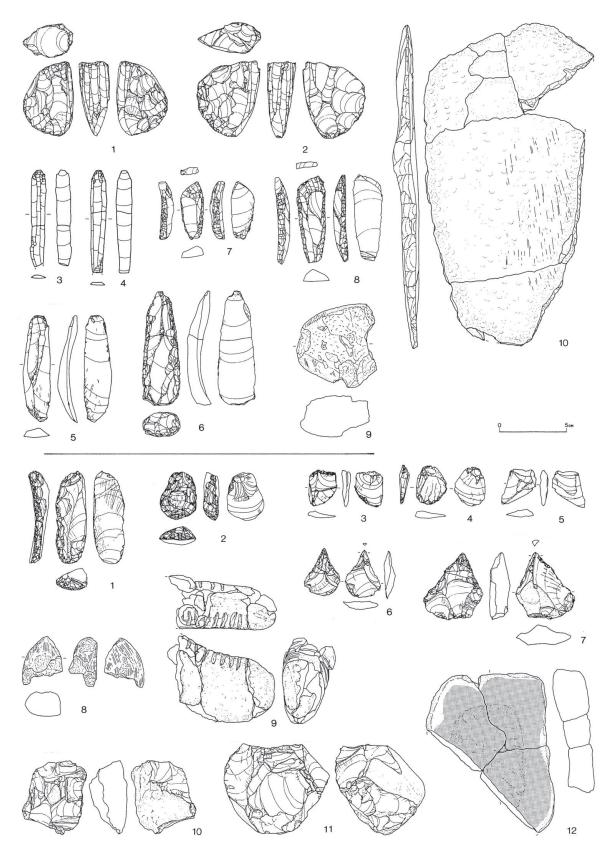


図1-8 柏台1遺跡の遺物(道埋文1999) 「上段:細石器石器群-1・2:蘭越型細石刃核、3・4:細石刃、5:石刃、6:掻器、7・8:彫器、9:顔料関 連遺物、10:台石 下段:1・2:掻器、3~5:細部調整剥片、6・7:錐、8:顔料関連遺物、9:刻みのある石製品、10・11:石 核、12:台石

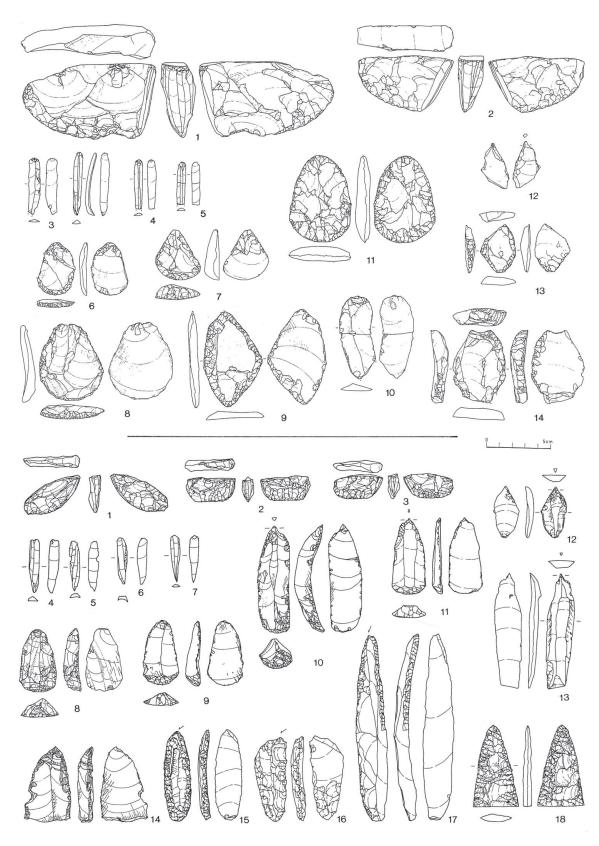


図1-9 オルイカ2遺跡(道埋文2003) _{【上段:1・2}:札滑型細石刃核、3~5:細石刃、6~8:掻器、9・10:削器、11:両面調整石器、12:錐、 13・14:彫器

オサツ16遺跡(北海道文化財保護協会1997) 下段:1~3:忍路子型細石刃核、4~7:細石刃、8・9:掻器、10・11:掻器・錐複合石器、12・13:錐、 14:削器、15~17:彫器、18:尖頭器

る成果である。 越技法が最古の一 法による年代測定値から北海道では約二万年前に細石刃文化が出現してい くるための原材料からなり、頁岩を主な石材とする。ここでは豊富な接合 ることが明らかになっただけでなく、 資料から蘭越技法の剥離過程が明らかにされた。また、 石刃石器群は細石刃・細石刃核・石刃・彫器・掻器・台石 群に位置付けられるなど、従来の編年観の見直しをせま 年代的に新しいと考えられていた蘭 出土層位、 ・顔料をつ 炭素 14

岩・チャート・メノウなどの石材が用いられている。 した台石・顔料をつくるための原材料などからなり、 一方、 不定形剥片石器群は掻器 ・細部加工剥片・削器 黒曜石 ・ 錐^きり 顔料が 安山岩・頁

じまっており、それはしばらく続くことになりそうである。 同じ値を得ている。 この二つの石器群はともに同じ地層で検出されており、 両者が共存するのかどうかについてはすでに議論がは 測定年代もほぼ

きな違いをもっている。 代が一万二〇〇〇年~一万五〇〇〇年前と、より新しい年代をもつ点で大 らとは異なる細石刃生産の技術である湧別技法による札滑型細石刃核のブ 子山遺跡があった。この遺跡は平成十四・十六年に道埋文によって発掘さ 柏台1遺跡と同じく千歳古砂丘の上にある。 がす技術が異なる点、 ックが四 オルイカ2遺跡 掻器、 恵庭 カ所で確認された a降下軽石層の上にある同層の風化したローム層からは、 削器らからなる。 オルイカ2遺跡は千歳市街地の北東約六十に位置し、 黒曜石が圧倒的である点、そして炭素14法による年 (図 1 9 ° 柏台1遺跡の細石刃石器群とは細石刃を剥 いずれも細石刃、 北西約五〇〇㍍にはかつて丸 細石刃核、 前者

原石の産地と消費地遺跡

しかし一方で、 確かな共通点を有している。 それはともに石器の材料と

> 産 対が後志の赤井川産で、 剥片石器群は黒曜石と頁岩を主体とするが、 群は頁岩を主体としているが、それらは道南のものであろう。 0) あろうと思われる。もう一方のオルイカ2遺跡では、 なる石を遠隔地から持ち込んでいることである。柏台1遺跡の細 置戸産、 十勝産など各地からのものが混じるようである。 その大部分が白滝産で、 ブロック出土の黒曜 ブロック出土の石器 頁岩は道南産で また不定形 他に赤井川 一石の九一 石器石器

いることにほかならない。 成り立っていたことは、生活を営むうえでのこの場所の重要性を示唆して にこのような大規模な遺跡が、 黒曜石や頁岩などの石器に適した石材産地を近くにもたない石狩低 石材の大部分を遠隔地から持ち込むことで 地帯

三一一五学であり、 柏台1遺跡のブロック資料を重量でみると、 頁岩が約七三九二学で、黒曜石は約八三五二学となる。 黒曜石は約二〇六学である。不定形剥片石器群のほう 細石刃石器群では頁岩が しかしそこには その数値はさ おそらく移動

ち欠いて作ったのではない。 もいうべき黒曜石製の細石刃核は、 ることができる。ここでは後者について触れておこう。 すでに触れた細石刃文化の特殊性と石材確保のための緻密な計算を見てと この大規模な遺跡の営みを支えていたことに驚くだろう。 らに大きくなるだろうが、それにしてもたかだか数サロから十数サロの石材が などで遺跡から持ち出された石器や石材もあるだろうから、 過程で発生した剥片からそのほかの道具をも作り出しているのである。 た頁岩の道具は出来上がったものが持ち込まれている。 オルイカ2遺跡の報告者が触れているように、 遺跡では最終的な調整を行って仕上げているのである。さらにその あらかたの整形を原産地で済ませた上で持ち 原産地から持ち込まれた礫を遺跡で打 そこの石器製作の中心と おそらく柏台1遺

跡の石器群についても同様なことがいえるだろう。

や交易をその中心にすえるのには相当無理があるだろう。 をたどって持ち込まれたのか、 オルイカから白滝まで約一七〇まもあるが、はたしてどのようなルート 交換か、 あるいは交易か。 興味深いテーマである。 しかし遊動生活をしていた当時に交換 自ら産地で採取し

旧石器人の生活

が、 とはいうまでもない。 厳密にいえば終了の時期は各地域によって相当なばらつきが予想されるこ 海道では開始は約二万年前で、終了はほぼ同じころとされている。ただし、 了は土器が出現する約一万二〇〇〇~一 現段階では日本列島における旧石器時代の開始は約三万年前であり、 発見された確かな住居址や墓は極めて少ない。 この時期に所属する遺跡は万の数に近いと思われる 万三〇〇〇年前とされている。 北 終

になる。 細石刃核が複数出土したことを考えると、 が、 く変わることになり、 年の中本遺跡の発掘調査ではその部分の確認を目的のひとつとしていた 古学の勉強をし始めたころで、 上口遺跡も含まれている。 か一二例しかない。 住居址 `能性を指摘せざるをえない。そうすると、 位置していたすぐ北側の耕作土から、 かくらいにしか感じなかったことを記憶している。平成十二(二〇〇〇 すでに耕作によって削平されていて果たせなかった。 住居として報告されたのは鹿児島から北海道まで含めてもわず その中には北見市中本遺跡、 住居址かどうかについて大きな揺らぎが生ずること この二例の発掘には筆者も参加しているが、 竪穴でありながら柱穴のない住居址もある 住居址からも出土していた幌加型 住居の外側は掘り足りなかった 竪穴状の掘りこみの形は大き 旧端野町 しかし、 (現北見市) 住居址 0)

唯 一可能性のある例は神奈川県相模原市向原4遺跡である。 本州の槍先

要である

上屋が必

くように並び、中央二ヵ所に炉址が残されていた。 形尖頭器の時代のものである。 径三○から六○ボの柱穴が一○基、 その直径は約七景で

その外側を礫が囲んでもいるという。

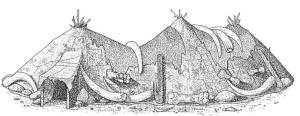
らく当時の遊動生活にあるのだろう。そこで注目されるのは、 てもみつからないことから、 居が作られなかったか、少なかったとしか考えられない。 ブロックであり、 なぜ住居址が少ないのだろうか。 本州の各地にみられる環状ブロック群である。 当時はもともと縄文時代のような竪穴式の住 全国的にしかも多数の大規模発掘を経 その理由はおそ 柏台 遺跡

ブロックが八ヵ所に確認されているが、 柏台1遺跡では細石刃石器群のブロックが七ヵ所、 図 1 $\underbrace{10}_{\circ}$ この状況をもって稲田孝はテント状の住居であること そのほとんどが中央に炉をもって 不定形剥片石器群の

7

いる

ある。 たが、 場合には くからい ロック住 な解釈で が、妥当 を指摘し 居という われてい 居説は古 e V る ブ A地区 B地区 細囲み線:細石刃石器群 太囲み線:不定形剥片石器群



ロシア・プシュカリ遺跡の平地住居復元図

れる遺跡がある。

本州・

九州各地にはブロックが環状に連なる「環状ブロ

ーック

群

とよば

五.

一のブ

口

最初に確認された群馬県下触牛伏遺跡では一

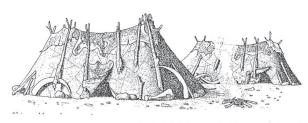
クが環状に連なり、

そ

直径は約五〇㍍を測

1

12



ロシア・マルタ遺跡の平地住居の復元図

0

ブ

口

ッ

が位置して

る。

なぜこれほど多

その内側に*

にさらに三つ

図 1 --11 ロシアの遺跡の皮製テント(J.HAWKES1989)

数

のブロックが集中し

そして環状にならぶ

0

かに

る。

今もっとも有力視のいては各説あ

団が集結して残したと電 集落とする説で、小集一 されているのは、大型

ていないだけである、ということができるだろう。

このように考えると、

住居址はないのではなく、

竪穴住居の形態をと

トを建てることによって完成させるのではなかろうか。

ない をつくって、 縄文時代以前は基本的にテント住居であり、 冬を迎えるころに白滝の黒曜石を携えてこの地に滞留し、 したと考えることができるのではないだろうか ことから、 が状況、 していた可能性がある。それは図に示したような、 の季節、 図 1 0 まり狩猟・皮なめしと、 ブ 11 その上に動物の皮を張ったスキン・テントであったかもしれ そしてその上の覆いを想定できるだろう。 ロックをそのまま住居とは この 遺跡を残した人々は、 ブロック中央に残された炉 11 61 雪深い道北・道東を避けて、 必要に応じてそれを持って遊 難 0 しかし、 動物の骨や木で骨組 北海道を含め 春を迎えて移動 この から 遺跡 秋 が

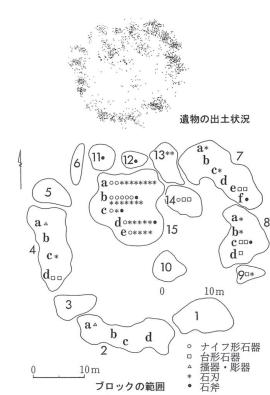


図1-12 群馬県下触牛伏遺跡の環状ブロック(稲田 2001)

0 製作をしつつ一 13 とに自由に占地しては環状になるどころか、 が必要になるだろう。 ちろん、 環状ブロック群には木炭集中部がともなうことが普通で、 する説などがある。いずれに落ち着くのかは現段階ではわからない。ただ、 まって残したとする説、 いうものである。 になる。 同時に、 ブロック間での石器・剥片の接合も一般的であることから、 したがってそれ 石器製作の場でもあるブロックを環状に並ばせるため 定期間のキャンプ生活を送った場所であることは間違いな もうひとつは石器や石材の交換の場であり、 ブロックが世帯をあらわすと仮定するなら、 そうではなく最大で数十人の単一 なりの区 一画割りが必要となる。 不定形な形をつくりだすこと その区画割りをテ 集団が残したと ブロック内は 何世帯か集 世帯ご の条件 石器

いる例は少ない。確かな例は知内町湯の里4遺跡であり、可能性の高い例墓 墓の可能性を指摘した報告は何例かあるものの、その確証を示して

として今金町美利河1遺跡をあげることができる。

カンラン岩製で、首飾りなどに使われたと思われる。か、柏台1遺跡と同じ蘭越型細石刃核などが見つかっている。玉は琥珀と湯の里4遺跡では、底に赤色顔料がまかれた土壙から玉類、細石刃のほ

ている。であることから、ロシアの沿海州方面からもたらされた可能性が指摘されであることから、ロシアの沿海州方面からもたらされた可能性が指摘され縁が丁寧に整えられ、中央に孔が穿たれている。大陸に通するカンラン岩 美利河1遺跡では二ヵ所の焼け土の中から玉が発見されている。玉は周

は、これからの課題である。体を対象にするような、斉一性をもった葬制が存在したかどうかについて本列島にも確かに存在したことを物語っている。しかし、集団の構成員全本列島にも確かに存在したことを物語っている。しかし、集団の構成員全

動物を捕る落し穴であったと考えられている。三つの列をなしてD字状に配置されていた。大きさや深さ、その配列から端近くを横断するように直径一㍍、深さ一・五㍍ほどの六○基の土坑が、落し穴 静岡県箱根西麓の初音ヶ原遺跡で、東から西に延びる台地の先

題である。
○基を確認しているという。現在の発見例はいずれも静岡県とその周辺に会事を確認しているという。現在の発見例はいずれも静岡県とその周辺に会すを確認しているという。現在の発見例はいずれも静岡県とその周辺に鈴木忠司によれば、静岡県内で一二遺跡一○二基、県外で一六遺跡約四

第二項 縄文時代

植生と古環境一.縄文時代の始まり

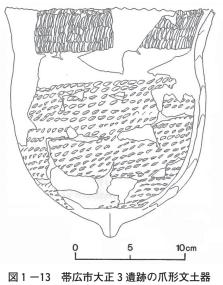
年前のことである。 る。 使い、 の変化だけでなく人類の生活にも大きく影響した。 化をもたらし、 及ぼした。ことに一万年前に始まる対馬暖流の日本海流入は温暖化、 万八〇〇〇年前を最寒冷期とし、 た定住的な生活が始まっている。 ○○年前であり、この頃は現在よりも数㍍ほど海水面が上昇していた。 境に変化する。このような気候変化は北海道の生物にもいろいろな影響を 一○○○年前であるが、定住的な生活が見られるようになるのは八五○○ 日本考古学では、 氷河時代の厳しい寒さは地球規模の気候変動のひとつであり、 九州南部では、 狩猟、 漁撈、 現在につながる特色のある森林を育むことになり、 一万三〇〇〇年前には土器・磨製石斧・弓矢を使用し 採集によって生活していた時代を縄文時代と呼んでい 土器を作り磨製石斧、石鏃、錐、 北海道では土器が使われ始めるのは一万 しだいに温暖化に向かい、現在に近い環 温暖化の最盛期は五 ナイフなどの石器を およそ一

一万一○○○経ほどの位置が推定されている。 一万一○○○経ほどの位置が推定されている。 一五書からそれぞれ引がっていたことは、釧路市の沖二二書、襟裳岬東方一五書からそれぞれ引き上げられた石器が物語っているのである。このように海面が低下し陸地が広き上げられた石器が物語っている。 一番の年代は断定できないが、ともに海水面下一○○経ほどの位置が推定されている。 一万一○○○経ほどの位置が推定されている。 一方一○○○経ほどの位置が推定されている。

まる。海岸線との関連で説明すると、海水面が上昇し海岸線はしだいに陸気候環境でみると寒冷期から温暖化に向かう、その過程で縄文時代は始

活の範囲は縮小傾向なのであった。 地を狭めていくことになる。人の一生という時間幅では明確に認識できな 自然現象なのであったかもしれないが、 北海道全体で見ると、 人類の生

形文土器は縄文時代草創期の一時期を占めるもので、 土器の表面には口縁部から底辺部まで指先の爪を押し付けたかのような細 には乳房状の小さな膨らみがある。五個体の土器は大きなもので高さ二三 いなかった類の土器である。これらは底のほうは丸くなって、さらに底部 文様などの特徴が把握できる五個体があり、 かっている。 刻みが連続的にみられ、 北海道において最も古い土器は帯広市の大正3遺跡で平成十五(二〇〇 口径二〇ホッほどであり、縄文時代の土器としては、小さな部類になる。 年秋に出土した一万一○○○年前のものである(図1-13)。 この文様の特色から爪形文土器と呼ばれる。 道内ではそれまでに知られて 日本列島の各地で見 器形、 爪



という調理法は食べ物 よって、 供給することに役立っ 安全なものを安定的に 食料が利用できるよう 木の実や根茎の澱粉質 ることができなかった 0 種類を増やし、 の道具である。 とくに煮ることに それまで食べ より

> になったと考えられる。貝塚に見られる貝類も、 やすくなった食料のひとつであろう。 煮ることによって利用

磨製石斧、 丸木舟、弓矢

うので新石器時代に含まれる。 いろいろな種類のものが使われ始めた時代である たのは一九世紀北欧に始まる。 特色によって旧石器時代、新石器時代、青銅器時代、 人間の歴史の区分にあたって、 さらに縄文時代は石器がその用途に応じて これにならえば、縄文時代は磨製石斧を使 使用する道具のうち木を加工するオノの 鉄器時代に呼び分け

岩、 製作にも使った。舟は人間の行動範囲を拡大する道具なので、 採、 る。 工夫が凝らされている。 けるために形や重さに大・中・小があり刃部の作り方、 地方から供給されたものが多く、岩石の種類は蛇紋岩(あるいはロジン 在的な出土であり多量に安定的に作られるのは縄文時代になってからであ 北海道では磨製石斧は一万四〇〇〇年前には出現しているが、 人々の交流などに大きな利益をもたらすこととなる。 千歳地域の遺跡を見るとオノの素材となる石は縄文時代を通じて日高 枝打ちなどの荒加工、さらに細部加工など作業の種類に応じて使い分 緑色泥岩、黒色片岩などである。石斧は木工具なので立ち木の伐 磨製石斧は住居の建材確保のみならず、 柄とのつなぎにも 物資 丸木舟 これは の調

土器は食物を煮るた

あるが、 中石器時代、 えられた力」 道具である。 大正3遺跡で出土しており、 弓矢はシカ、 ヤジリ の利用であり、 弓矢は目に見える直接の力とは別の「閉じ込められた力」 新石器時代になって現れる。 ウサギ、 (石鏃) は北海道の遺跡では多数出土する。 トリなどの小さくてすばしこい動物の狩に使った 縄文時代を通じて多く使われていた。 人間の歴史では旧石器時代では見当たらず、 弓矢が直接出土することは稀で すでに帯広市

千歳市内の石鏃は、

黒曜石、

頁岩、珪岩、片岩を素材としたものが多く、

その形態は土器の変化に応じるかのように多様性に富んでいる。 密接な関係にあったかを知る手がかりとなっている。 形態の特色は、縄文時代のそれぞれの遺跡の人々がどの方面・地域と この石

跡、

縄文時代早期の千歳

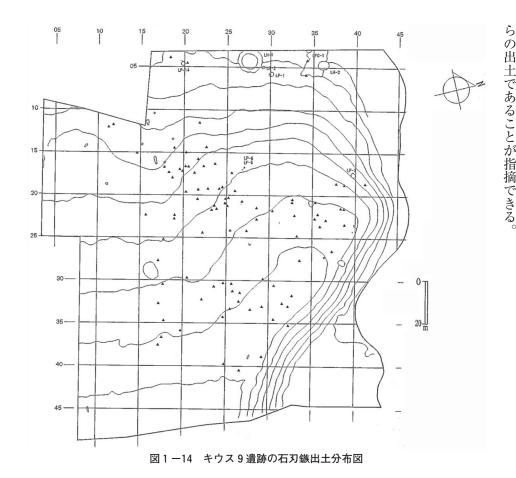
石刃鏃文化

に分布している。 石器が出土する遺跡は、 こともあって、 縄文時代に多く作られる石ヤジリの一種である。その特徴が認識しやすい 石刃鏃を含む遺物群は、 二点が出土した。石刃鏃は縦長の剥片(石刃)を加工して作られるもので、 平成十七(二〇〇五)年、十八年のキウス9遺跡の発掘調査で石刃鏃九 北海道の考古学的資料のうちでは注目される遺物である。 石刃鏃文化と呼称されることが多く、このような 広く北東アジア(大陸とサハリン島、 日本列島

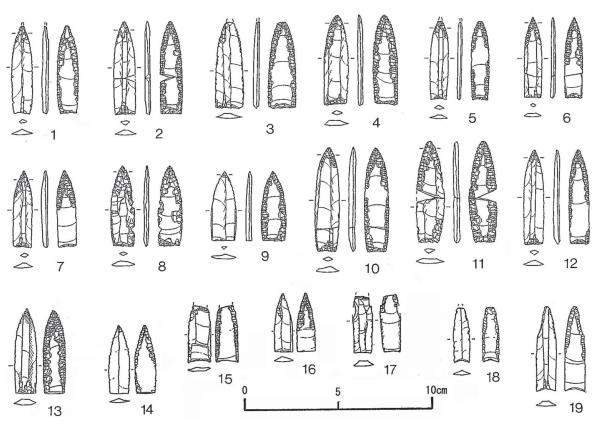
りその多様性が顕著である。石刃鏃の製作遺跡も報告されている。対照的 密で西南部に稀薄である。 も報じられている。 北海道内に限られるという研究情勢であったが、近年青森県内からの出土 石刃鏃文化の認識は一九七〇年代から深まり、その分布は日本列島では 西南部においては石刃鏃のみが散発的に出土している。 北海道内という範囲で遺跡分布を見ると、 あわせて東北部の遺跡では伴出資料は多量であ 東北部に濃

は得られなかった。 同時期のものであろうことは推定できるが、 九二点は広い範囲から点在して出土している 遠軽町生田原が二点であり、すべてが網走管内の産地ということである。 素材となった黒曜石の原産地は、置戸町所山が八一点、遠軽町白滝が六点、 キウス9遺跡の石刃鏃は、 一サン前後のものが多く、 すべて黒曜石製である。大きさは長さ四~五 一石刃の 一端を尖らし、周縁を加工してある。 時期を判断できる直接の資料 (図1-4)。これらはほぼ

> 時期を決定する資料は乏しいが、 沢3遺跡では四点である(図1-15)。これらも石刃鏃の製品のみであり、 このほか千歳市内ではこれまでに美々7遺跡、 キウス5遺跡において、それぞれ一点が出土している。苫小牧市の美 すべて樽前は降下火山灰よりも上の層か 美々8遺跡、キウス4遺



171



1~12:キウス 9 遺跡、13:キウス 4 遺跡、14~17:美沢 3 遺跡、18:美々 7 遺跡、19:美々 8 遺跡 図1-15 石刃鏃の実測図

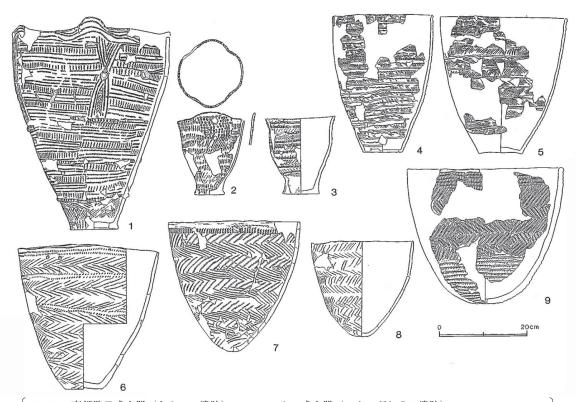
が、 これらの 張り出している。 面の文様 中茶路式 で埋め尽くされるものである。 特色は土器表面が縄文、 味になり、 化に着目して、 ○○年前)、 ん上げ底になる。そして東釧路Ⅳ式では底部が次第に小さくなり、 この 東釧路系と称される所以はこの漸移的な変化にあるので、 東釧路Ⅲ式、 時期は東釧路系土器と呼ばれるものが北海道全域に分布する。 土器の (施文) (六三〇〇年前)、 やがて丸底になる。 東釧路Ⅲ式 図示したものについて説明する。 中茶路式ではこの外側への張り出しがなくなり、 は、 コッタロ式では平底であり、 ともに少しずつ変化している 内の年代数値は目安である。 撚糸文、 (六七○○年前)、コッタロ式 東釧路Ⅳ式 前期の綱文式では丸底である。 東釧路系土器の型式は、 絡条体圧痕文、 (六一〇〇年前) 断面で見ると底部は外側に 東釧路Ⅱ式も同様である 組紐 土器の形 図 1 1 (六五〇〇年前) 圧痕文などの文様 東釧路Ⅱ式 と移り変わる。 底部形態の変 16 (器形) 尖底. (六九 その 表

と理解されてきたが、 との密接な関係が認められる。 始まり の東釧路Ⅱ式土器は東北地方北部の表館Ⅲ群 近年の調査例は青森県内にも東釧路系土器が分布 東釧路Ⅲ式以降は北海道固有の土器である (早稲田5類 土器

東北部の遺跡では石刃鏃を製作しており、 彫器などは石刃鏃文化に特徴的なものであるが、 安定的な事例としては押型文の女満別式土器、 (七一〇〇年前) 共伴の土器は、少量で断片的なものがいく 石錐、 に多く、 たたき石、 東釧路Ⅱ式土器 すり石、 母材の石核、 さらに環状垂飾 石鋸、 石刃槍、 同じ遺跡 (六九〇 石斧、

早期後半の土器群

尖頭器、 ○年前)に少数認められる 体圧痕文の浦幌式土器 つか知られているが、 有孔石斧なども出土している。 石錘などは縄文時代に通有の道具の組み合わせである。 から出土するつまみ付きナイフ、 北海道



• 2 : 東釧路Ⅲ式土器 (キウス5遺跡)、3:コッタロ式土器 (ユカンボシC2遺跡)、 ·5:中茶路式土器(美沢3遺跡)、6:東釧路IV式土器(深川市、納内6丁目付近遺跡)、

7:東釧路Ⅳ式土器(キウス4遺跡)、8:東釧路Ⅳ式土器(美沢3遺跡)、9:綱文式土器(キウス5遺跡)

図1-16 縄文時代早期後半の土器

らコ たことが想定できる。 北海道全域で土器が変化していくのに合わせるかのように形態も変化して らは縄文時代前期の綱文式土器 ていることを示して 合わ くの 東釧 もとより土器の器形および文様は手本となるもの それは例えば、 ツ タ は せも安定している。 路系土器 口式、 蛇紋岩の石斧、 石鏃である。 中茶路式、 の時期は、 編籠であったり、 この東釧路系土器の器形、 千歳市内におい 横断面 東釧路Ⅳ式へと変化して すでに石器の定形化は確立 定形化は黒曜石の石鏃、 わりに位 (五九〇〇年前 一角形のすり石などで顕著である。 その編籠を模して作られた土器であ 置 ても黒曜 する東釧 石の石鏃 文様の変化は、手本とな 路 と連続してい 珪質頁岩のつまみ IV があっ しており、 式土器の最終段 が たと考えら 東釧 石器の 路 \blacksquare

式か

付

11

Z

る。

階

住居と集落 た容器の変化をも示すのであろう。

跡九軒、 であ は次の中茶路式土器の時期にまで継続している。 跡、 る。 路Ⅱ式土器さらに東釧路Ⅲ式土器を伴う住居跡は検出されていない 年前) 次 キウス 5遺跡 A地区で検出された縄文時代早期中葉 る カンボシC2遺跡、 時期になるコッ 下 土坑六ヵ所、 の記述は竪穴式住居を主とした説明になる。 縄文時代の 0 (複数の) 住居跡 住 焼土などが見つかっている。 タロ |居跡で残存状況が良好なもの からなる集落が、 キウス7遺跡にある 式土器を伴う住居跡 千歳市内で最も古 から キウ **図** 住居の 1 は竪穴式のも なる集落は美沢2遺 ス7遺跡では、 早期後葉では、 (暁 17 平面形は円形 式 、土器、 時期 美沢2遺 0 七 0) であ 集落 住 東 五.

釧

中茶路式土器 0) 時期は住居 0 時期の集落は美沢2遺跡、 の中 に炉であった焼土が検出されるもの キウス 5遺跡 A地区、 が多 キウス

る。

楕

円形であり、

大きさは径九片

にほどの

大型、

径六片

ほどの

中

型

が

あ

跡

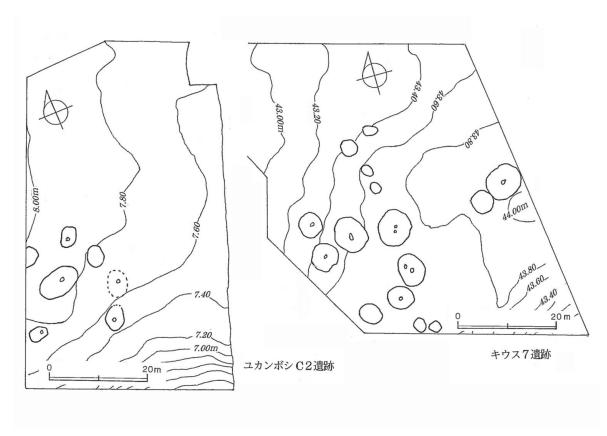


図1-17 コッタロ式土器の時期の集落

知られている。 は新千歳空港の建設に際して昭和五十一(一九七六)年から平成七 集落の変遷、美沢川流域 一○○㍍ほどの谷地形を形成して東へ流れているのが美沢川である。 千歳市と苫小牧市の境界をなしている美沢川の流域には、 支笏火砕流を基盤とする標高二五㍍ほどの火山灰台地を幅

じような傾向である。

このような居住区域と遺物とが重なる分布状態は、

縄文時代晩期まで同

多くの遺跡が

九五

年まで発掘調査が行われた。

空港の滑走路を横断する位置にある美

<u></u> 九

七000

年前から現在に至るまで繰り返し人間の生活場所であることが明らかに

沢川流域では東西の長さ二㌔弱の区間で一二の遺跡が調査され、

なった。

円形で径三~四㍍の大きさの住居がまとまっている。 底からはつまみ付きナイフ二点が検出された。墓の内外に中茶路式土器の 呼ばれる土壙で、 はみられない。 4遺跡A地区にある。キウス4遺跡A地区では標高六㍍付近に、 この時期の墓は美沢1遺跡で見つかっている。 壙口に中茶路式土器の一個体、 すり石、 住居内に焼土 砥石があり、 J P 平 -面形が ا 9 炉 塘

美沢3遺跡、 千歳市美々 5遺跡、 住居の中に焼土は見当たらない。 大きなもので径三~四片、 美々7遺跡にある。 この時期の墓は、 苫小牧市美沢 小さなものは 美々7遺跡の住 1 遺

跡、

これらの住居の周辺からは多量の土器の破片、石器、 礫片等が出土して

美々7遺跡にあり、 居の平面形はほぼ円形であり、 まとまりとは離れた場所の例が知られている。美沢3遺跡、美々5遺跡、 墓地の形成とみなせる。

破片が見られる例は道内各地の遺跡でみられる。 美沢川流域において東釧路Ⅳ式土器の時期の集落は、

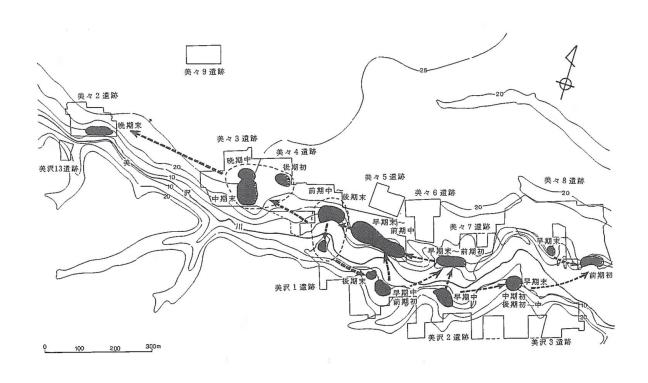


図1-18 美沢川流域の遺跡群と集落のうつりかわり

型I ─ 10 天八川川域♥フ遺跡併し集冷♥ププ゚プ゚プ゚プ゚プ゚プ゚プ゚

美々7遺跡では標高二二点付近に土壙のまとまりがあった。 場所に検出されている。 跡と美々7遺跡である。この時期は墓地とみなせるものが集落とは離れた 大きめの土壙墓から足形付土版が出土している。 水辺に近いが、美々5遺跡、 綱文式土器の時期にまで集落が継続している。 以後縄文時代前期、 次の東釧路Ⅳ式土器の時期は北岸に二ヵ所の集落が見られる。 中期、 美沢3遺跡では標高七㍍付近に、 美々7遺跡は丘の上である。 後期、 晩期と集落は、 美々 5遺跡ではさらに次 川の 上流方向 この三ヵ所では 美々5遺跡 美沢 3 遺跡は 美々5遺 へ移動し

・貝塚と縄文前期

ている。

集落の立地するところは、

前期以降においても、

流域の低地や斜

面であるが、

墓地の立地は時期ごとに特色がある。

縄文海進と漁撈生活

苫小牧市周辺では海水が現海岸線から一七~一八*□奥深くにまで達するよ○○○年(後期旧石器時代)ほど前から温暖化が急速に進み、千歳・高山の氷の融解によって海面が上昇、海岸線が内陸へ前進し始める。縄文高山の氷の融解によって海面が上昇、海岸線が内陸へ前進し始める。縄文温暖期と寒冷期という地球規模での気候変動の繰り返しの中で、一万四温暖期と寒冷期という地球規模での気候変動の繰り返しの中で、一万四

小牧市美沢)に位置している遺跡は地名に数字を付して表される(図1-東へ流れる美沢川の北岸(千歳市美々)に位置している遺跡、南岸(苫

18

の美沢2遺跡である。

中型、

小型の竪穴住居跡が認められる。

土器型式で

このなかで集落が形成される始まりは縄文時代早期後葉(六五〇〇年前

水辺に接する南岸の標高五景から一〇景ほどのゆる

ものは住居の近くにはない。

いえばコッタロ式、中やかな傾斜地に大型、

中茶路式の時期である。この集落では墓地とみなせる

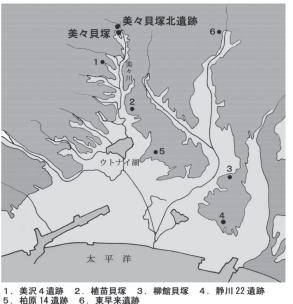
 Ξ 川と安平川水系沿いには美々貝塚をはじめ八ヵ所の貝塚遺跡があり 面下であった。 うになる。これが縄文海進の最盛期である。 ス式海岸状の地形を呈していた。千歳・苫小牧市周辺の場合、 昇していたといわれる。 成されるのもこの時期である。当時の平均気温は東日本で現在よりも二~ 塚・ポンナイ貝塚)、 19 この時期、 西日本で一~一・五℃ほど高く、 網走市大 曲 これらは立地、 鳥類、 北海道では噴火湾東部 沢地には樹枝状に海水が入り込み、 哺乳類の内容にも共通点が認められる。 洞窟遺跡に見るような海水の浸食による洞窟遺跡が形 古釧路湾 ヤマトシジミが九○紅以上を占める貝 このため現在の海に面する低い沖積平野はほぼ海 (東釧路貝塚) (北黄金貝塚・茶呑場遺跡・ 海水面は今よりも四~五景ほど上 などに貝塚が形成される。

細長く入り組んだリア

が、

現在の美

図



6. 東早来遺跡

図1-19 貝塚遺跡の位置 な手が 具・ じって骨角器や土 ŋ ては骨角牙製の釣 められるものとし る。 撈生活を知る良好 道具として認 石器が見つか 釣漁や銛漁が 縄文時代の漁 ラ状具があ 頭は かりとな 刺 穾

) 貝殼、

魚骨に混

貝塚からは大量

(類組成、

さ

行われていたことが分かる。また、 魚網も使っていたようである。

若生具

する部分が出土している。 期前半期 べ沢遺跡にあり、 文式期のものは大曲 釣針は道内では前期初頭から確認されているが数は少ない。 (東釧路V式期) それぞれ 洞窟遺跡に、 の東釧路貝塚では組み合わせ式釣針の軸に相当 の字形の逆刺のない単式釣針である。 前期後半円筒 下層式期の 例は函 前期初 館 市サイ 頭 前 綱な

トド いる。 類を対象とした銛漁の可能性が高い。 ほとんど見つからず、 る銛漁が盛んに行われていたと考えられる。 は開架式のものがあり、苫小牧市美沢4遺跡 銛頭は東釧路貝塚に海獣肋骨製の尾部に装飾的刻線をもつ特徴 大曲洞窟遺跡には尾部に穿孔を有するものがある。 類からなる鰭 東釧路貝塚ではイルカ類を主体とした鯨類、 脚 類等の海獣骨が膨大に出土しており、 大型ボラやウグイ類の魚骨が多くあることから、 一方、 (第1貝塚) アシカ、 美々貝塚では海獣骨 ほかに美々貝塚に でも見つかって 海獣を捕 オットセイ、 的 なも 魚

石造り 遡るサケ に行われていたことを示している。さらに、 が出土している。 ではない。 を上回る量が出土している。 使用されている 扁平な川原石を利用しその二ヵ所ないしは四ヵ所を打ち欠いたもので、 の大規模集落であるが、 部分に縄を掛け魚網の下端に固定し使用するものとみられる。 魚網そのものは残っていないが、 の存在から想定できる 津軽海峡に臨む函館市中野B遺跡は縄文早期後半 マス類は重要な食料であり、 「漁網用沈子」と良く似た形態で、 少なくとも北海道では縄文時代早期後半から網 二万六○○○点にも上るおびただしい数の石錘 網漁自体は前期になって急速に発達したも 図 1 | 網を使う漁が行われていたことは 21 漁撈活動は縄文時代にあってもよ 20 北海道や東北地方では河川 石錘は掌に収まるほどの 美々貝塚では一〇〇点 (住吉町式) 現在でも 漁が活発 礫れ 年、

低地を挟み北にある美々貝

り身近な内水面において行われていたと推測される。

時代はやや下るが、石狩市紅葉山49号遺跡では最古の例(縄文中期末) また、貝殻の成長曲線分析の結果から、貝類は一年中獲っていたのでは おり、春はウグイやサクラマス、秋には遡上期のシロザケを捕獲していた。 また、貝殻の成長曲線分析の結果から、貝類は一年中獲っていたのでは また、貝殻の成長曲線分析の結果から、貝類は一年中獲っていたのでは また、貝殻の成長曲線分析の結果から、貝類は一年中獲っていたのでは また、貝殻の成長曲線分析の結果から、貝類は一年中獲っていたのでは また、長殻の成長曲線分析の結果から、貝類は一年中獲っていたのでは また、長殻の成長曲線分析の結果から、貝類は一年中獲っていたのでは また、長殻の成長曲線分析の結果から、貝類は一年中獲っていたのでは また、長殻の成長曲線分析の結果から、貝類は一年中獲っていたのでは また、長殻の成長曲線分析の結果から、貝類は一年中獲っていたのでは また、長殻の成長曲線分析の結果から、月類は一年中獲っていたのでは また、日殻の成長曲線分析の結果から、月類は一年中獲っていたのでは また、日殻の成長曲線分析の結果から、月類は一年中獲っていたのでは また、日殻の成長曲線分析の結果から、月類は一年中獲っていたのでは また、日殻の成長曲線分析の結果から、月類は一年中獲っていたのでは また、日殻の成長曲線分析の結果から、月類は一年中では また、日殻の成長曲線分析の結果から、月類は一年中では また、日殻の成長曲線分析の結果から、日類は一年中では また、日殻の成長曲線分析の結果から、日類は一年中では また、日殻の成長曲線分析の結果から、日類は一年中では また、日砂の成長曲線分析の結果がら、日類は一年中では また、日砂の成長曲線分析の結果がら、日類は一年中では また、日砂の成長曲線分析の結果が また、日砂の成長曲線分析の結果が また、日砂の成長曲線分析の結果が また、日砂の成長曲線分析の結果が また、日砂の成長曲線分析の結果が また、日砂の成長曲線分析の結果が また、日砂の成長曲線分析の結果が また、日砂の成長曲線分析のは また、日砂の成長曲線分析のは また、日砂の成長曲線分析のは また、日砂の成長曲線分析のは また、日砂の成長曲線分析のは また、日砂の成長曲線分析の また、日砂の成長ーの また、日砂のの また、日砂の またりの またりの



写真1-1 美々貝塚の断面

あ 海道で知られている最も内陸に から一七世ほど内陸にあり、こ 陵西側崖縁に位置する。 貝塚に残されたもの・美々貝塚 JR千歳線美々駅の北西五○○ は安平町の 美々貝塚 る貝塚のひとつである。 から一八・五十)とともに北 線路によって切断された丘 東早来遺跡 (写真1-1) は、 現海岸線(太平洋 標高 (海岸 近

> である。 塚北遺跡からも貝塚が発見されている。美々貝塚の北西二〇〇㍍程の位置

)発見の経緯

その発見の経緯は以下のとおりである。その発も、縄文海進現象を示す格好の資料として注目、活用されてきた。下亘等により地質学分野の関係者を揃えての調査研究が実施されている。下亘等により地質学分野の関係者を揃えての調査研究が実施されている。美々貝塚の調査は昭和九(一九三四)年頃に名取武光により試掘程度が

知られた最初と言ってよい。

知られた最初と言ってよい。

これが美々における貝塚の存在が社会一般にあったことが記されている。これが美々における貝塚の優頭形の塚が四ヵ所された。「未だ世に知られざる」貝塚との評価で、当時北海道帝国大学農な貝塚発見 道庁近く仮指定」との見出しで、貝層断面写真を伴って紹介田の九年十二月二十五日付け『北海タイムス』朝刊に、「考古学上貴重

う つ 月 $\stackrel{=}{=}$ 削が着工された時点で分かっていたようである。工事は大正十二(一九二 調査 引用している。 であると報告され、 がそこから三〇\\\\ 位奥にA、 ると、「遺跡」の存在自体は北海道鉄道札幌線 「美々貝塚付近略図」と共にあり、 この記事に遅れて、苫小牧東尋常高等小学校郷土部により『美々貝塚 の尋常高等小学校郷土部による踏査・発掘で貝塚が発見されたとの経 後である可能性もある。 年のことである。ただ「貝塚」本体の発見は鉄道開通 と題したガリ版刷りの冊子が発行されている。 掘削工事で土器や石器が出土し、 貝の種類と土層区分については北海タイムスの記事も В 「線路から四景位の崖をのぼると頂上になる C三個の貝塚がある」との具体的記載が 「高さ約一景、八平方景の饅頭形の塚 (沼ノ端と苗穂の間) その後 その内容から判 (昭和時代であろ (大正十五年八 の掘

七五) ことである。 3とS-4貝塚に乱掘の跡が見られたとの記述がある。 緯が読み取れるからである。そしてこの踏査は明らかに名取の調査以前 年 -の調査で確認されたものとほぼ一 略図により示された三ヵ所の貝塚の位置は、 致する。 松下らの報告ではS 昭和五十 九

る。

名称が使われるようになる 貝層断面写真などその調査成果を報告している。 名取自身は昭和十四年になってから、 出土した繊維土器を 「美々式_ と仮称するとともに、 「北海道の土器」と題した論文を 事実上ここで美々貝塚の 地層模式図、

貝塚の内容

めるのが貝類である。 当時はいずれもマウンド状であったという。 S-1貝塚は径が一五㍍前後、 た報告をもとにその内容を紹介する。 貝土層の互層である。 小規模である。 昭 和五十(一九七五) ただし松下亘ら調査時のS-2貝塚は確認されていない。 アサリの純貝層が一部認められたほかは、 年に佐藤一夫、 大小四ヵ所の地点貝塚で構成される。 堆積層は一・一点を測るが、 貝塚は台地上の東西四〇點、 大谷敏三らによって一部調査され 自然遺物のうち最も多くを占 残る三貝塚は 最も大きい 貝層と混 南北六

ナシトマヤガイ、 むヤマトシジミさらに海中に棲む貝類が混じる混合貝塚といえる。 ホソウミニナと岩礁性のアカニシがある。二枚貝はヤマトシジミが圧倒的 貝塚を形成している貝は一 陸産貝はエゾマイマイ、 (斧足類) ついでアサリ、 このうち現在苫小牧海岸には生息していないアカニシ、 九種類である。 ニホンタガソデモドキなど暖流系の貝の存在が注目され マガキ、 ヒメマイマイ、キセルモドキの三種類である。 四種類である。 高緘水域に生息するマガキや中緘水域に棲 ウネナシトマヤガイ、 巻貝 (腹足類) ニホンタガソデモ が二種類、 巻貝は ウネ

> グイ、 た。 る。 ものである。 貝塚が内湾性貝塚であること示している。 類 貝を除くと動物遺存体では魚類と獣骨が多い。 当才から老年に至るものがあり、 暖流系のボラがあり、 海獣類はトドの骨と分類未詳の海獣骨が数点ある程度で、これは美々 ガンギエイ類、 ガン・カモ類、 哺乳類はイヌ、ドブネズミの骨を除くと、 スズキ、 アビ類、 ウグイ、 ニシン、サケ類、 カイツブリ類などの鳥類もある。 ガンギエイの類もよく生育した大型の そのほとんどが細かく破砕されてい ほかにウミウ・ヒメウタイプの カレイ類) 魚類は七種類 エゾシカの骨であ が分かって (ボラ、 ゥ

文 和五十二 (一九七七) 態は不明であるが鹿角製とみられる開架式銛頭が出土している。 表している。 ジリである無茎三角形鏃と石錘の存在はこの時期の石器組成の特徴をよく 前期前半の静内中野式土器に相当する尖底深鉢形土器で、 人工遺物には土器、 羽状縄文が施文され胎土に植物繊維や撚紐が混入する特徴がある。 石錘は一一三点と最も多く見つかっている。 石器、 年四月に市の史跡に指定されている。 骨角器があるが多くはない。 また、 土器はい 厚手で斜行縄 貝塚は昭 全体の形 わ ゆ ヤ る

美々貝塚北遺跡

されている。 所発見されている。 整然と領域を分けて検出されている。 構・墓域を形成する墓壙群 跡では中央部の 平成五 (一九九三) これらは主に静内中野式期のものである 「通路」 このほか、 年から五次にわたって調査が行われた美々貝塚北遺 を挟み丘陵の南端に竪穴住居群が、 ・焼土群および大規模な盛土遺構 竪穴内や小土坑内にも小規模な貝層が形成 貝塚は盛土遺構と一部重複し、 東西に畠状遺 が

(東貝塚九ヵ所、 ・シジミが九割以上を占めるという。北貝塚は長径一五㍍、短径七・五㍍ 貝塚と西貝塚は長径○・二~三・ 西貝塚三八ヵ所) であり、 五ばほどのブロック状貝塚 極端に細かく破砕されたヤ

貝層の厚さは一点以上、 ンジュガイやカラスガイなどの淡水性貝が主体の貝層もある。 ウネナシトマヤガイやニホンタガソデモドキも多く、マガキのほかカワシ 主体であるヤマトシジミは完形が占める割合が高い。 先の二者に較べ規模が大きくやや離れた位置にあ 貝類は暖流系の

工した回転式離頭銛が出土したとの報告もなされている。 ているという。 形成された盛土・畠状遺構中にはニホンジカの焼骨片のみが多量に含まれ きナイフが際立って多い。 イ科魚類など魚骨が多量に検出されている。 三地点の貝塚が貝層を主体として構成されるのとは対照的に、 すり石、たたき石などの礫石器が非常に多く、 このほか二次堆積とみられる焼土群からはサケ科およびコ 貝塚の一つからシカの骨を加 剥片石器ではつまみ付 遺物は石錘、 東と西に 石

美沢 4 遺跡の貝塚

た。 それぞれ一〇〇平方景、 三点の台地先端斜面部 された苫小牧市美沢4遺跡では、フレペッ湿原に張り出した標高二〇~二 昭和五十四 (一九七九) (第1貝塚) 六五平方景の広がりをもつ貝塚が形成されてい 年に新千歳空港建設工事に先立って調査が実施 と台地平坦部 (第2貝塚) の二ヵ所に

が検出され、 上を占める純貝層である。 遺存体の構成に幾分違いが認められるが、ともにヤマトシジミが九○㍍以 ンプルの採集による方法で行われた。 調 (昭和五十九年) 美々貝塚で確認されていない貝類もある。 査は小型魚の椎骨や歯といった微細遺物の検出も視野に入れ、 ハマグリ、 水洗選別により整理されている。 シオフキ、 ここでは巻貝七種、 カガミガイ、 また、 残る貝層の全量についても後 二枚貝一八種、 サラガイ、 両貝塚で貝類や動物 オオノガイな 陸産貝五種 柱状サ

貝類を除いて動物遺存体は魚類 爬虫類、 鳥 類 哺 乳類である。 魚類

8

含め、ニシンなど一六種類である はメナダ、 スズキ、 フグなどの暖流系を

る銛頭 <u>5</u> どがある。このほかウバガイの腹縁部を 製刺突具 には、 キガイ製の垂れ 短冊形に加工した腕輪 中足骨製のヘラ状具 目処を持つ鹿角製針、 オットセイなどの海獣骨もある。 管玉 哺乳類はエゾシカが最も多く、 殻口を切断したヤカドツノガイ製 縫い針として使われたと見られる (図1-20-7~9)、エゾタマ 図 1 | 図 1 | 飾があり 20 2 , 20 1 , 図 1 | 図 1 | 柳葉形の海獣肋骨 $\widehat{\mathbb{Z}}$ シカの中手・ 20 6 $\begin{array}{cccc}
1 \\
20 \\
4 \\
\cdot
\end{array}$ 索養 $\overset{20}{\overset{1}{\overset{3}{\circ}}}$ 縄部のあ トド、

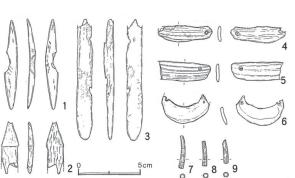
貝製装身具も見つかっている

が確かめられるのは一四〇ヵ所前後である。 九八四年現在)、その半数が記録に残されることなく壊滅しており、 縄文時代の貝塚は道内では約一 一五○ヵ所の所在が確認されているが 所在

縄文時代前期の土器群

筒土器が位置づけられる。 入する特徴がある。 縄文時代前期前半には丸底 前半期の土器群は大型化し胎土に植物繊維を混 ・尖底の土器群 が、 後半期には筒形平 の円

器群で、 られる。 先行する縄文時代早期末葉の東釧路Ⅳ式は平底から丸底への移 その最末期では前期の土器と共通する胎土に繊維を含むものが認 また縄文や撚糸文の条は太くなり、 体部には菱形や羽状を構成 行期 の土



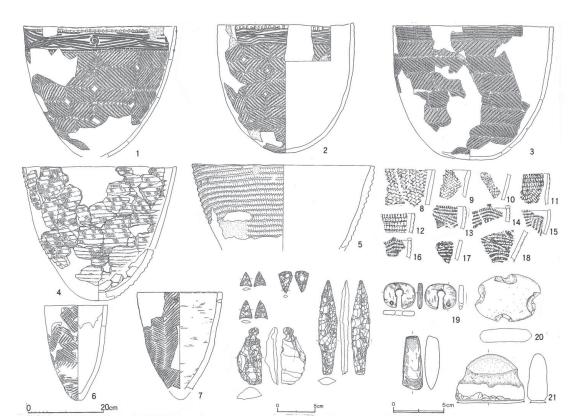
美沢4遺跡出土の骨角器と貝製装飾品 図 1 20

うな土器が前期初頭の尖底土器群へと変化していく。する縄文が施され、口縁部に文様帯が形成されるものが出現する。こ

のような効果を持つものがある。 道央部では前期初頭に関東地方の羽状縄文系土器群:花積下層式土器と 道央部では前期初頭に関東地方の羽状縄文系土器群:花積下層式土器と

2 と共通する文様構成をもつ土器群は道東部、 風に節を磨り消すものもある。これらの二型式の土器はいずれも胴部には 3 る。 広く認められる。 整然とした羽状や菱形の構成をとる縄文が施文される。美沢3・美々7式 るものと考えられる。 手状の文様も特徴的である(図1-21-1)。美々7式土器 口縁部に隆帯の形成されたものがあり、 美沢3式土器は花積下層式のより古い段階の特色を有するものである。 は石川野式土器につながる文様構成を持つことで、 口縁部文様帯のあるものでは口唇部に刻みがつけられ 縄線文、 沈線文、刺突文などで文様が構成される。 口縁部の狭い範囲に横走する縄文を数条施し、 文様帯を持たないものも存在す 道南部をはじめ北海道 美沢3式に後出す 縄線文による蕨 **図** 図 1 | 1 円に 綱文 21 21

21 21 である。 と移行する。 美々7式に後続するのはコンパス文、 道央部ではその後、 8 10 美々4・美々5遺跡から道南部と共通の要素を持つ土器 9 16 このうち中野式 や組紐回転文と羽状縄文が組み合わされたものが伴う。 が出土している。 中野式系 図 1 これらには組紐回転文のみの (トビノ式・中野式・加茂川式) 21 円形文のある道南の 6 7 は数段階に細分が可能 もの 石川 の土器 野式 **図** 図 0) 1 1 類



1 · 2 : 美沢 3 · 3 · 5 キウス 5 · 4 : ウサクマイ遺跡 L 地点 6 : 美沢 5 7 ~12 · 17 · 18 : 美々 4 · 13~16 : 美々 5 · 石器は20 : 美々 5 · そのほかはキウス 5 · 図 1 −21 · 縄文時代前期前半の土器と石器等

貝塚はこの時期のものである。 撚糸、ごく少数ではあるが網状の撚糸が混入する例も知られている。美々に多量の植物繊維を含み、撚りの方向の確認できるあるいは結び目のあるい砲弾形で斜行縄文が多く小さな尖底になるものとみられる。平縁で胎土で、初期のものは器高が低く羽状縄文のある丸底、新しい段階では丈の長

共通の意識が存在していたことがわかる。

共通の意識が存在していたことがわかる。

大特殊な「くせ」も認められる(栗沢町加茂川遺跡・札幌市発寒小学校遺跡・伊達市若生貝塚・共和町リヤムナイ3遺跡)。同様の例は同時期、道康部の朱円式土器(斜里町大栄6遺跡)や温根沼式土器にもあり、後者の根室市トーサムポロ遺跡出土資料には黒曜石の石槍片が埋め込まれてい根室市トーサムポロ遺跡出土資料には黒曜石の石槍片が埋め込まれていまた、中野式系の土器には尖底内部に「黒曜石」の破片を埋め込むといっまた、中野式系の土器には尖底内部に「黒曜石」の破片を埋め込むといっまた、中野式系の土器には尖底内部に「黒曜石」の破片を埋め込むといっまた、中野式系の土器には尖底内部に「黒曜石」の破片を埋め込むといっまた、中野式系の土器には尖底内部に「黒曜石」の破片を埋め込むといっまた。

道内を見渡すと中野式の頃、道南部には棒状・竹管状施文具での押引文や刺突文あるいはループ文などを特徴とするトドホッケ式土器・春日町式宏ががある。トドホッケ式は美々4遺跡(図1-21-17・18)、春日町式は苫小牧市美沢4遺跡で中野式にそれぞれ伴っている。また、春日町式式は苫小牧市美沢4遺跡で中野式にそれぞれ伴っている。また、春日町式では送小牧市美沢4遺跡で中野式にそれぞれ伴っている。また、春日町式の類には尖底部を切断したような小さな平底の存在が知られており、この類には尖底部を切断したような小さな平底の存在が知られており、この類には尖底部を切断したような小さな平底の存在が知られており、この類には尖底部を切断したような小さな平底の存在が知られており、この類には尖底部を切断したような小さな平底の存在が知られており、この類には尖底部を切断したような小さな平底の存在が知られており、この類には尖底部を切断したような小さな平底の存在が知られており、この類には尖底部を切断したような小さな平底の存在が知られており、この類には大いである。

式の古い段階で、地域色の強い植苗式土器、大麻V式土器が成立するもの筒下層式土器が道央部に分布圏を拡大する過程で下層と式あるいは下層dT層出土資料などがあるが、千歳市内では見つかっていない。その後、円式土器に相当するものには石狩市上花畔1遺跡C地区や伊達市若生貝塚前期後半、道南部で円筒土器下層式が盛行する頃、道央部の円筒下層a

ある。 れ、 式期の集落は恵庭市柏木B遺跡にある。 唇断面形に違いがあり、 では土壙墓が調査されている。大麻V式は内面の施文は少なく、 もある。美々4遺跡、祝梅川小野遺跡でこの時期の住居跡が、 や開くか直立する。 と考えられる。 多くの場合口唇上および内面にまで施され底部の近くにまで及ぶもの 器面には斜行縄文、 植苗式土器 口縁部に縄文原体の押圧や太い貼付帯を巡らす特徴が 植苗式よりやや遅れるものとみなされる。 原体を縦・横方向に回転施文する縄文が施さ 図 1 | 24 1 は平縁で口縁部にむかってや 美々5遺跡 縄文や口 大麻V

(図1-21-21)と称される特徴的な形態のすり石がある。は無茎三角鏃が後半期には有茎鏃がある。また、後半期には北海道石冠石器群は早期と基本的に変わらないが、石鏃の形態が変化し、前半期に

綱文人の墓

や海岸砂浜、洞窟など限られた場所(遺跡)になる。にくいのが実情である。北海道全域をみても人骨の残存が良好なのは貝塚しながら火山灰質の土壌におおわれた千歳地域では骨は融けやすく、残りいつの時代のものであれ、人骨が存在すれば、墓の認定はできる。しか

ことがある。
ことがある。
ことがある。
ことがある。
ことがある。
ことがある。
日がなくても副
のなどは比較的分かりやすい。また、何もなくら
「墓」と判断することがある。
日がなくても副
のなどはとみなせるものや赤ら
「墓」と判断することがある。
日がなくても副
のなだな、その特徴か

て入れられる大きさであること、穴を埋め戻してあることなどから墓であた。の楕円形、深さ五六ホッである。人骨の残存はなかったが遺体を折り曲げる。B地区のP‐9と呼ぶ土壙で、これは平面形が長さ一一七ホッ、幅八四縄文時代前期、綱文式土器の時期の墓はキウス5遺跡で検出されてい

日常に使っていた道具と同じ素材、 ほかに黒曜石の石核一点、 つまみ付きナイフ六点、 ると推定している。 LP-2にも類似した石器群が検出された。 土壙の中からは、 スクレイパー一○点、石斧四点、 剥片四六点が出土した。これらの石器類は当時 同じ形態である。 石鏃五点、尖頭器二 C地区のLP-1、 点、 軽石三点などの 石錐三点、

ど北海道の広い範囲で見られる。 伴う人々の墓で、 これらと同じような、 江別市、 日常的な道具が納められているのが綱文式土器を 苫小牧市、 芽室町、 音更町、 釧路市、 美幌町な

査であった。このうちL地点と呼ぶ一万五○○○平方㍍のなかにおいて、 がある。ウサクマイ遺跡の発掘は一八鈴を対象とする広大な範囲の分布調 一㍍四方の試掘穴二ヵ所の土壙底からベンガラが検出された。 千歳市内では美々貝塚北遺跡、ウサクマイ遺跡L地点にもこの時期の墓

綱文・中野人たちの住居・縄文時代前期前半期の集落

模を知る良い手がかりとなる。この時期、 方形を基本に規格性が高い住居が、川に臨む斜面や低平地に作られてい 前期前半期の綱文式および静内中野式の住居跡は千歳市内では美々4遺 多くの場合、 美々5遺跡、 住居内に炉を持たないこともひとつの特徴である。 キウス5遺跡で調査されており、 道央・道南部を通じ、 集落の立地や構成、 長方形や 規

隅丸長方形で長径が三・五㍍に満たない規模のものが三分の一を占め、 正方形と長方形が基本で、 できる場所にある。 図 1 | 一六ばの斜面部に四列から五列が弧状の配置を取っている。 キウス 5遺跡からは前期初頭の綱文式土器群の集落が検出されている 三七軒が発見された。 22 住居跡は緩やかに蛇行するキウス川に面した南向き緩斜面 住居跡は長軸方向が等高線にほぼ平行で、 斜面裾には湧水を集めた沢があり、 大きさなどにより三タイプに分類されている。 平面形は隅丸 標高二三~ 水場を利用 ま

> から、 様の規格の住 ほど離れた低 集落を構成し 定され、 である。 跡は二軒だけ 居があること い平坦部に同 また、七五片 推定される。 ていたものと で六軒ほどが 階の変遷が想 土を伴う住居 た炉である焼 時 多い時期 期 集落が で 三 少な 八段

-22キウス5遺跡の前期前半期の集落(道埋文1996)

図 1

広がりを持つことも予想される。 まらずさらに

調査範囲に止

遺跡と下流に連続する美々5遺跡にある れ 二二ばの斜面下部から低位平坦面に、それぞれ三三軒と七二軒が発見さ ている。 中 野式系土器期の集落は苫小牧市との境界を流れる美沢川北岸の美々4 検出された土器から判断すると美々4遺跡の集落が若干早い時 (写真1-2)。 ずれも標高八

る。 柱穴様小ピットがめぐる形態である。 側四〇景四方ほどの範囲に七七軒が集中しており、 されていたと考えられる。また、美々貝塚北遺跡で検出された墓域、盛土、 長期にわたってこの場所で生活が繰り返され、 ものもある。径二~四㍍の小型のものに加え、長径五~六㍍の中型で形態 ものは無い。 形のものが主であり、 期 5遺跡では低位平坦面に一○軒以上が重複して構築されていることから、 整ったものが出現し、 (石川野式) また、壁柱穴のみがめぐる住居には炉が一般的にみられる。 土壙をともなう住居群も主に静内中野式期のものである。 美々5遺跡では隅丸方形が基本であるが、 である。 長径が五景を越すものは少ない。 美々4遺跡では長径が二~三景、 後者では主柱穴と壁際に小柱穴がめぐる例もあ 安定した拠点的集落が形成 いずれの竪穴も壁際に 長円形や不整形の いずれも炉をもつ 平面 形が隅丸方 丘陵の南 特に美々

苫小牧市美沢11遺跡では炉跡や柱穴のほとんど無い径二・五片前後の隅

成されている。 期にかけて形成されたものであ と豊原2遺跡に中野式期の集落が る。 ŋ 斜面中腹から二五軒見つかってお 丸方形・長方形の住居跡が南向き これらは綱文式から春日町式 道南部では函館市中野B遺跡 主に隅丸長方形の住居で構

ている。 機能を疑問視する見解も表明され の竪穴については、 しかし、この様な炉の無い 住居としての 方形

> 段階との違いが認められる。 浅く壁際にそって柱穴が並び、 形に近いものが検出されている。 6・峰浜海岸1遺跡などで多数見つかっており、 する朱円式・温根沼式期ものは斜里町峰浜ポンシュマトカリベツ9・大栄 通した形態のものが発見されている。これは平面形が多角形で掘り込みが 道東部は綱文式期のものは芽室町小林遺跡と美幌町三 中央部に炉が設けられるものである。 平面形、 掘り込みの深さも多様になり前 多角形に加え楕円形、 一橋遺跡で、 ほぼ共 円

縄文中期と生業

縄文文化の地域性

に加え、 内低地帯以南は東北地方と同じ落葉広葉樹林帯、 応した生活様式 る糧となる動・植物相の違いとなってあらわれ、それぞれの自然環境に適 広葉樹と亜寒帯性の針葉樹の混交帯(針広混交林) 北海道の森林植生は、 地形、 気候などの自然的環境の違いはそこで生活する人々の生き (考古学では文化と呼ぶ) 日本海側寿都町と太平洋側長万部町を結んだ黒松 が成立することになる。 それ以北の地域は温帯性 に区分される。

作り、 文様を付ける道具、 始まり、 てあらわれるが、とくに土器の変化は顕著である。 は住居の形態や集落の場所、 様式圏)において土器作りには共通の流儀がある。それ故、 縄文時代の文化は時代の変遷とともに各地域で消長がみられ、 使用していた人々の文化を表すものといえる その製作技法、 さらには焼き方にいたるまで、 土器の形式 墓の形や埋葬法、土器や石器組成の違いとし (平底や尖底など)、文様の付け方や 原料の粘土の選択から ひとつの文化圏 土器はそれを 具体的に

相など、 文化圏が認められる場合もある。 時期により道内全域がほぼ同 生活様式の変化と連動する。 の文化圏に含まれることもあれば、 そして土器の変化は住居の形や墓の様 複数



写真1-2 美々5遺跡の集落

る は 道北部 「地帯を含む道央部、 津 北 軽 海道では黒松内低地帯よりも南 海峡を越えて東北北部と共通の文化圏に組み入れられることもあ 0 大きく四 地域 さらに日 の文化圏に分けられることが多 高山 側の道 脈以東の道東部、 南 部、 この境界より そして大雪連峰以北 61 また、 北 側 道 0) 南部 石狩

自 とともに全道に分布するようになる。 とつの文化圏としてまとまる時期で、 土に繊維を含む尖底土器となる。このような土器は在地系の土器 この要素をもった土器が出現し、 る。 縄 文時代早期末葉は千歳周辺部を含め北海道 前期になると関東の花積下層式と共通の文様要素・構成をもち、 地域性があらわれてくる その その後、 広がり 少しずつそれぞれの地域独 円に東釧路Ⅳ式土器がひ 、は東北北部にまで及んで **図** 前半期、 1 1 (綱文式) 23 道央 胎

円

る

前期

関 ば が

押型文尖底土器 5200 年前 押型文平底土器 4500 年前 円筒土器上層式 円筒土器下層式 5300年前 4500 年前 図1-23 縄文時代前・中期の土器文化圏 軽 通 を基本に 場 部と道南部はほぼ共 み 通 13 かせる。 所 した文化的様相を

その

形態も方形

規格性が高

は

斜

面部であ

住

居の立地

0)

北筒式土器

4200 年前

される。 成、 鏃、 石などが組み 7 してい 副 石 砥 葬品が多く 材 器 . る。 道 石 は 東部 形態が共 そ 墓は概 石斧、 0) 合わ 0) 組 前

> 縄文時 0 類となる。 初 土 頭 一器は繊 代前期前半に特有の装身具であり、 は 道南 外形が円形の 維を含み、 道央部と同様な土器が分布し墓の様相 尖底ではあるが北海道独自の 玦 状 耳飾 ŋ 北海道でも各地で見つか $\widehat{\mathbb{Z}}$ 1 21 地域 も共 19 色 、通するが、 は 日 が強 本列 13 ,押型文 って その 島 0

0) 後 期

在する。 岸部より遅れて前期末頃に認められ、 跡に円筒下層式期の集落があるが、 筒土器文化圏には北海道式石冠 すり 連 . 筒土器文化圏に含まれる。 前期 しば認められる。 成立する。 (原料) 後半 石があり、 この (円筒下層式) した、 幾 時期の遺跡からは掌大で厚さ二が内外の この この時期に特有の 分形態を変えながらも前期後半から中期後半期まで存 特殊な と中期前半、 道央部では太平洋岸沿 「粘土」 図 千歳周辺では円筒土器文化の影響は 1 遺物である可能性がある。 独自の特色を持った土器 -は、 道南部は東北北部の影響をうけ 21 その出・ 21 と呼称される特徴的な形 土状況から土器作りに 11 の白老町虎杖 「粘土版 また、 (植 浜 が 苗 (2)遺 式 円 た

る。 接 遺 する押型文平底土器へ移行し、 茅部地区 は 沿 触 跡 地 いに道東・道北部にまで広がりを見せる。 中 道東 方色 期前半には道央部を含め円筒上層式土器が盛行 を物語ってい 13 は の強 縄文と押型文 では青森県の三内 道北部では前期の終わり頃に器形や文様構成が円筒土器と共 11 土器 (萩ヶ岡式) (が同時に施文された土器があり) 丸山遺跡に匹敵する大規模集落が その後分布圏を拡大する。 が出現する。 千歳・ この時期道 江 し、 別市周辺の道央部 そ 円 南 筒 道 0) 形成され 部の 分布 土器文化との 北の美深町 圏は 函 [館市 海岸 7 11

土器は中期末葉に道央部で盛行 中 期後半期、 北海道は各地域で特色 道 南 ある土器 部の 部にまでその文化圏を広げ が作ら ħ る。 北筒式系統

ている。

文化の境界地域(石狩低地帯

ては次第に減少する。

ては次第に減少する。

がいまなどの温帯性樹種はここから北部や東部にかけいま、コナラ、サワグルミなどの温帯性樹種はここから北部や東部にかけである。石狩低地帯は顕著な境界ではないが、それでもクリをはじめトチ州と区分され、植物の分布上からは黒松内低地帯でブナが北限になる境界州と区分され、植物の分布上は津軽海峡に設定されたブラキストン線により本

る。 平野から太平洋側の勇払平野まで連なる延長七○≒余り、 点である道北部は北からの文化流入の窓口であり、 有することが多い。 ある文化伝統が認められる。 低い土地で、 石狩低地帯は北海道の中央部と南西部を区分するように日本海側の石狩 半島部である道南西部は本州との関係が各時期を通じて強く文化を共 諸島との関係も深く、 地形的に北海道を大きく半島部と胴部の二つに分けてい これに対し、 東日本の縄文文化のなかにあっては独自性 サハリン (樺太) やシベリア大陸との接 また道東部はクリル 標高五〇以以下

町フゴッペ貝塚)。 ・ が、例えば縄文時代中期にあって円筒土器文化はこの境界を越えて波及すい。例えば縄文時代中期にあって円筒土器文化はこの境界を越えて波及すい。例えば縄文時代中期にあって円筒土器文化はこの境界を越えて波及すい。をして石狩低地帯は、道南西部と道東北部の文化の接触地帯と言ってよ

円筒土器上層式と北筒式系土器

域は「円筒土器の文化圏」に含まれる。中期前半、道南西部で円筒土器下わち東北地方北部と北海道南西部(渡島半島)、石狩低地帯にかけての地縄文前期後半に円筒土器下層式が出現して以来、津軽海峡の南北、すな

が四五〇〇年前、 現在この編年は、 期初頭に位置付ける説が提唱され、これまでの編年観の修正が行われた。 が、 は、 的な文様が発達する。その初期と終末期を除きほぼ道南全域に分布する。 データとも整合性があり、妥当なものと理解されている。 された成果をもとに、道央部に分布する北筒式を中期末そして余市式を後 の段階から続いていた。近年、 形は筒形であるが大型となり、 層式の伝統を強く受け継いだ円筒土器上層式が認められるようになる。 雄大な突起が形成されることで、 北筒式は北海道円筒土器の略称である。この土器の時間的位置につい 円筒土器との関連で縄文前期から中期にかけてとする見解が研究初期 一九三〇年代から多くの研究者により細分・編年が試みられてきた 江別市萩ヶ岡遺跡の層位的出土状況に加え、 北筒式が四二○○年前といった放射性炭素年代の測定 円筒下層式との大きな違いは台形・花弁状 一九八〇年代以降の大規模発掘により蓄積 貼付帯、 沈線文、 縄の押捺による装飾 円筒上 層式

東北地方では円筒土器上層を a・b・c・d式または e式を加えての細東北地方では円筒土器上層を a・b・c・d式または e式を加えての細東北地方では一切にある。

や大麻V式からの系譜を引くもので、口縁部文様帯に縄 線文や絡 条 体圧持ちながらも地域色の強い土器が出土している。これは前期後半の植苗式と円筒土器上層式は余市町フゴッペ貝塚で、上層 a式と共通の文様構成を b式頃になり始めて住居跡が発見されるようになる。広く道央部を見渡す 千歳周辺では円筒土器上層 a式土器は見つかっていない。円筒土器上層

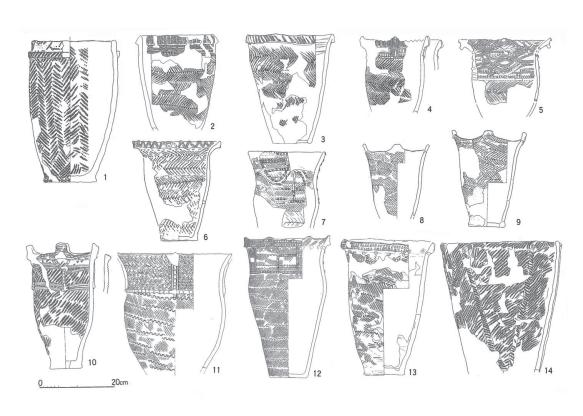


図1-24 縄文時代前期後半および中期の土器

を萩ヶ

岡2式とする型式設定もなされている。

道央部ではサイベ™式のあと天神山式土器が、

次いで柏木川

中期後半、

期の住

|居跡が多数発見されるようになる。

なるとその分布圏が北の方へ一気に拡大し、

7

る

図 1 |

 $\begin{array}{c} 24 \\ 1 \\ 2 \\ 5 \\ 4 \\ \end{array}$

続くサイベ沢Ⅲ式

図 1

 $\begin{array}{c}24\\7\\5\\9\end{array}$

は江別市萩ヶ丘遺跡で多数出土し道央部の特色を良くあらわしていること

サイベ沢四 a式相当を萩ヶ岡1式、サイベ沢四6式・見晴町式相当

らなり三段階ほどの変遷が分かっている。

なお、

サイベ

沢Ⅲ式相当の土器

オサツ14遺跡の集落は

○軒

か

千歳市内の遺跡からもこの時

内面に 式土器、 上の広 兀 ぐるのが一般的である。 貼付帯が特徴で、 れている。 沢川北岸に連続的に位置している美々3・美々4・ 大規模な環壕はこの時期のものである。 い肥厚帯と四カ所に太い棒状突起をもつ特徴があり、 北筒式 . ㍍の台地上から住居跡三四軒が多数の土壙や焼土跡とともに検出されて 四軒からなる集落が形成されている。 住居跡の大きさは様々で平面形は卵形が多く、 11 瘤 北筒式(トコロ6類) 範囲に北筒式期の遺跡が形成されている。 図 1 | 柏木川式 を形成する外側からの円形刺突文が特徴で、 道央部の北筒式の母体と考えられる。 24 12 • 図 1 1 道央部をはじめ道北・道東部に広く分布する。 13 24 11 11 土器へと移行する。 は筒形土器であるが文様の変化に乏しく、 はくびれる器形、 道南部では大安在B式土器が知 天神山式は口縁部に広 美々3遺跡では標高 美々5遺跡では、 先端部ピットや段状 千歳市丸子山 オサツ14遺跡には 口縁部の小突起と 口縁部に 遺跡 台地 列 美

では住居跡が調査され、出土した土器は絡条体圧痕文を多用するフゴッペ幌市T310遺跡でも見つかっている。また、千歳市ユカンボシC9遺跡痕文を多段に施し、刺突文・押引文を加える特徴がある。同様の資料は札

、塚資料の影響がみられるもので、この土器には円筒土器上層b式が伴

が伴うことが知られている。部のノダップⅡ式土器から煉瓦台式土器に相当するもの(図1-24-14)の張り出し部をもつものがある。道央部の北筒式に平行する時期には道南

地域と交易(黒曜石の道

交換は縄文時代の早い時期から盛んに行われていた。ことなどでわかる。このように自らの生活圏を越えた物資の交易あるいはら見つかることで、また東北地方北部の土器が北海道にまで伝播しているの材料・素材で言えば「黒曜石」が縄文時代各期を通じ道内各地の遺跡かの材料・素材で言えば「黒曜石」が縄文時代各期を通じ道内各地の遺跡から見つかることで、また東北地方北部の土器が北海道にまで伝播している。

勝三股 央・道東地方に点在している。 が黒曜石をかなり広い範囲に流通させていたことが分かってきた。 から出土する黒曜石の産地を推定することが可能となり、 寄 分布は限られる。 黒曜石は火山性噴出物からなる天然資源なので地質構造に規定されその (名寄市)、 (上士幌町)、 豊よ 泉がずみ 道内の黒曜石産地は白滝(遠軽町)、 赤井川 (豊浦町)、 (赤井川村) 近年の理化学的産地分析の進展により遺跡 美ʊ 蔓ɒ (清水町) の四大産地が知られ、 などの小規模な産地が道 置語 戸と 縄文時代の人々 (置戸町)、 ほかに名 十

いた黒曜石製石器と剥片合計一八六点について分析した結果、千歳から最善千歳市キウス5遺跡では前期前半尖底土器期の土壙墓三基に副葬されて

ながら豊泉産、置戸産のものもある。の原石山)は二点であった。同遺跡での別な試料を用いた分析ではわずかの原石山)は二点であった。同遺跡での別な試料を用いた分析ではわずかも近い赤井川産が九七哲と圧倒的に多く、十勝産は三点、白滝産(二ヵ所

が津軽海峡をはさんで展開してい らされたことも推測されている。 れていることが指摘され、 川産緑色片岩、 では分析した資料六六六点のうち二五≦以上が赤井川・白滝・置戸産など 通している。 さらにまた三内丸山遺跡では磨製石斧の原材に日高地方の沙流川支流額平の か三○ヵ所の遺跡から三五○点以上もの道内産黒曜石が見つかっている。 道内産地で、 円筒土器の伝播ルートとは逆方向に、 前期・中期の大規模集落として知られる青森県三内丸山前期・中期の大規模集落として知られる青森県三内丸山 なかでも赤井川産が占める割合が高い。 深川市周辺の神居古潭峡谷のヒスイを含む青色片岩が使わ 原石のみならず石斧そのものが北海道からもた 前期と中期には土器や石器の大きな移 道内の黒曜石は東北北部にまで流 青森県ではこのほ

通の経路が整っていたことを示すものとみられる。よ、産地から離れた遺跡に複数の原産地の黒曜石が集まるのは何らかの流易品(原石や石器)としてほかの地域に運搬したものなのか、いずれにせ原石を求め現地へ採掘しに行ったのか、あるいは原産地周辺の人々が交

ŋ は原産地から遠く離れた地域へは石器そのものが流通するという消費地 南西部の遺跡では、 用の石器の集積は他の地域へ供給するため一時的に保管された状況が想定 うした特別な出土状況はここが石器製作場であることを示し、 できる。 (縄文中期後半北筒式期) ほかに黒曜 大産地である十勝三股を背後に控える十勝管内音更町西昭 反面、 頁岩製石器が大半を占め、 石の剥片・砕片の集中が周辺の五ヵ所から検出され 黒曜石製石器だけが単独で見つかることが多い。 では一○七点もの石槍が一ヵ所にまとまってあ 黒曜 石製石器がわずか 同時に未 和2遺 である道

つの様相をあらわしている。

きナイフは精巧な作りで、 製品として持ち込まれた可能性のものがある。 ことが分かる。また、縄文早期 期末葉北筒式期) 市梅川4遺跡C地区では多量の黒曜石剥片とともに石槍の未成品 のものとは対照的である。 大半が黒曜石製といってよい。 千歳周辺の遺跡では黒曜石の場合、 が多くあり、石材を手に入れここで石器を製作していた 在地で作ったとみられる粗雑な作りの黒曜石製 ・前期の頁岩製の石器の一部には道南から 平成十九 原石自体もよく発見され、 (三〇〇七) なかでも頁岩製のつまみ付 年に調査した千歳 剥片石器 (縄文中

大形住居跡

期から後・ 丸長方形、 内小清水町アオシマナイ遺跡にあり、これは長軸長九・八㍍、平面形が隅 初頭にかけての時期である。早期後半(条痕文平底土器) 布圏を広げる。 発見される。おおむね長径が八~一○㍍を超す規模のもので、 りはるかに大きい規模の長方形や楕円形を呈する「大形住居」 北海道・東北・北陸地方を中心とした東日本一円で、 晩期にかけて認められるが、とくに前期前葉から中期後葉に分 複数の炉を持つもので「ロングハウス」と呼称されている。 道内でその出現が顕著となるのは、 縄文中期後半から後期 通常の竪穴住居よ のものは網走管 縄文時代早 がしばしば

ある。

すると一・五倍程の広さとなる。 が楕円形ないしは長方形で、 長方形大形住居_ たうえで長軸八~一二片、 東日本一 円の前・中期の大形住居を集成・分類した武藤康弘は、 ては、 平均で二〇平方は余りという算出例があり、 の主体であるとしている。 短軸四~五次、 「従来の認識よりも小形である」と断りを入 縄文時代の前 中期の住居 これと比較 平面形

この基準を参考に、 便宜的に長軸長が一〇㍍を超すものについて限定す

その機能については、

市式)であり、 小牧市静川8遺跡B地区に早期後半の東釧路Ⅲ式期のものが一 歳六遺跡六軒、 ると、千歳市周辺部では一四遺跡において二七軒が認められる。 中期後半期~末葉 (円筒上層式・柏木川式・北筒式) から後期初頭 前期のものはない。 苫小牧八遺跡一○軒、 恵庭二遺跡一一 軒である。 軒あるほ 時期は苫 内訳は千

は、

縄文中期末葉北筒式期でベンチ状の構造を持つ。また、 初頭タプコプ式期のもので 円形である。 ね長軸長一一~一五ば前後、 六遺跡で各 沢Ⅲ) 式期、 千歳市内ではオサツ44・ママチ・丸子山・末広・美々3・メボ その時期は、オサツ14遺跡 軒が確認されている。 美々3遺跡は柏木川式期、 短軸長六~一〇㍍に収まる隅丸長方形や長楕 平面形が分かるのは半数であるが、 (写真1-3) 末広・メボシ川2遺跡のものは 丸子山遺跡は後期 が円筒上層 シ川 (サイ 2 の 概

とカリンバ2遺跡 庭市カリンバ1遺跡(三軒) 期のもので六対一二本の柱 から後期初頭 突端に長軸長一六・八片 美沢川に面した舌状台地 ものである。 穴を持ち、 住居跡がある。円筒上層式 苫小牧市美沢 2 遺跡では 軒は中期末(北筒式) 炉跡はない。恵 (余市式) (八軒) 0



— 3 オサツ14遺跡の大形住居跡

ある。 が認め難いといった論もあり、 雪地帯と分布が重なることから冬期間における堅果類の加工やアク抜きに には宿泊施設となる多機能を備えた宴会場的場所とする説などがある。 伴う共同作業所小屋とする説、 複数の炉また内部空間を区切る施設がある大形住居の検出が増加し 大形住居だけで構成される集落があることなどから、 公共行事・儀礼・祭りの執行、 複数の家族が住む一般的家屋とする考えも 集会所、 その特殊性 時

域 めこの周辺が後期初頭期の拠点的集落であり、 北海道内では例を見ない 間における 住居であることが想定されている。 **、炉を持ち、長方形に配された主柱穴と壁際に巡る柱穴の配置から壁立式** 恵庭市カリンバ1遺跡 「集会所」 的役割を果たしていたことが想定されている。 『のJH21号住居跡は長さ三○㍍、 「超大形」とでも言える長大な住居である。 そして隣接するカリンバ2遺跡を含 大形住居が集落を越えた地 幅九景であり、 複数

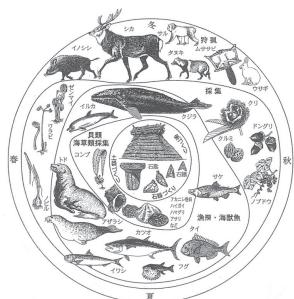
とから集落の中で重要な役割を果たしていた「構築物」であったことは間 違いないであろう。 道内では、大形住居は単独あるいは一、二軒で発見されることが多いこ

生業・植物採集

類は春から初夏にかけて採集されていた。そして山菜類は春と秋に堅果類 類や海獣はその回遊の時期により獲る季節は決まっていたであろうし、 は計画的行われていたようである。 、ー」として描いている(図1-25)。この関東地方の季節変化を念頭に を含め、このような縄文人の年間の秩序に則った行動を「縄文カレン 季節性をよく知っており、 縄文時代の生業は主に採集、狩猟そして漁撈である。 パされ たものを見ると、 主に陸上の狩猟は秋から冬に活発に行われ、 いつ、 どこで、 小林達雄は土器や石器作りさらに家作 何を採る・捕るかという活動 縄文人は対象食料 貝 魚

> である。 もちろんのこと秋 や根茎類の採集は

う。 とみてよい を種類ごとに計 0) よく利用していた ち植物食料を最も りにある多種多様 ているが、 な資源を食料とし 可食部分の熱量 当時の人々は周 縄文人の食料 このう ・だろ



縄文カレンダー (小林達雄1996)

図1-25

Ļ されている。 食料の約半分はトチノキ、 出土する食料の残渣から可食部分のカロリーを換算する方法が試みられ ているという分析結果がある。また、滋賀県粟津湖底遺跡の貝塚調査では、 カロリーの点からみると木の実やイモ類などの植物性食料が最も優れ コナラ属といった木の実であったとの推計もな

体は、 であるがノビル、 る。このうち縄文時代に食料として利用されたと考えられる野生の植物遺 カザ属、 ツ18遺跡では縄文時代中期後半期に形成された焼土 はオニグルミ、 北 海道内では縄文時代の一一一 堅果類九種、 ウルシ属、 コナラ亜属、 カタクリなどの根茎類、 果実類 ウドの種子などもある。 一四種の計二三種類ほどである。 クリ、 遺跡から植物遺体の報告がなされてい トチノキの堅果類である。 また食用とされた可能性のある 中でもよく利用され (焚き火跡) ほかにわずか 千歳市、 が五 ている

サ 0)

○ヵ所ほど検出され、土壌水洗の結果、細かく割れたオニグルミの堅果を○ヵ所ほど検出され、土壌水洗の結果、細かく割れたオニグルミの堅果をでかったユリ科ネギ属(ヒメニラ・ギョウジャニンニク・ノビル・千歳市ケネフチ5遺跡(縄文中期)では遺物として残り難くこれまで発見千歳市ケネフチ5遺跡(縄文中期)では遺物として残り難くこれまで発見が少なかったユリ科ネギ属(ヒメニラ・ギョウジャニンニク・ノビル・マメ科の種子など食用・飲用に可能な植物遺体が検出されている。

する伝統的方法が知られている。乾燥させて保存したドングリをキハダな シャーベット状にして食するという。 どの果実や動物性蛋白・脂肪と一緒に煮込む、また屋外に置いて凍結させ 加熱してアク抜きしないと食用にはならないが、アイヌ民族には直接調理 ていない。ミズナラなどの果実いわゆるドングリはタンニン成分が多く、 粉を取ることをしないこのような利用法が採られていた可能性がある。 もあり、 コナラ、カシワの三種類が分布するが、縄文前・中期での利用状況はわかっ 文時代早期からよく利用されている。 オニグルミは加工せずとも、 皮を剥きサケの粗やキハダあるいはヤドリギと煮込み、 よく使われていた。ドングリにあっては縄文時代においても、 加熱し潰すだけで食用にできることから縄 キハダは熟したものを生食すること コナラ亜属は千歳周辺でミズナラ、 凍らせて 澱

みる考えもある。 文化とともに東北地方から持ち込まれ、人間が管理し北へと普及させたと 文化とともに東北地方から持ち込まれ、人間が管理し北へと普及させたと 北進速度がブナ林に比べ異常に早いことから、クリは前期後半に円筒土器 北進速度がブナ林に比べ異常に早いことから、クリは前期後半期である。渡島 クリの子葉が出土するのは道南部が早く、縄文前期後半期である。渡島

どから澱粉を取っていた可能性は高いが、これらの植物遺体の遺跡からのさらに、アイヌ民族の例からみてオオウバユリやカタクリ、ヒシの実な

られる。類を潰すだけでなく、根茎類の根を擂り潰す道具としても利用されたとみ類を潰すだけでなく、根茎類の根を擂り潰す道具としても利用されたとみ発見例はほとんどない。たたき石やすり石および石皿といった道具は堅果

近年、骨に含まれるタンパク質(コラーゲン)の炭素・窒素安定同位体 分析によって、食生活を復元する試みがなされている。これによると、縄 分析によって、食生活を復元する試みがなされている。これによると、縄 出ている。対象とした一二ヵ所の遺跡(前・中期四ヵ所、後・晩期八ヵ所) 出ている。対象とした一二ヵ所の遺跡(前・中期四ヵ所、後・晩期八ヵ所) 映を挟んで様々な物質や技術の交流が盛んにありながらその食生活はまっ にく異なるのである。

丸子山遺跡と環壕

遺跡について 市街地から約北東へ五*□の中央地区に位置する丸子山遺跡とのひとつであり、報告では長都沼周辺の擦文文化期竪穴住居址群の遺跡とに設立された文化財調査委員会が昭和三十六年に現地調査で確認した遺跡跡は、昭和三十三(一九五八)年、当市が文化財保護条例を施行し、同時跡は、昭和三十三(一九五八)年、当市が文化財保護条例を施行し、同時

という広大な畑作地帯に変容し、 低地に向かってキウス川などの小河川が多数流れ、その流域には国史跡「 る長沼町との行政境に長都沼の輪郭がわずかに残されている。 年から四十四年に実施された国営の灌漑排水事業により、 を中心とする大規模な低地が存在していたが、 していた馬追丘陵の西側は、 ス周堤墓群」をはじめとする多くの遺跡が立地している。 千歳市の北東部に位置する中央地区は、 なだらかな段丘が形成され、 全く沼の姿を留めていない。 東側に馬追丘陵、 現在の長都沼は昭 実に一八〇〇谷 丘陵部から西 西側に長都沼 北に隣接す 長都沼に面 和二十六

時代 に約一万二〇〇〇年前の細石器を包蔵する恵庭a火山灰、 この基盤の上には、 丘陵 三九年に噴出した樽前a火山灰が順に堆積し丘陵を覆っている。 「古砂丘」が基盤になっていることが丘陵断面の調査により判明してい 晩期) が寒冷気候の中で砂漠化し、 一地していた。 丸子山 の尾根筋に並行して北流するオルイカ川 (晩期) の文化層である腐植土層、 遺 跡はこ から近世までの文化層である腐植土層、 この独立丘陵は、 しれらの 約二万年前の旧石器を包含する火山灰層上端の風 遺跡とは異なり、 強い北西風が火山灰を再堆積して形成した 約四万二〇〇〇年前に噴出 約 一〇〇〇年前の樽前c火山灰、 丘 左岸に位置する独立丘陵上に 陵部からやや西に そして最上層に一 縄文時代 した支笏火山 離 れ 7 (早期 縄文 化層 七

とができる 約二二㍍、長軸方向がほぼ南北を示す紡錘形をしていたことを読み取るこ 削平以前の 一査時点では丘陵の南側三分の一 地 形図からは長軸約一 が農地造成工事により削平さ 五〇以入 短軸約一二〇次、 標高 れて

Щ 長都沼からも良く見えたとのことである。 元の古老によると、 ことから比較的新しい呼称と考えられる。 の附近を踏査している松浦武四郎の記録や明治期 この丘陵をいつ頃から「丸子山」 語源 のようである。 沼のある頃は 」と呼ぶようになったかは不明である 「ポン山」 丸く小さな丘陵の外観が 長都沼の様子を記憶していた地 (pon-小さい・山) 0) 地図にも記載がない と呼び、 「丸子 が、

字を使用している。

取りを行 万二五〇平方景に及んだ。 -方景であるが、 この丸子山は畑地の中央に位置していたが、 九 九〇) 周囲 0) 耕作地と均平化を図ることになり、 火山灰を挟んで三 五年にわたって実施された。 一層の文化層が 農地の なあり、 調査面積は、 事前の発掘調査が平 拡大を図 延べ 八調査面は 約七五〇〇 る目 積は、 的で土

坦

部

から

傾斜面

に変換する地点よりやや下の斜面に

石器時代や第三章二節の擦文時代に係わる重要な発見 構や遺物が数多く発見された。

七ばの 苫小牧市静川遺跡の調査においてであった。 は、 る。 11 る目的で集落の周囲をめぐる遺構として良く知られて が 平坦部を取り囲むように台地の縁辺に沿って約一三 相次いだが、 る。 従来 昭 壕が造られていた。 縄文時代の 和五十五 「環濠」 そのひとつに縄文時代の (一九八〇) は、 「環壕」 本州の弥生時代に集落を防御す 環濠は弥生時代の代表的 の存在が明らかになったの 年、 当市の南に隣接する 「環壕」 台地先端 が

因で水が滞留しない 漢字を使用するが、 内でも稀な遺跡として昭和六十一年に国の史跡として 指定を受けている。 る縄文時代の環壕の出現は当時大きな話題となり、 なお、 空堀であることから、 静川遺跡や丸子山遺跡は 弥生時代の環濠は 地 濠 形 的 0) 0) 玉 漢 要

立地 環壕が発見された。 示すとおり静川遺跡の環壕よりやや規模が大き さ平均一・三㍍、 が掘られた位置は、 静川遺跡の発見から一〇年後、 P 掘 消狀況、 全長約一七〇㍍である。 断面形などの共通点が多い。 規模は、 段丘を横断する部分を除くと平 上幅平均二・ 今度は丸子山 表 1 七五 例えば 遺跡 が 20 13 深

当 遺 跡からは、 既に本章第二節第一項で述べられ 旧 石器から擦文時代までの 各期にわたる

環壕の発見

| 表 1 - 20 丸子山遺跡・静川遺跡 環壕規模比較表 | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------------------|-------|---------------------|------|------|------|-------------|--------|--|--|--|--|--|--|
| 遺跡名 | 全 長 | 幅 | 底 幅 | 最深度 | 平均深度 | 断面形 | 掘削土量※ | | | | | | |
| 丸子山遺跡 | 170m | 2.5∼ 3 m | 0.5m | 1.6m | 1.3m | V字形・U字形・逆台形 | 360 m³ | | | | | | |
| 静川遺跡 | 137 m | $2\sim3~\mathrm{m}$ | 0.5m | 1.8m | 1 m | V字形・U字形 | 206 m³ | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | |

※掘削土量の求め方:壕断面形を逆台形と仮定し、底面幅・幅・深度の平均値を用いて断面積を算出し全長に

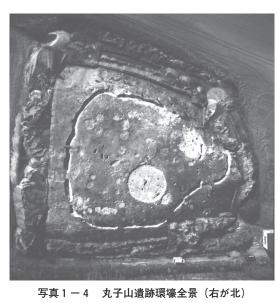
: 算出した土量は両者を比較するための概数であり、精密な測量にもとづく数値ではない。

遺構として認識されていたことから、

静川遺跡

にお

け



に搬出されたと思われる。

られている。

崩落などの影

とつの掘削単位として認識できる長さにほぼ一致している。このこと

長く連続する壕の中で形状差によってひ

掘削時の作業規模の標準的な単位が土坑三基分であること、三基

作業を行うグループは六人で構成されていた

掘削断

を構成する短い壕の長さや、

<u>=</u>

幅が五〇ボほどのV字形 響が少ない平坦部では底 面の形は、 けられていない。 な斜面の部分では壕が設

掘り上

同時に掘削するならば、

ことが仮定できる。

四

下側に廃棄され、 平坦部

る可能性がある。例えば、

同

一時間内

同

一季節など)に掘削された

げた土は、斜面では壕の が基本形である。

とから意図的に掘削域外 では観察されていないこ

なる。 の時間的区切りがあったことに 丸子山遺跡では九~一〇回

壕のみが連結した壕として存在したことなどが考えられる。この場

れていない場合がある。これは壕を掘削した時間的な違いを示してい

渡り口と考えられる以外の地点で、かなり近接した壕同士が連結さ

えるほうが合理的かも知れな が長く連続する壕を掘ったと考 数が多く労働力が大きいところ 複数の作業グループの中で、 差として捉えることもできる。 削する作業グループの労働量の また、 別な見方をすれば、 掘

<u>H</u>. 壕は丘陵を横断する部分から の丘陵先端に向かって掘ら

う作業工程・条件などを次のとおり想定した。

最初に一~二点の間隔を空け、

細長い土坑を個々に掘り、

後に土坑

を連結して壕を造る。

土坑の掘削には中に掘り方一名、

外に掘り上げ土の移動を行う運搬

この三基の土坑の存在とともに、壕の形状や掘削状況から壕の掘削に伴

はいずれも人為的に埋め戻されていた。

されたのは、三基が連なって発見された土坑であった。 北側の丘陵端部に新たに壕が設けられたことが判明した。

この土坑列に向かって先端が屈曲した壕があることなどから、これらの

当初に掘削を予定していた壕の一部であると考えられる。土坑

環壕造りの作業工程

丸子山遺跡では、

丘陵北側の壕が掘削途中で放棄され、

最終的にさらに 掘削途中と判断

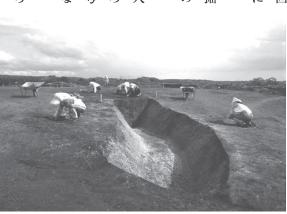


写真1-5 丸子山遺跡の環壕(南側の壕)

これは土坑内を調査す

るが、

地形に沿って設け

北側の急峻

る発掘作業においても全く同様であった。 方が一名として最低二名の人手が必要である。 三基の土坑の長軸長を合計すると約一○㍍になる。この長さは環壕

面部分が残されたようである れ 東側部分から先端部分が西側部分より先に完成し、 最後に北西斜

環壕の年代と目的

立していたことは明らかである。 余市式相当)と考えられている。 丸子山遺跡では縄文時代中期後半 静川遺跡では丸子山遺跡より新しい縄文時代後期初頭 環壕の年代であるが、 環壕内の出土遺物や住居跡などの関連から 今のところ環壕が縄文中期の後半には成 (土器形式では天神山式相当) (土器形式では と推定さ

る、 事を示す例として注目を集めてきた。 果としての姿だと理解されている。一方、 代表とする後期の周堤墓などがある。 は二軒の竪穴住居跡のみ、 ている。 縄文社会を考える上で極めて重要である。 遺構の場合は、 余力、共同作業を支える価値観の共有など、当時の見えない部分を投影し 後期まで出現する盛土遺構、今回の環壕、 .間の中でつくられたものと考えられており、縄文時代の大規模な土木工 近年明らかになってきている縄文時代の大規模な遺構は、 具体的で視覚的効果をもたらす役割を持っていたと理解されてい ここでの環壕は、 環壕が造られた目的は明確ではないが、環壕内からは静川遺跡で 物の廃棄に伴う儀礼行為が長期間にわたって続けられた結 精神的な文化に関わる聖域としての空間を区切 丸子山遺跡では環壕と同時期の遺構は存在して この中で大量の遺物を包含する盛土 大規模な土木工事の存在は、 環壕や周堤墓などは比較的短 環状列石、「キウス周堤墓群」を 大きな労働力を支える経済的な 前期・ 当時の 中期

と径が二江前後の楕円形、

Tピットは、

平面形をもとに長径が二点を超すような細長い溝状タイプ

小判形タイプに分けられる(写真1-5、

 $\underbrace{6}_{\circ}$

る。

狩猟の技術・キウス5・Tピットと柵列

込み用柵列」、 ほ ぼ を用いるものである。 万年にわたる縄文時代各期を通じて普遍的な狩猟技術は弓と矢 「網」などの仕掛けを設けて行う狩猟も行われていた。 このほか、 「陥し穴」 や 罠 あるいは 追

> 多くの における狩猟対象は、 と認識されその名称が使用されるようになったものである。 およびTピットの構造上の特徴や配置からエゾシカであることはこれまで れるものである。これは Trap・Pit=陥し穴の略で、 道内の遺跡で「Tピット」と呼称されている土坑は 年の函館空港第Ⅰ遺跡の調査ではじめて注目され、 研究者により説明されている。 貝塚や遺跡から多く検出される動物遺存体のデータ 昭和四十二(一九六 重力ワナ= 陥し穴」 そして北海道 とみなさ : 陥し穴

也

告が少なかった登別市の遺跡において ほどの調査区のほぼ全域から三七九基にも上るTピットが検出されて 五〇基近くが発見されている。平成十九(二〇〇七)年、 石狩低地帯や日高地方、渡島半島を中心とした地方に多く千歳市内でも六 全道で検出されたTピットは三八○遺跡以上、 (富岸川右岸遺跡) 八〇〇〇基近くに上 今まで発見の報 五〇〇〇平方以

り、 ŋ ピ 説と動物の動きを封じる逆茂木説の二つの 円形のものも近年発見されている。このう が 見解がある。 長軸に沿 ち楕円形、 ほかに径が一 ツ 高 これらについては殺傷用の逆槍とする } の場合は槍が設置されていた可 0) 杭痕は多いものでは一三本が認め 開 って複数の杭痕のあるものがあ 小判形タイプのものでは底部に \square どに満たない小規模なもの、 美々8遺跡には杭状の痕跡が 部にまで達している例があ 能性



— 5



写真1-6 杭穴のあるTピット

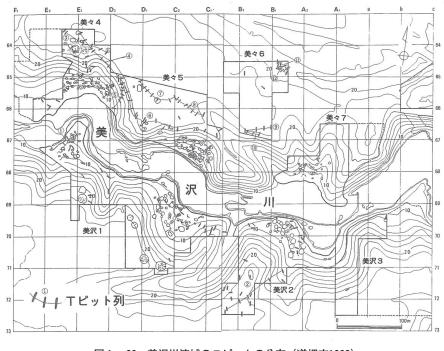
られ ピットが検出されている。ここでは同じタイプのものが から二七七基 ○基前後と、 千歳市と苫小牧市に広がる美沢川流域の遺跡群では、 (厚真町浜厚真3遺跡)、 かなり規則正しく列をなして配置されていることがわかる 南岸 (苫小牧市域) まれに溝状タイプのものにもある。 二〇九基、 合計四八六基にものぼるT 北岸 一列状が数基から (千歳市域 図

<u>26</u>

美

々

1



美沢川流域のTピットの分布(道埋文1982) 図1-26

n

て

る。 さ

その立地

以上がず

基 心に一

発

見さ

〇列 確認

四三

のものを中 溝状タイプ 8遺跡では

るが、 規模な沢の 面または小 つかってい 部分から見 様々な地形 縁辺や斜 み ると 台地

> もの道」 期に遡る可能性がある。 ら後期初頭の時期にほぼ限定でき、 について、 代の人々がシカの生態を熟知しており、丘陵から湿地に降りるい 道においてTピットが盛んに使用される時期については縄文時代中期末か た二つの見方があるが考古学的にはその検証はできていない。また、 底部といったところに位置している場合が多い。このような占地は縄文時 に沿ってその配置をしていたことも読み取れる。 それが 「仕掛けて待つ罠猟」なのか「追い込み猟」なのかとい 一部溝状のものについては縄文時代早 陥し穴猟の性格 わゆる「け 北海

ど前後、 ŋ に連結され、 ら 上る柱穴状の小土坑が列を成して検出された。 発見されている。ここでは標高二七景の台地上平坦部 出されている 「追い込み用柵」とみなされる大規模な仕掛けがキウス5遺跡C地区 概ね延長六景を限度として列の走行が変化し、 全体の平面形としては「魚鱗形」 ② 1 27 写真1-7)。 に閉じる空間が連続して作 小土坑の間隔は○・ 二列一組でエリ状 から、 三一〇基に 五,



キウス5遺跡の杭穴列(道埋文1997)



写真 1 **—** 7 キウス5遺跡の杭穴列

縄文時代中期末葉の北筒式土器の時期と推定されている。 動物を大量捕獲する仕掛けといえる。 用 問題はない。また、 た動物生態学・動物行動学の観点の妥当性から調査者は 杭を打ち込み、 総延長七○\以上もあり調査区外にも及んでいるのは確実で集約的に としての有効性を指摘している。 杭列の間に横木を渡せば間隔が広くても柵として構造上 シカは秋から冬にかけて群れになって移動するといっ この施設が作られた時期については 柵列は発掘調査範囲だけでも一六 「シカの追い込み

五 後期と共同墓地

斉一化される土器群

と加曾利B1式土器との広域交流によって形成された東北地方の後期中葉 からの後期の遺跡では希薄である。 越えて北漸して、手稲様式を形成した」とする(鈴木二〇〇八)。道東北 の宝ヶ峰式は、 斉一性が保たれる。 四〇〇〇~三五〇〇年前には再び温暖な時期を迎えていた。 してはどの地方よりもっとも華やかな土器様式である。 で以上に本州の影響が現われ、 縄文文化中期を通して冷涼・湿潤に向かった気候も、 土器の器形・文様が精巧で朱彩が施され、 その背景を鈴木克彦は「関東地方の堀之内2式の影響 沈線文、 磨消縄文の手法が流行し、 縄文後期に入った それが津軽海峡を 縄文時代後期と 後期はこれま 土器は

3 · 4遺跡 櫛・弓など多種・多様な遺物が出土することで知られている。 (能による器形の分化も進み、 作られるようになる。 ・動車道の大規模な建設工事が相次ぎ、 千歳市周辺では一 が検出されている。 キウス4遺跡など多くの遺跡が調査され、 九七〇年から九〇年代にかけ新千歳空港や北海道横断 深鉢、 この時期は集落の規模も増大し、 浅鉢、 スタンプ形・オロシガネ状土製品や朱塗り 皿形、 縄文後期の遺跡、 カメ形、 注口土器など用途、 膨大な量の遺構・ 美沢1遺跡、 薄手精巧な土器 社会の成 美々

熟が進んだ時代である。

前葉の土器

いる や、 きを描いている(図1-を持つ波状口縁の斜行縄文を地文として二から三本単位の沈線が弧や渦巻 色濃い。 地方後期初頭の土器が共伴することが知られている。 式から余市式土器群に変わる。 知内町涌元遺跡出土の涌元式土器は東北地方の後期初頭の土器の影響が 道南部の中期末から後期初頭の土器は、 口縁や胴部に貼付帯を持つ筒形の土器である (高橋一九九四)。 器形は円筒形や頚部のややくびれ、 28-3・4)。分布は津軽海峡沿岸部に限られ 余市町余市貝塚出土の余市式土器には東北 円筒系土器群最終型式の見晴 鉢形である。 口縁部下に円形刺文 四〜八の小突起

ものである。 器を標識とする(図1-28-5・6)。入江貝塚は噴火湾北東部 ○~三○㍍の海岸段丘上に位置し、 沈線で幾何学的文様が描かれた入江式土器は、 縄文前期から後期にかけて形成され 洞爺町入江貝塚出 の標高 土.

ペード形や工具のスパナーに似た形の磨消縄文などの文様が施されてお 松前町大津遺跡出土の大津式土器は横に連続させた渦巻形入組文やス 従来入江式に包含されていた土器群である。

残っていた可能性をもつ。 涌元式および入江式に相当する土器群の分布は道西南部に片寄り、 道東北部へは波及していない。 道央部では余市式がこれらの時期まで

道

(二) 中葉の土器

縄文時代後期中葉になると、 台付鉢、 浅鉢など用途別の器形が現われる。 筒形土器に加え、 新たに壷、 注口

内容的には羽状縄文の展開など、 東北地方とほぼ歩調を合わせている。

土器群が消滅し、土器はほぼ全国的に斉一化されていく。品など特殊遺物の分布からも類推できる。この時期には地域的個性を持つそれは深鉢以外に下部単孔の土器、スタンプ形土製品、オロシガネ状土製

が主となる。 船泊上層式土器は縄文および磨消縄文を施した土器で、横の平行沈線文

1-28-12〜4)。

1-28-12〜4)。

| 1-28-12〜14)。

| 1-28-12〜14)。

二)後葉の土器

遺跡 棒で突いて外面に小さな瘤をつくる突瘤文が特徴である。 南斜面に位置する堂林遺跡から出土した土器を標識とする。 堂林式土器は石狩低地帯を望む長沼町の馬追丘陵の標高四〇~ 台付鉢、)変遷を知る資料が得られている キウス4遺跡R地区等の盛土の調査で蘇澗式・エリモB式から堂林 壺、 注口土器などがある。 (熊谷二〇〇一)。 深鉢や鉢の口縁に裏面から細い 器種は深鉢、 文様は斜行縄文 千歳市美々4 五〇ぱんの 鉢、

らは周堤墓(環状土籬)を残した土器群である。その上に刻み目が加えられている場合が多い(図1-28-15~20)。これが施される。注口土器や壺には突瘤文はなく、かわって貼瘤文がみられ、または羽状縄文を地文とし、平行沈線文や鋸歯文、弧線文、磨消縄文など

口縁部、 鉢、 田一九九七·図1-28-21~26)。美沢1遺跡JX-3周堤墓内P-文が突瘤文とともに施されたものや、弧線・渦巻状の曲線文がみられる(中 土壙墓の一括遺物などが知られる。 三ッ谷式土器は堂林式に続くと見なされるグループで、 壷 胴部の文様帯全体に付されるようになり、 注口土器があり、 深鉢の口縁部は直立ないし外反する。 文様は斜行縄文に爪形 器形は深鉢、 貼瘤文が 1 0 浅

晩期へ発展する新しい手法で三叉文として形状を整えていく過程を示すも 共時性が知られる(米村一九九四 のである。こうした特徴を共有することから御殿山式との形式的な類似と 変遷をたどれるもので、三叉文状の文様の作出も堂林式土器以降に出現し 叉文状の三角形の文様をつけるのがひとつの特徴で、 縄文を施し、 底部も平底、 遺物で、 28-28-30)。貼付文は、 て施される小さな粘土魂による貼付文も代表的な文様要素である 道東の斜里町栗沢遺跡出土の栗沢式土器は、 器形は変化に富み、 丸底のほか上げ底のものもみられる。文様は地文として斜行 底に流動的に描かれた沈線のすき間を磨消すことによって三 先行型式の特徴である突瘤文からの型式学的 深鉢、 壺、 香炉、 徳利、 環状土籬に副葬され 頸部から胴部にかけ 注口と豊富である。 図 1

注口土器などがあり、深鉢土器には平縁または小さな波状をなし、突起をである。副葬品が主体で器種に偏りがあるが、深鉢、鉢、浅鉢、壷形土器、墓が発掘されている。御殿山式土器はこの墓の副葬品を主体とした土器群新日高町の御殿山遺跡からは人頭大の石を墓壙の上に置く八○基以上の

前葉の土器



前葉の土器: 1 · 2 :余市式土器、3 · 4 :涌元式土器(涌元遺跡)、5 · 6 :入江式土器(入江貝塚)中葉の土器: 7 ~11:手稲式土器(忍路土場遺跡)、12~14:鮏澗式土器(忍路土場遺跡)後葉の土器: 15~20:堂林式土器(キウス 4 遺跡)、21~26:三ツ谷式土器(美沢 1 遺跡)、27~29:栗沢式土器(栗沢遺跡)、30~32:御殿山式土器(美々 4 遺跡)

図1-28 縄文時代後期の土器

壷形土器の底部には高台が作られる。形文、貼瘤があり、これらが種々組み合わされている(図1-28-30~32)。もつものもある。文様は磨消縄文、 直線ないし曲線の沈線文、 列点文、 爪

配石遺構、環状列石や環状石籬

(一) 環状列石

内側や礫は焼けて赤色している。また、この周辺から後期初頭の十腰内一に土壙を築く配石や日時計形に配石したものなどがみられる。土壙を伴わないものも多く、すべてを墓とみなすことはできないようである。 一本×六・五点、二五個の角礫で構成されている。内環は中央部を二〇~三の標高三二点前後に立地する。環状列石は、列石が二重に巡り、外環は六・の標高三二点前後に立地する。環状列石は、列石が二重に巡り、外環は六・の標高三二点前後に立地する。環状列石は、列石が二重に巡り、外環は六・の標高三二点前後に立地する。環状列石は、列石が二重に巡り、外環は六・の標高三二点前後に立地する。環状列石は、列石が二重に巡り、外環は六・の標高三二点前後に立地する。環状列石は、列石が二重に巡り、外環は六・の標高三二点前後に立地する。環状列石は、列石が二重に巡り、外環は六・石道構後期なると道南地方などでいくつもの石を環状や方形に並べた配石遺構

道東斜里町の中心街から東に六㌔、海岸から南へ七○○㍍の奥蕊別川と道東斜里町の中心街から東に六㌔、海岸から南へ七○○㍍の奥蕊別川と道東斜里町の中心街から東に六㌔、海岸から南へ七○○㍍の奥蕊別川と道東斜里町の中心街から東に六㌔、海岸から南へ七○○㍍の奥蕊別川と

【土器に比定される土器が出ている。

時間の経過の中で環状に並んだ例を環状配石墓と呼ぶことがある。また、器や朱塗りの弓、硬玉製玉類などの副葬遺物が認められている。配石墓がしかし、後期後葉でほとんど姿を消してしまう。配石の下の土壙からは土配石を伴う遺構は後期中葉になると道央部や礼文島まで分布が広がる。

うちに礫を配列したと考えられる遺構を狭義の環状列石という(平林一九径数㍍から数十㍍の円形空間を画することを第一義的に意図し、短期間の

(二) 忍路環状列石

忍路環状列石は小樽市三笠山の麓にあり、標高二○㍍の緩斜面をならし忍路環状列石は小樽市三笠山の麓にあり、標高二○㍍の緩斜面をならしる路環状列石は小樽市三笠山の麓にあり、標高二○㍍の緩斜面をならしる路環状列石は小樽市三笠山の麓にあり、標高二○㍍の緩斜面をならしる路環状列石は小樽市三笠山の麓にあり、標高二○㍍の緩斜面をならしる路環状列石は小樽市三笠山の麓にあり、標高二○㍍の緩斜面をならしる路環状列石は小樽市三笠山の麓にあり、標高二○㍍の緩斜面をならしる路環状列石は小樽市三笠山の麓にあり、標高二○㍍の緩斜面をならしる路環状列石は小樽市三笠山の麓にあり、標高二○㍍の緩斜面をならしる路環状列石は小樽市三笠山の麓にあり、標高二○㍍の緩斜面をならしる路環状列石は小樽市三笠山の麓にあり、標高二○㍍の緩斜面をならしる路環状列石は小樽市三笠山の麓にあり、標高二○㍍の

査されている。
た人々の生活の場、忍路土場遺跡があり昭和六十~六十二年にかけ発掘調た人々の生活の場、忍路土場遺跡があり昭和六十~六十二年にかけ発掘調及路環状列石から五○㍍程のところから、この環状列石を祭祀の場とし

土偶、 を教えてくれる。 0) 水位が高くなり、 ある。低湿地遺跡は河川や湖沼の水辺において急速に土砂が堆積し、 類が大量に出土している。 獣骨、ニシン・ヒラメ・カレイなどの魚骨、 もに木製品、 葉 忍路土場遺跡は種吉沢川の左岸台地と川の氾濫源に広がる低湿地 堅果類、 多量の円礫を配した祭祀の場として利用され、 石棒などが出土している 繊維製品、 昆虫などが保存されている。 通常残らない木製品や繊維製品などの有機質製遺物や木 遺跡からは縄文時代後期中葉の手稲式、 漆製品が出土している。 オニグルミ・トチなどの堅果 当時の人々の生活や自然環境 ヒグマ・エゾシカなどの 特殊な器形の土器や 就澗式土器とと 遺跡 地下

一) 音江環状列石

鎮山、 力的に調査した。 東京大学の駒井和愛博士は、 余市町西崎、 ニセコ町北栄、 昭和 深川市音江など北海道の環状列石を精 二十四四 (一九四九) 年以来、 小樽市 地

調査で音江の環状列石は、 側よりややおくれる時期のもので、 造に違いがみられ、 て三基がみられる。これらは二ば前後、 穴様墓壙をもつ墳墓遺跡であることがわかった。 している。一一号は東西二景、 へ突出した標高一一三~一一八片程の丘陵を削平し、 飾り玉二三個、 環状列石が一〇基と、南側の丘陵平坦部の土堤を巡らせたなかに直列し 音江は深川市街地から南方五*1程のところにあり、 安山岩の山石や川原石が積まれ、 土堤の初源である。 石鏃が一個、 北側は後期中葉の手稲式期の頃と考えられ、 列石の内部に積石をもち、その下に整円形の竪 さらに朱塗りの弓が発見されている。 南北一・五景程で底に石が敷かれ、 地鎮山環状列石などと共通する部分が その周囲に大きな石を環状にめぐら 北側と南側では時期と構 直径七~一〇片前後 稲見山とよばれる北 南側は北 ヒスイ この

環状列石の機能については、 祭祀場説と墓地説に大きく二分される。

四 鷲ノ木遺跡

穴墓域が発見された(写真1-8)。 岸より約一書内陸に位置し、 た標高四〇~七三㍍程の海岸段丘上で、 平成十五 (二〇〇三) 年道南の森町市街地から西方約四書、 桂川支流の上毛無沢川と下毛無沢川に挟まれ 縄文時代後期前葉の環状列石と竪 内浦湾の南

中央の配石は四・〇×二・六景である。 構成される。 して弧状に並んでいた。 環状列石は二重の円環状組石と、その中央に配置された楕円形の配石で 遺構を厚く覆った火山灰の除去した時点で、 外帯は外径三六・九ば、 石の大きさは外・内環で長径四〇 石の一部が露出

> ま地面に 〇〇個、 地面に対し直立、内傾・外傾す が、 られている。 ボ程を測り扁平、 込まれたものであるが、そのま は当時の地面に掘り込んで埋め ち込まれた可能性が高い。多く 合せると全部で六〇二個が用い 辺配石では七一個、 どが見られる。 四六步、 桂川河口付近の海岸から持 に置かれたものもある。 中央配石で七一 中央配石で長径二八 石は安山岩が多い 外・内環では 棒状、 周辺の石を 角礫な 個、 周

期前葉の白坂式土器で、 う遺物は少ないが外環の外側に近接した場所に土器が埋設されていた。 底部は意図的に打ち欠けられてい 後 るものが認められる。列石に伴

墓域」が発見されている。皿状に掘り込まれた内部より七基と四基の土壙 が検出されている。この竪穴墓域は後期の末葉に道央部で発生する周堤墓 先駆的な遺構との可能性が指摘され、 環状列石近くに、長径一一・六片、 短径九・二点の竪穴状遺構、 注目を浴びた。 「竪穴

こうした環状列石は北海道西南部の日本海岸から内陸部にかけてみるこ

後期中葉の土壙墓群 (美々4

東北北半部の影響があったと考えられる。

とができ、

0)

近い平坦部から一定の範囲に数基から二十数基の土壙墓が群集する 新千歳空港建設予定地であった美々4遺跡の標高二三景 程の台地縁辺に 土塘



8 鷲ノ木遺跡(写真 畑宏明提供)

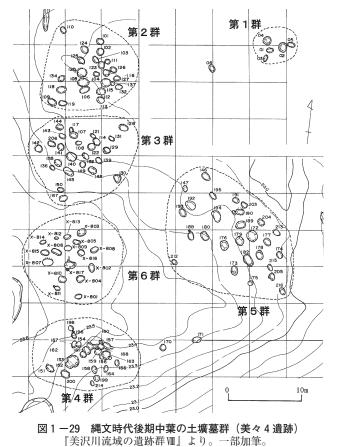
る。 が 込 二〇ボを程である。 9 残 み .形または円形で、 高さをもった環状の高まりが確認されている。 能 第 4 は 性が つており 面から壙底まで七〇 屈葬が多いようである。 4 が ?ある。 5群は中央部が周辺よりやや窪み、 発見されている。 一体合葬墓であった。 「伸展葬」、 また、 定の範囲を区画したものであろう。 底面で直径 第6群では周囲に外径一 〜九○ボ程 「屈葬」 大小六個 3 群 P トメルト などで遺体が埋められている様子が の群 のものが大半である。 短径七〇ボ前後 1 4 が見つかっている 0 墓域 八 4 辞 P 内部との比高差 > 1 0 ×1 を決める作業が行 のもの 墓壙の 2 底には骨 **図** が多 幅 0 平 1 5 群 面 は 形は楕 0) わ 29 掘り P わ n 五. 部 定

墓壙の 長軸上に 個の の礫を配っ した墓 回 基)、 二個を配 した墓 P

1

0) が 0 基 中

遺



8 出 8 9, され 2 • 1 ている。 長軸 9 上 0) 検出されてい 端 と短 柱穴様のピ 軸 上の る ッ 端に礫を配 トを伴うもの した墓 が言 基 \widehat{P} P 1 1 1 7 9 3 が 1 検

6

あり、 大珠、 から土器、 ・央墓壙の壙口を取 群 、その他一七基の墓壙はこれをとり囲むように配置されてい では環状の盛土で囲まれた内部のほぼ 勾 至 石 管玉は九七点にの 鏃、 玉が出土した。 り囲むように礫一 ぼ 玉 ○個が配されてい 一のみが出土した墓は三〇基、 中 央に土 壙 た。 \widehat{P} 副葬品は三三 8 た。また、 $\frac{1}{7}$ ヒスイ が

ぼみとしての墓域の存在がとらえられている。 墓域 3 群 P !跡竪穴墓域にも類似性がみられ は 倒立で押しつぶされたような状態で埋 後期中葉手稲式 4 群 を作るのは深川 1 第 5 1 4 群、 9 の

境口北西部の

覆土上部に

後期中葉の 第6群は 土器の (市音) 頃 江 遺跡 樽前 南 c \widehat{T} (手稲式) a 土器の頃にかけてと思わ 納されてい c にみられる。 こうした一 層除去後、 た。 これらが 手 稲式の 定 森町 の範囲な ほぼ ス残され 0 円 れ 注 う鷲ノ を区 形 \square \hat{o} 上器 木 画

しての 標識 立に大きな影響を与えたと思われ は大きな意味をもつものと考えられる。 この 0) 規制が見られ、 遺構が後出する周堤墓が多く発掘され ためと思われる柱穴様のピットや礫、 それらは周堤墓と共通する要素が多く、 これら土壙墓群の墓域設定や墓 中 た美沢川 -央墓壙、 流 合葬など埋 域 で発見され 周 堤墓 生葬に際 一の成 0

墓の被葬者と葬送儀礼

な思考に基づ あ る特定個人が死んだ場合、 いて葬送儀礼が行わ その個 n 「人が所属してい た集団 がも 0 信仰

る場は、 死者を葬った場所を墓地と呼び、 地 Ĕ 地中、 水中、 空中にわ その いけられ、 占地 0 範 遺体に対する処理 |囲を墓域と 死 0) 者を 仕

によって、風葬、鳥葬、土葬、火葬、洗骨葬、水葬などに区別される。

いた何らかの表微をもつ場合は別に配石墓という。種類によって、土壙墓、甕棺墓、壺棺墓などにわけられ、地上に石をもち種類によって、土壙墓、甕棺墓、壺棺墓などにわけられ、地上に石をもち種文時代は地中に遺体を葬った事例が多い。遺体を納める施設の有無や

務や供養などを指すが、時代、地域によって様々な形が知られている。葬などの遺体の処理、造墓、霊送り・歌舞・共食などをともなう祭礼、服葬儀は再生を願う呼びかけ、悪魔払い、弔慰をあらわす号泣、火葬や埋

よって葬儀の仕方は異なる。かによって異なる。また、同一社会でも身分や階層・年齢・性別・死因にかによって異なる。また、同一社会でも身分や階層・年齢・性別・死因に葬儀の形態は生きている人間が、死後の世界、他界をどのように考える

なく、居住地、またはその隣接下に認められる。が、居住域から分離して墓域を造るのは早い段階の縄文社会では一般的で夢を一定程度継続して形成する傾向は縄文時代の早期から認められる

クル(環状列石)、周堤墓(環状土籬)などがある。溝などで一定の範囲を区画し、その中に墓壙群を造る風習でストーンサー地が盛んに造られるようになる。これは、地表面を平坦にして石、土手、地が盛んに後期中葉以降、個人や家族の範囲を超えた規模の大きい共同墓

の選定などに指導的役割を果たした人物が想定される。墓やその周辺には規模の大きいもの(キウス第2号周堤墓)もあり、造営の際の指揮や墓域周堤墓のなかには、外径七五景、内径三四景、土手の高さが五・四景と

周堤内に埋葬されるものと、周堤外に埋葬されるものがいるがそれがど品、あるいは副葬用に作られたものを副葬、供献する風習が定着している。石棒や漆塗り弓や土器の副葬がみられ、個人の死にともない日用品、装着

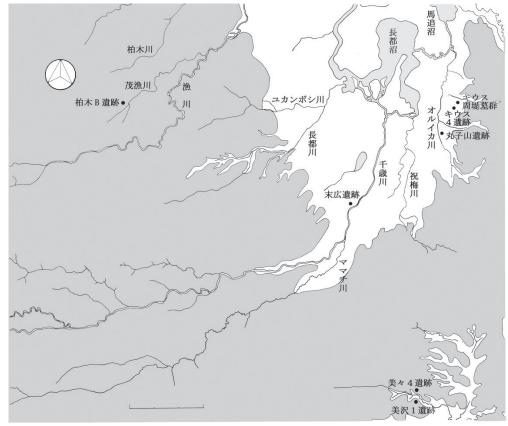


図1-30 石狩低地帯南部における周堤墓の分布

きもある。 間や霊送り・歌舞など特別の職能を果たす人間がいた可能性を指摘するむ のような理由によるか分かっていない。 また、 社会で階層化が進んでいた可能性も否定しがたい。 この時期、 墓の造営を指導する人

内で取り決められた制度を墓制という。 地・形成・ めて難しい 過程のどの段階で、 人の死に際して執り行われる葬送儀礼全体のなかで、 形態やその場所における死者の葬り方などめぐって、 (平林一 九九四) 誰が、 どのようにして行ったかを復元することはき ただいずれの場合も、 死者を葬る場の選 ある集団 連の葬儀

環状土籬 (周堤墓

竪穴内に一~二〇前後の土壙を掘り人体の埋葬を行う集団墓地である(大 環状土籬 (周堤墓)は円形の竪穴を掘り、 それらの土を周囲に盛り上 げ、

造り出 藤一九九二)。 業のもとに造営・維持管理さ 空間を共有する集団の共同作 死者がおもむく虚構の世界を 居を意識して構築された 世界の住み家としての竪穴住 のような墓地の形成は死後の 谷一九八三・写真1-9)。こ れる点に」(木村二〇〇三) 大きな特徴がある したのである。 いわば現世から 「その 加



写真1-9 周堤墓(美々4遺跡X-3、 北海道埋蔵文化財センター提供)

朱円栗沢遺跡

オホーツク海に面する斜里町 朱円栗沢遺跡は知床半島の

> 石斧、 め、 た墓壙からは人骨とともに櫛様の漆器、 と 発掘調査がなされている。 朱円にあり、 径 変化に富んだ土器(図1-28-27~29)、 装飾品など多数の副葬遺品がみられた 一八
>
> だの
>
> A
>
> 号環状
>
> 土籬が
>
> わずか
>
> の
>
> 距離を
>
> おいて
>
> 存在する。
>
> 配 昭和二十三~二十四年にわたり河野広道博士によって三度 円形の土手を巡らす径三二点のB号環状土 ヒスイ玉などの身体装飾品を 土偶、 (河野一九六○)。 土版、 土製鈴、 石

おかれていた。 出された。墓壙の 範囲を区画し、 B号環状土籬は、 上部には河原石が、 中央から配石を伴い東西に長軸をもつ楕円形の墓壙が検 直径三二次、 比高差四五~六七だの環状の土堤 墓穴の途中には一 一本の割石状の が 石 定

三〇ぱ~二・二〇ぱと深い 定される。 たものである。積石の下には円形もしくは楕円形の墓壙がある。深さは A号環状土籬には石組を上部構造にもつ墳墓が二○基以上存在 配石は周辺部に大きな河原石を、その中には小さめの石を配 したと推

以上の合葬がみられる。 石棒と櫛と思われる朱塗りの木製品が出土している。 が出土し、 一号墓では積石の下から、 編布が付着していた。 13号墓には火葬されたと推定される骨片らしきも 長軸 兀 四次、 短軸六五サンの墓壙が 大形の墓壙には三体 あり、

キウス周堤墓群

ており、 れ、 くから知られていた。 第四号が貫かれた。交通の要路に当たっており、 一十五年、 明治二十四(一八九一) 第 アイヌのチャシや満州の土城に類似するものと理解されていた。 第5号の実測図が公表されたが、 畑から石柱が発見され、 大正年間には阿部正巳らによって測量調査が行 年、 申 仁街道の開削でキウス周堤墓群 これを契機に河野広道が第一 往時からチャシコツと呼ば 連結する五基の威容は古 一号の 第 南

○○三)。
○○旨にある第七号の墓壙一基を発掘調査した。斜里町朱円のものと同様

物の蓄積が可能になり、 とが理解された。 料を確保する停滞した社会で、大規模な構築物を造るのは農耕により余剰 ることはなかった。そこには縄文時代は小さな単位で狩猟・採集により食 務していた石川徹によって、第1号と第2号が調査された。 の上に二千数百年前に降灰した樽前で降下火山灰層が堆積しており、 常識が立ちはだかった。 昭和三十九 第2号では配石を伴う墓壙が検出され、縄文時代の共同墓地であるこ (一九六四) しかし、環状土籬が縄文時代の遺構として広く認知され 階層化が進む弥生時代からという当時の考古学会 年、 北海道大学の大場利夫と近くの小学校に勤 遺構のある面 ま

た。とが多くなっていた。樋口はキウス周堤墓群を世に問う機会を伺っていとが多くなっていた。樋口はキウス周堤墓群を世に問う機会を伺っていた。調査に訪れる文化庁の調査官や研究者をキウス周堤墓群に案内するこ市の水源、内別川流域のウサクマイ遺跡群の遺跡の保護に取り組んでい五十二年、千歳市教育委員会で文化財の保護を担当した樋口武亜は千歳

あった。佐原真をしてこのときの実感を、 していなかっただけに、縄文文化のイメージを大幅に塗りかえるもので 立ち寄ったが、キウス周堤墓群を見て一様にその規模の大きさに衝撃を受 立ち寄ったが、キウス周堤墓群を見て一様にその規模の大きさに衝撃を受 立ちいなかっただけに、縄文文化のイメージを大幅に塗りかえるもので はる。このように土木構造物が、縄文時代に残されていたことを予想だに はる。このように土木構造物が、縄文時代に残されていたことを予想だに はる。このように土木構造物が、縄文時代に残されていたことを予想だに は、当時奈良文化財研究所の田中琢、佐原真、文化庁の小林達雄らが

この量は、

仮に一人の人間が一日一立方ばの土を掘り、

積み上げたとし

字通りの「自然民族」だったのである。縄文人もまた然りという評価は、い先土器時代の人びとは、まったく自然環境の支配下に生きていた。彼らは文

ま改めなければならない。(中略)縄文人の土木工事もあなどりがたいもの

である

といわしめた。

し、詳細な実測図の作製に取り掛かった。良文化財研究所埋蔵文化財センター測量学研究室の木全敬三室長らを派遣良文化財研な地形図づくりの協力を要請された田中は、翌五十三年、奈

る。規模が拡大していく様相が伺える。
→5号→2号、11号→4号→1号↑3号の矢印の順に築かれたと推定されさ五・四層、土手の円周は一五〇層になる。周堤の重複の状態から、12号も規模の大きいキウス二号周堤墓は、外径七五層、内径三四層、土手の高、規模の大きいキウス二号周堤墓は、外径七五層、内径三四層、土手の高

〜三三八○平方㍍に及ぶ土量が移動堆積されたと積算された。砂の堆積もあるが、現地形から土量を計算すると構築にあたって二七八○宮腰忠に土量計算を依頼した。一部道路で破壊されていることや後代の土千歳市教育委員会は、当時北海道大学理学部物理学教室に在籍していた

われる。
は石斧で掘り、手もしくは木製品ですくい、籠やもっこなどで運んだと思は石斧で掘り、手もしくは木製品ですくい、籠やもっこなどで運んだと思構築にあたって、基本は掘る・すくう・運ぶの三つであるが、縄文時代

特徴を現す周堤墓に名称が変更された。

一門を基調に形が整っており、当初から正確な割付けがなされている。キの所産を三二〇〇年程の歳月を経て今なお地上にみることのできる稀な中の所産を三二〇〇年程の歳月を経て今なお地上にみることのできる稀な中を基調に形が整っており、当初から正確な割付けがなされている。キて、二五人かがりで実に一二三日の日数を要するものであった。

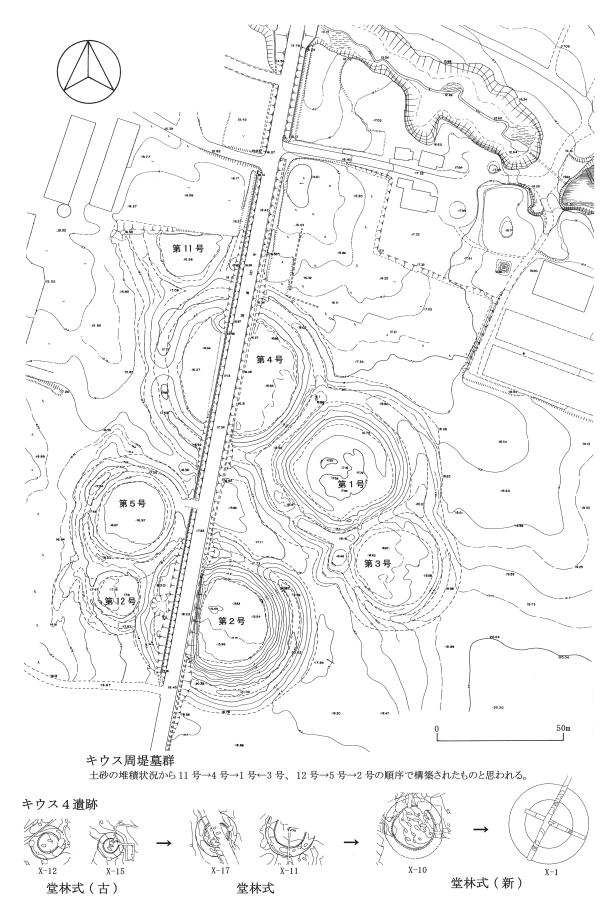


図1-31 キウス周堤墓群とキウス4遺跡の周堤墓の変遷

柏木B遺跡

英明によって行われた恵庭市の柏木B遺跡の調査であった。キウス周堤墓群が広く認知されるきっかけになったのは札幌大学の木村

くなかった。従来「環状土籬」とよばれていた遺構であった。を設けた遺構が検出された。しかも土壙に遺骸をとどめているものも少な直径一三点ほどの円形の竪穴を掘り、その排土を外側に盛り、竪穴に土壙柏木B遺跡は昭和五十二(一九七七)~五十五年にかけての発掘調査で、

○ホンの竪穴に二一基の土壙墓が発見された。 五基の周堤墓が発見された。第一号環状土籬は径一二㍍、深さ三○~四

墓壙から石斧、石棒、玉、櫛、漆塗り製品の副葬品が出土した。

遺物の種類が豊富で、 坑に立てられ土壙墓を巡っていた可能性は高い。この墓壙の周辺に一三基 が出土している。 石などが多数検出され、その下に一四のピットがあり、 墓壙が列状に連なっている。これらの土壙墓は土籬内の墓壙に比べ副葬 た単独埋葬区画墓(第436号土壙墓) 周堤墓からいくぶん離れた個所から小型の竪穴内に円形の墓壙を一基設 た墓壙で、 厚くベンガラが敷かれ、 竪穴内に中央の墓壙に向かって九〇ホッを超す角柱礫、 とりわけ漆塗櫛や玉類の増加が著しい。 有茎石鏃、 が検出されている。二体が合葬 形状不明の漆器片二点 礫が立石として土 周堤墓終焉 板

|後の頃と考えられている(瀬川二〇〇三)。

変化する周堤墓

にも達する。 壙は長楕円形で長さは一・三~二 に前後である。 ある。竪穴の中央から順次埋葬され、 径一三・二景程で竪穴の深さは二景を数える。周堤の高さは○・六五景で が対になっており六基が調査されている。 た遺跡が見られ、 集落・墓址・Tピットなどさまざまな遺構が発見された複合遺跡である。 る。この両岸にひらけた美沢川流域の遺跡群は、 苫小牧市美沢1遺跡は美沢川の流路に沿った地域には住居跡を中心とし 千歳市と苫小牧市の境界を流れる美沢川は美々川の支流の小さな川であ その背後の斜面の鞍部に周堤墓が見つかっている。 一七基の墓壙が検出されている。 JX−3は外径二六・○㍍、 深いものでは 旧石器~アイヌ期に及ぶ 四五片 内

円の墓である。 0) から磨製石斧と原石があり、 図 1 | 中央に黒漆塗りの弓、 Р -120は長さが二・○\\\\ $\underbrace{32}_{\circ}$ **壙底に厚くベンガラが撒かれ、その中から頭蓋骨が、** その上端にヒスイの玉三四個、 弓の下端に並んで両頭の石棒が出土している 幅〇・六五片、 遺体の胸のところ の長 墓壙

これらの被葬者は男性とみられる。中央墓壙はマウンドなどにより他の墓壙と異なる構造を持つものがあれ子山遺跡1号周堤墓からは長さ一・七㍍の漆塗りの長弓、美々4遺跡B丸子山遺跡1号周堤墓からは長さ一・七㍍の漆塗りの長弓、美々4遺跡B丸子山遺跡1号周堤墓からは長さ一・七㍍の漆塗りの長弓、美々4遺跡Bカ子山遺跡1号周堤墓からは長さ一・六㍍の漆塗り長弓が出土している。

状の溝をもち、溝の外周に周堤を巡らした遺構が検出されている(BS-昭和五十五(一九八〇)年の調査では、美々4遺跡で幅三・五㍍程の環

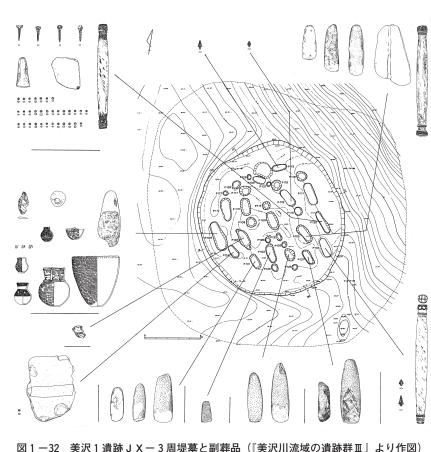


図1-32 美沢1遺跡JX - 3 周堤墓と副葬品(『美沢川流域の遺跡群Ⅲ』より作図)

墓が巡っている。 に一○基の墓壙が検出されている。竪穴以外にも溝に沿って一○基の土壙 3環状溝墓)。 中央の掘り残したところに一基の土壙墓と、さらに同 清内

れている。 さらに幅の狭い溝を巡らし中央に一 (BS-4·5·6環状溝墓) 単独埋葬区画墓は周堤墓と併行するものであるが、 や、 基だけ土壙墓を配する単独埋葬区 区画されない単独の土壙墓が検出さ 造営された 画

は周堤墓の終焉の頃とされる(土肥一九九九)。

埋葬は中央墓壙から開始された可能性が高い

首長の死に求められる る 矢吹俊男はBS-3周堤墓台状部の被葬者を首長的役割の人物としてい (矢吹一九八五)。 中央墓壙の被葬者が首長とすれば周堤墓の造成契機は (乾一九八一)。

に対し、 連ねた玉、 当初 (堂林式) 三ッ谷式の頃から御殿山式の頃の周堤墓の墓からはこれらの他に 朱塗りの櫛、 周堤墓の墓からの副葬品はほぼ石斧、 漆器などの装飾品が伴ってい 石棒に限られるの

周堤墓は、 部道東部にも広がっていった。 後期後葉の堂林式土器の古い段階に石狩低地帯南部で成立

キウス4遺跡

イカベツ川を経てオサットーに注いでいた。 を囲む広い範囲が千歳川の氾濫原で葦などの繁茂する沼沢地であった。 ツトー イカ川がキウス川やチプニー川をあわせてキウス4遺跡近くを北流し、 札幌低地帯の南端、 フナなどの魚類やガン、 (長都沼) や北東にはマオイトー 千歳川の中流域にかつて三・九平方サロにおよぶオサ カモなど野鳥の生息地だった。 (馬追沼) があり、この二つの沼 オサツトーを サ

弧状を呈する盛土遺構が二基、 る。 に構築されている キウス4遺跡は、 両者の継起的な関係が注目される。 (小杉) 縄文時代後期中葉から後葉にかけて営まれた集落であ 1001)° 多数の住居を取り囲みながら向き合うよう 南北に長さ一六〇ぱ、 幅四〇次の

替えられている。 西側に、 建物は掘り込みが浅く円形プランの四本柱の建物が幾重も建て 盛土遺構は厚さが八〇ホッ程で、 土玉、 耳栓、 スタンプ形

シガネ状石製品などが出土している 土製品、 動物意匠の土器、 赤彩の精製土器などと、 垂 一飾、 異形石器、 オ 口

た可能性がある。 イデオロギーの表象遺物が出土する。 コイ科が主体で、 骨ではニホンジカ、 盛土からこの頃から増加する土板、 盛土にはシカ、 サケ科の細かい骨が焼土から多量に検出されている。 サケなどの焼けた骨片を含んで数多くの焼土がある。 イノノシ、ヒグマが検出されている。魚類ではサケ科、 居住域を外部と区画する境界帯でもあった。 土偶、 霊送り、 石棒、供献用土器など宗教的 歌舞など葬送儀礼が行われ 淵

る。 中での短期的な生貯蔵を行うなど、食料を蓄えることがあったようであ た可能性が指摘されている(高橋他一九九八)。 多いことから、 東側と南から二×二㍍ほどの貯蔵用の土坑が三基検出されている。 盛土中から発見されるサケの骨は、 他の場所において頭部と胴部を切り離す処理の行われてい 脱落歯の出土数が少なく、 推骨が 穴の

る。

は、

周堤墓は内径八・六~一二・五景程で、 壙が作られた。 は主に細長い墓壙が作られた。 初源である。周堤内には細長い、 集落が造られ始めた時期では西側の集落周辺に隣接して丸みを帯びた墓 集落から地続きの東側に周堤墓が造られた(X-12・11)。 丸い両方の墓壙が、また、 周堤内の墓壙は一基ないし二基が 周堤墓周辺に

ろまで伸び、 未調査である建物群近くまで伸びているものと思われる 間に八〇~九〇以程、 盛土遺構の 盛土は幅が狭めながらa・b・ 部は、 建物、 人が踏み固めた道跡が伸びている 土壙墓のエリアを越えて周堤墓の集まるとこ c周堤墓方向へ並行する。 ① 1 33 ° そ

墓標のある墓壙が増加する。 える (X – 堂林式期に住居の建築が本格化、 10 竪穴内の遺物が顕在となり、 また、 周堤墓は規模が拡大していく様相が伺 周堤墓内への出入口が整えられている 墓壙平面形が円形化し、

周堤墓外の墓壙

在は顕著でない。また、周堤墓周辺の墓壙群の多くがこの時期のものであ 周堤墓内外の墓壙での差異は墓標、ベンガラ、副葬品の存在の有無である。 見つかっている。周堤墓内と、それ以外に埋葬される人がいたことになる。 南 周堤墓は当初の竪穴が浅く、こうした周堤の低い周堤墓 周堤墓に伴う墓壙の他に、 視覚的にも内外を隔絶する要素は弱く、 周堤墓内・外の墓壙の差異は大きなものでなかった。 南北盛土の開口部、 北側盛土の北、 同時期に造られた周堤墓外の墓壙が南 周堤墓群周辺の四個所に四六基 ベンガラの散布や副葬品の存 X 12 • 13 :側盛 土

ことも、 ンガラの散布などが顕著となり、 埋 方で、北側・南側墓壙群が形成される時期では、 葬地が区別された理由があるのだろう。墓域が周堤墓付近から離れる 両者の格差がより顕著となっていく。 一部には副葬品も見られるようになる。 周堤墓内の墓壙はべ

緊密な関係がここに見られるとされる(水野 者とともにある」。ある意味では生と死の隔たりがなく、 られたとする。ここでは死者は共同体の中心に位置しており、 クル)をともなう広場、あるいは祭儀空間になっており、死者はここに葬 この円周外縁に家屋が立ち並び、内部にはしばしば巨石群(ストーン・サー 水野正好は集落は一般に円形 (或いは馬蹄形) 一九六八・一九六九)。 をしており、 生者と死者との 概念的には 「死者は生

キウス4遺跡は死者が埋葬される空間は居住域と異なる、 「死者の世界」、墓地が出現するのが大きな特徴である。 共同体

周堤墓を生み出した社会

的 なものが知りうるもので、 墓は埋葬者の性別、 集団内における位置、 生前生活していた場所、 観念など主として個人の精神 社会とは不可分の関

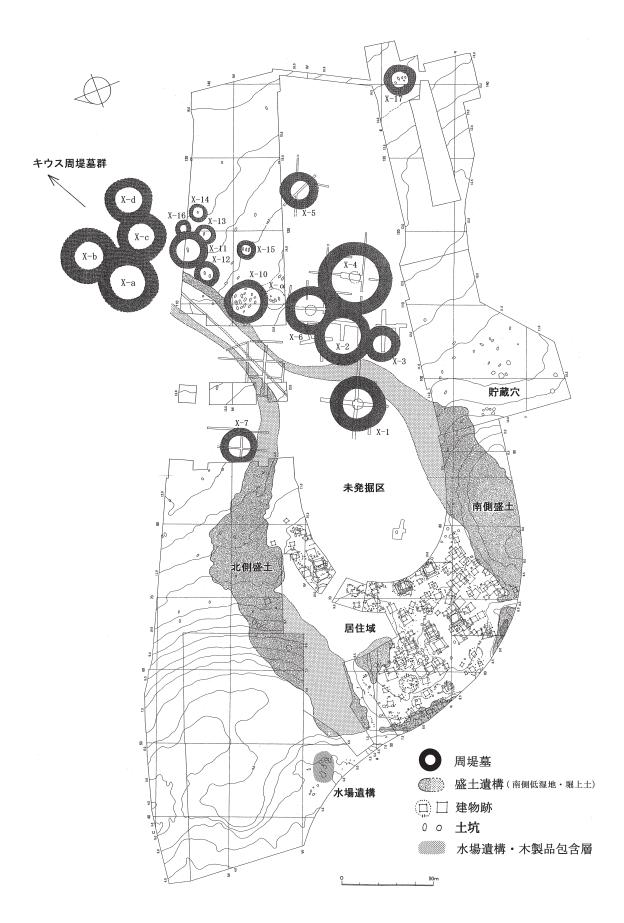


図1-33 後期末葉(3200年前)の村(キウス4遺跡)

それを生み出し支えた社会といった諸条件の反映の結果である。係にある。また、社会的諸活動の基盤となる集落やその居住期間の長さ、

位の段丘上に立地している。 る遺跡の多くはサケ・マスの産卵床に近い大河川の枝川や湿地に面した低き沢川流域の遺跡群、キウス4遺跡、丸子山遺跡など周堤墓が検出され

巻狩的狩猟が行われていた(大泰司一九九七)。 を狩的狩猟が行われていた(大泰司一九九七)。 を方的狩猟が行われていた(大泰司一九九七)。 を方的狩猟が行われていた(大泰司一九九七)。 巻狩的狩猟が行われていた(大泰司一九九七)。 を方の特別が行われていた(大泰司一九九七)。 をおり、シカがそれを避けるかたちで移動する際に、勢子や犬を使い追い込むり」状に杭が打ち込まれたものである。一方はキウス川が障害になっており」状に杭が打ち込まれたものである。一方はキウス川が障害になっており、シカがそれを避けるかたちで移動する際に、勢子や犬を使い追い込むり、シカがそれを避けるかたちで移動する際に、勢子や犬を使い追い込むり、シカがそれを避けるかたちで移動する際に、勢子や犬を使い追い込むり、シカがそれを避けるかたちで移動する際に、勢子や犬を使い追い込むり、シカがそれを避けるかたちで移動する際に、勢子や犬を使い追い込むり、シカがそれを避けるかたちで移動する際に、勢子や犬を使い追い込むり、シカがそれを避けるかたちで移動する際に、勢子や犬を使い追い込むり、シカがそれを避けるかたちで移動する際に、勢子や犬を使い追い込むり、シカがそれを避けるかたちで移動する際に、勢子や犬を使い追い込むり、シカがそれを避けるかたちで移動する際に、勢子や犬を使い追い込むり、シカがそれを避けるかたちで移動する際に、勢子や犬を使い追い込むり、シカがそれを避けるかたちで移動する際に、勢子や犬を使い追い込むり、シカがそれを避けるかたちで移動する際に、勢子や犬を使い追い込むり、シカがそれを避けるかたちで移動する際に、勢子や犬を使い追い込むり、シカがそれを避けるからである。

三軒の住居跡が見られるだけである。て竪穴住居跡、墓、貯蔵穴、焼土が見られるが、��澗式土器の頃になると構数は激減する。キウス7遺跡では後期中葉手稲式にはほぼ全域にわたっ縄文前・中・後期前半に占地してきたキウス川流域は、後期中葉以降遺

食料獲得が従来どおりにいかなくなった結果と考えられる。があるが、遺構の減少は森林や草地に生息していた動物性食料が減少し、ス5・7遺跡が所在するキウス川の水系全体の水位に影響を与えた可能性後半から後期にかけて徐々に冷涼化が進行していた(山田一九九八)、キウれに反し冷温性樹種のミズナラが減少する。緩やかなものであるが、中期れに反し冷温性樹種のミズナラが減少する。緩やかなものであるが、中期この時期、花粉分析ではトドマツなど亜寒帯性樹種が徐々に増加し、そ

のキウス4遺跡に生産拠点を移したものと思われる。サケ漁は一時的に比サケが大量に効率的に獲得できる標高の低い、オルイカ川近くの湿地沿い生態系の変化に伴うシカの減少により、後期中葉以降食料となる資源、

的に行われたのである。(高橋他二〇〇三)。森林資源(陸域資源)から水産資源に転換し、サケ漁の捕獲と消費が集約生業をもち定住が可能になるムラづくりがなされた。資源利用システムがである。やがてサケの捕獲期だけでなく、サケ漁を中心として一年周期の較的容易に捕獲できるもので、生産諸力の発展と剰余の一定の蓄積が可能

を引き、石狩低地帯南部で成立したのである(横山一九九九)。 がの枠を越えて全道の集団を有機的に連関された社会が確立されたと思わ がの枠を越えて全道の集団を有機的に連関された社会が確立されたと思わ がはの枠を越えて全道の集団を有機的に連関された社会が確立されたと思わ を消き、石狩低地帯南部で成立したのである(横山一九九九)。 と思われる(瀬川二〇〇三)。こうした社会を背景にして周堤墓は環状列石の系統 域の枠を越えて全道の集団を有機的に連関された社会が確立されたと思わ を引き、石狩低地帯南部で成立したのである(横山一九九九)。

階層化の萌芽

的空間やにぎわいの萌芽的要素すら窺える。ある。ここには住居群、盛土遺構、墓域、水場遺構などが配置され、都市ある。ここには住居群、盛土遺構、墓址遺構、周堤墓が配置された集落でキウス4遺跡は建物、水場遺構、盛土遺構、周堤墓が配置された集落で

堤墓の墓は限られた地域に整然と配列されている。遺骸を周堤墓に運び、そこに中央墓壙から順に造られ埋葬していった。周一定の区域に埋葬されるようになる。居住域の建物から葬列が参道を通り当初墓域が限定されていなかったが、死者が出ると東に周堤墓が造られ

と副葬品を伴う墓が多くなる。漆製品、石棒などの種類の増、そして二種初源期の周堤墓では副葬品は確認されないが、堂林式土器後半期になる

類以 ぞれ認められ、期待された人々がいたということだろう(松本二〇〇七)。 とを示している。 は人々が来世の存在を信じるようになったことや(佐原一九八七)、 不平等が存在していたようである。 副葬品は、品物の種類や数に違いがあり、 の顕在化は、 上の副葬品を伴う例も増える。こうした副葬品を伴うようになったの 現に生きる人の思い描く死後の世界が明確になってきたこ また、副葬品の存在は様々な分野での能力や役割をそれ そうした違いが認められていた 副葬遺

から注口土器や壺などの土器が検出されるようになる。こうした副葬遺物 出されるが、美沢1遺跡JX-3、柏木B遺跡1号環状土籬では壙口近く 林 有様は、食物や水、 一九七九、 玉など身体装着品や石斧など副葬遺物が壙底の埋葬遺骸周辺から検 瀬川一九八三、木村二〇〇三)。 酒類などの供物行為を示すものであるかもしれない

新たな葬送儀礼が確立されたことを意味する。 る。これは土器文化や交易などを通して広域的な文化や社会が形成され、 周堤墓は埋葬場所とともに墓壙の構築、埋葬法にも一定の規制が見られ

墓壙も当初長く幅の狭いものが多かったが、 らかの意味が介在したのであろう。一方で頭位方向などの規制が弛張し、 を撒くなどの儀礼が行われた。こうした儀礼は死者やあるいは死霊への何 遺骸の周りにはベンガラが認められる。何らかの意味を込めてベンガラ 次第に丸くなっていく。

たと思われる穴があり、こうした場所、印をもって、この時代祖霊祭祀と)関わりとする見解もある (佐々木二〇〇七)。 墓標は墓壙を特定するための 「印」であった。墓壙の前後に標識を埋め

もしくは異なる他界観念をもった人たちであったろうか。 中央墓壙の被葬者の死が周堤墓造営の契機とされる 方で、周堤墓に埋葬されなかった人たちがいる。こうした人は移入者、 (瀬川二〇〇三)。

> 列が作られていたが、このシカの追い込み猟によって、 キウス5遺跡では廃絶した縄文中期の集落の上にシカの追い込み用の柵 家族単位から集団

協業への狩猟システムが確立された。 いったのである。 て共同体的紐帯が再編・強化されて ムに変換された。キウス4遺跡におい 性を重視したサケ漁集約的生業システ しかし、 集落の移動により、 より季節

世帯、 11 • 17 0) い単位の墓所であったと思われる。 一四点ほどのやや規模の大きい周堤 と変化はない。この段階までは、 が 12 \(\) 15 \(\) 数が一~五基程の小規模である 萌芽期の周堤墓は内径六~八㍍、 現 あるいは直系血族などごく小さ ・c)、墓の数が一~五基程墓 わ れるが (X-3・5・7 次いで揺籃期には内径 \widehat{X}

墓壙が 期の柏木B遺跡1号環状土籬の周堤墓 あり、 数が増える周堤墓が現れる(X-1 2 6 墓壙数は二一(竪穴外を含めると四 確立期には内径一六~一九点、 を数える。 被葬者は一八を下らない。 一四基、二体合葬、 10 a b d トレンチ調査だったキ 四体合葬も X 墓壙 10

| | | 3 (3) | <i></i> | | ,,,,, | | - | 2.11 | | | | | |
|----------------|-----------------|----------|----------|------|-------|-----|-----|----------|--|--|--|--|--|
| 表 1 一 2 周堤墓の変遷 | | | | | | | | | | | | | |
| | 周 : | 堤幕 | 時期 | 竪穴 | 墓壙数 | | ζ | 社会組織 | | | | | |
| | 同 - | 도 圣 | 时 朔 | 内径 | 周堤内 | 周堤上 | 周堤外 | 11 云 阳 和 | | | | | |
| 萌芽期 | キウス4遣 | 遺跡 X −12 | 堂林 | 8.6 | 2 | | а | 家族世帯 | | | | | |
| 揺籃期 | " | X - 11 | " | 12.5 | 1 | | α | 直系血族 | | | | | |
| 1亩 監 70 | " | X - 5 | <i>"</i> | 14.0 | | | α | | | | | | |
| 確立期 | " | X - 10 | " | 16.5 | 14 | | α | 傍系を含む親族 | | | | | |
| 7年.77.791 | " | X - 1 | " | 19.0 | 1 | | α | | | | | | |
| | " | X - 4 | " | 27.0 | 9 ? | | α | | | | | | |
| 最盛期 | 美沢 1 遺跡 J X - 3 | | 堂林~三ッ谷 | 13.2 | 17 | | | 複数の親族 | | | | | |
| | 柏木B遺跡第1号 | | 三ッ谷 | 12.6 | 21 | 18 | 5 | | | | | | |
| 退潮期 | キウス周堤墓群第2号 | | 三ッ谷〜御殿山 | 32.0 | | | | 部族 | | | | | |
| 必彻为 | 朱円栗沢遺跡A号 | | 御殿山 | 22.0 | 20 | | | DP/J/C | | | | | |

四景と規模が拡大される (キウス周堤墓群第2・4号)。次第に規模が拡 されている。退潮期では内径が三二~四五景、竪穴の高さが二・六~五・ ウス4遺跡X-大とともに、 副葬遺物、 4では九基が確認され、 葬制などの規制も強化されていく。 その密度から一〇~二〇基が想定

キウス4遺跡に結集した。 集団の移入が促された。サケ漁、 食料資源に恵まれたキウス4遺跡に、 周堤墓の造営や儀礼の際には多くの人が キウス川流域以外の地域から個別

0)

限とが存在する集団の形成がみられる このことからキウス4遺跡では、 次のように一経済的権限と二政治的権

経済的権限

- 漁撈資源の所有権 (獲得、 処理、 保存) - 富の分配と占有
- 交易権の掌握 (ヒスイ、 朱塗製品) - 分配

政治的権限

ムラの管理-集団の利害調整-住居の建設

周堤墓の造営・ 管理 (建設地の設定、

労働力の確保、 墓域の管理

儀礼への関与

などサケ漁の収穫と生産、 交易品の分配、 儀礼などが看取することができる。 周堤墓の造営などの分業化や美術工芸品の発

宗教的側面など社会内部の差異化が顕在化したのであろうか (谷口二〇

〇七)。

るには多い数である。 血縁的紐帯でつながる親族集団であったと推定される。 X-10周堤墓の一八人の埋葬は個別の世帯、 この段階での周堤墓の占守・ 直系血族の墓所に埋葬され 用益の主体は傍系を含

当初、 キウス川流域に住んでいた人々は世帯・直系血族などによる親族

> 数の集団による集落の運営がなされるようになる。 関係によって豊富な漁撈資源のもと集落が営まれたが、 たな住居、 キウス川流域以外などの地域から異なる集団が住み着き集落は拡大し、 ための社会が確立されていったのである。 墓が必要とされた。 そうした協業活動が保障しようとする連帯 新たな集団の移入は新 傍系を含む親族や 複

うになる。 周堤墓はベンガラを塗布した木柱や土堤の高さなど強い視覚性を持つよ 異なる集団による周堤墓の造営が競合し差異化が進む。

亀ヶ岡文化の北漸と墳丘墓

墓が現われる。 の形成過程において後出である。 れる。標識としての石でなく、 GP 1 1 1 9 · 柏木B遺跡1号環状土籬の同じ周堤内で、墓壙の上に広く積み石が見ら 1120・1121)。これらの礫群は環状土籬内墓壙群 墓壙を覆いつくすように積み石が見られる 周堤墓にやや遅れて配石を伴う列状群集

れる。 ヒスイが減少し、変わって大量の漆塗り製品と蛇紋岩や滑石製の玉が現わ 上存在している。 御殿山遺跡でもみられる。 墓壙を石で覆う積石墓は後期末葉から晩期初頭の朱円栗沢遺跡 同様の積石を伴う御殿山遺跡では、 朱円栗沢遺跡では石組をもつ墳墓が二○基以 副葬品として石棒と 新日高

美々4遺跡では人骨の上に支笏火山や恵庭火山灰を盛り上げた墳丘 7

ウンド)で覆う墓が検出されている。

重 M-5の上にM-3・4が造られ、さらにその上部にはM ウンドが存在した。 一ねて造られていた。 マウンドは三つのブロックがある。 第一ブロックにはM-6、 第一ブロックでは径が十畳を超える 第三ブロックにはM -1マウンドが

Μ 3マウンドは長径五ば、 短径三・七片、 中央部の厚さ三八ケン、 頂

石斧、 部より一八~二八秒の深さに頭骨で四体分の人骨が発見されている。 で六八個が発見されている。 まわりにはベンガラが敷かれ、 石鏃が検出された。 他 13 ・晩期初頭の完形の椀形土器、 体の頭骨付近から小玉が連ねられた形 浅鉢土器、 人骨

半におよぶものと思われる 文化とともに北漸し、 れている。 土した。 式にかけての亀ヶ岡式に並行する時期のものとみなされる多量な土器が出 Μ 出 5マウンドの下の小規模なM-2マウンドから大洞B1式から 土遺物の関係からこうした墓制は後期末頃から形成され、 さらに下面で後に重要文化財に指定される動物形土製品が検出さ 森田知忠は大同B式相当の時期のもの 周堤墓と異なる墓制を道央部で展開したのであろ (第三節六参照)。 亀ヶ岡B1式の段階で土器 している (森田 晩期前 $\stackrel{\circ}{B}$ 九 七

0)

漆製品が出

点 えられ、 をかけている。この小砂利・ロームを含む覆土から朱塗り櫛一点、 品が伴う 、程で壙底から朱塗り櫛 周堤墓以降の恵庭市カリンバ3遺跡30号土壙墓は、 端部近くに小さな丸い刻みがある 玉三七点が出土している。 埋め戻した墓の上にベンガラを撒き、さらに小砂利を多く含む土 \widehat{F}_{G} 13 八八、 副葬遺物から七体以上が埋葬された合葬墓と考 石棒はやや扁平なもので、 腕輪 七)、 **図** $\frac{1}{1}$ 玉 34 七 上 画 など多数の副葬 一四六×二〇六 端を細く加 石棒

また、

玉類は

であろう。

緩やかながら一部特定集団の埋葬区域があらかじめ設定されていた可能性 装身具・副 見された。 小砂利が散布されている。その下からブロック状のロー 腕輪など多数の朱塗り製品が副葬された大型の82号土墓壙でも埋 (林一九九八)。これらの墓の被葬者は墓の規模、 墓域の設定は、 葬品を豊富に有する大形墓壙がおよそ発掘区の中 特別の規制はなく随時埋葬が行われた。 副葬品などにお 央に位置 ムや焼土が発 ただ、

> り、 る。 て卓越し あ Ш 併 は 大洞! 工式土器で 行期 る。 腕輪など 出 の東三 B 1 式 土遺物 して 耳 飾

櫛は五 が、 産されていた およぶ。 土 品が盛んに生 L とり 7 三点に ί. 漆製 わけ る

ベンガラ ローム・小砂利 ⑥ 腕輪 ベンガラ ● ● ●

-34 墓壙上をローム・小砂利で覆ったカリンバ3 遺跡30号土壙墓(『カリンバ3遺跡(1)』より作図)

大洞B1 玉なども見られる。 身近で入手できる蛇紋岩・ 1式 B2式併行期に残された遺跡である。 これらは亀ヶ岡文化の特色である。 滑石製が増えるが、 小数だが翡翠製の カリンバ 勾玉、 3遺跡は 平

につけた女性がそうした役割を担うようになった。 儀礼・祭祀など特殊な職能者の存在を想定させる。 ら女性原理に転換していった :副葬された男性が行っていた祭祀を、 朱塗りの櫛や腰飾りを佩用された人間の存在は、 (木村二〇〇三) この時代には華やかな装身具を身 集団の 周堤墓造営期には石棒 ある種の 紐帯が男性原理 階層化 が 進 Z

が

か

周堤墓を構築した時代、 周堤内、 周堤上、 それ以外に埋 一葬されるなど被

られていた労力は個別埋葬の厚葬化に向けられた(瀬川二〇〇三)。 遺跡BS-3や柏木B遺跡第436土壙墓など単独埋葬区画墓があらわ 葬者の埋葬区が区別されているが区別される何らかの理由があった。 れ ス4遺跡では周堤墓の規模が拡大していく。 さらに多くの副葬品をもつ墓が出現し、 共同墓地周堤墓の造営に向け しかし終焉時、 後には美々4

により当時の人々の他所に通ずる世界の考えに大きな変化が生じた。 周堤墓の終末から終焉後にあらわれる積石墓、 ふたつの葬制の出現は亀ヶ岡文化やそうした文化をもたらした人々の北漸 後期末葉、周堤墓は解体し始める。石棒を副葬する墓も次第に減少する。 墳丘墓(マウンド)による

(木村二〇〇三)。 「石棒は組織上の象徴として大きな機能を果たしていた。埋葬様式の変 あるいは環状土籬様式の崩壊にともないその役割を失い衰退した_

鏃

いった。 によって死者の再来を望まず、 墓の後半期には、 れることが多い。 みられるが地上標識として配石は必ずしも多くなく、 周堤墓の墓標は、 こうした標識は墓域の識別のためのものであった。 むしろ墓壙に埋葬し積石、 当初埋葬区を示す印であった。しかし柱状節理の石も 個々の墓に霊を封じ込めるように変化して 火山灰などで盛り上げること 朽ち倒れる木が使わ 周堤

なっていった。それを促したのは亀ヶ岡文化の北漸に伴うものでなかった 死霊への恐怖が他界への考え方を変え、 周堤墓によらない葬制の模索と

環狀列石、 的基盤が整い、 後期後半は土偶、 そこでどのような儀礼が行われたか、 周堤墓などが盛んに造られた時代である。 宗教的儀礼や社会発展が促されたと思われる。 石棒、 供献土器など宗教的イデオロギーの表象遺物や 不明なことも多いが、 何故そうしたものが

副葬品

品の顕在化が物語っている。 としたものである(大塚一九七九)。 周堤墓は、 いわば「埋葬およびその儀礼を集中的に処理することを目 死者への儀礼が複雑化したことは副葬

葬品がみられる墓壙の割合は少ない。堂林式土器の頃の後半になると石 儀礼を通じ祭儀場としての性格が強まったのであろう。 著なあり方は、 儀礼が行われた可能性を示している。 美沢1、柏木B遺跡では壙口近くから注口土器や壷などの土器が検出され 土壙墓からは石斧、石鏃、ヒスイの玉など副葬遺物が伴うものがあるが副 美々4遺跡で検出されたおびただしい焼土群や赤彩の精製土器、 石斧、 ヒスイの玉に加え、 周堤がしだいに単なる埋葬区画にとどまらず、 石棒の副葬がみられる。 キウス周堤墓群に見られる土堤の顕 初現期の周堤墓の 死者の葬送 石棒、

も高くなる。 サメの歯、 三ッ谷式の美沢1遺跡JX-3周堤墓、 漆製品、 供献用の土器などが加わり、 柏木B遺跡第1号環状土籬では 副葬品を伴う墓壙の比率

猟 も目立って石斧が出土する。こうした遺物の出土は当然のように土木、 関わるものが多い。 具 周堤墓を残した土木集団の性格をよく現わしているといえよう。 副葬遺物を機能別にみると日用生活品 (石斧)、装飾品 呪術の盛行を示すものである。 副葬遺物には石斧、弓、 至 貝輪)、 呪術・儀礼 またそれは縄文社会の特徴、 (土器)、 石棒が顕著にみられ、 (石棒) などで、 狩猟具 亨、 日常生活に とり なかで 工

石棒

木B遺跡第1号環状土籬では四三基中六基から石棒が検出されている。 本検出される。 石棒は死者に添えて墓壙に埋めた副葬遺物として一墓壙から一ないし二 美沢1遺跡JX-3周堤墓では 一七基中三基より

石棒そのものの機能によるところが大きかったと思われる。 出されているが(皆川二○○八)、こうした大形の石棒とは性格を異にする ものである。いずれも美しく研磨され、その表現は象徴的で非写実的であ る。造形技術は高度で、製作に要した手間隙は計り知れない。また、限ら れた墓壙より発見されることは製作上の技術的な制約もさることながら、 れた墓壙より発見されることは製作上の技術的な制約もさることながら、 この時期、石棒は長さ三○~八○キャ程の磨製で、石質は粘板岩が多い。

を示すものである。 造や副葬品においてとりたてた特徴はない。このことは彼らが他の成員と すため普通と異なる呪術具を身につけた。 にこうした人間であったと推定される。 欠くことができない。 個人の理解を越えた現象、 こうした呪術を専門とする専業者の出現は、 政治的にもまた経済的にも絶対的な存在ではなかったと推定され 神霊と交わり、 病気、 天災などの多かった縄文時代、 自然現象を占う呪術師は呪術力を増 しかし石棒を除けば彼らの墓の構 石棒が副葬された被葬者はまさ 社会的役割の分化、 贶 が術は

調査し、 状土籬」(4号周堤墓) て成形し、 重さ七一○彎の石棒が検出された。 が施されている。 なしている。両端の頭部には、土器文様にみられると同様な装飾的な彫刻 (石川一九六九)。 昭和四十 (一九六五) 一八五×九〇ボの墓壙の底から長さ五七・五ボ、 さらに磨きをかけて仕上げている 両端には頚部を作りだしている。 素材は硬質の頁石で、 外縁で道路工事の際、墓が発見された。 年、 千歳市中央のキウス周堤墓群の一つ「4号環 **壙底はベンガラに厚く覆われていた** 丹念にこつこつと敲打を繰り返し (大谷 色調は滑沢ある黒色を 九九〇)。 厚さ三・三サン、 石川徹が

有頭のものと、円棒のままの無頭のものがある(大竹一九九四)。断面形は石棒は、長い棒状の磨製石器で、一端あるいは両端が瘤状に成形された

研磨され、

色調は濃い灰色である。

材質は玄武

円形、楕円形である。北海道では、前期前半から見られ、後期後葉には副葬品として墓におさら見られ、後期後葉には副葬品として墓におさめられる。石棒は作り出しに装飾の付くもの(彫刻付)、付かぬもの(蛇頭)、両端に作り出しのあるもの(両頭)、一方だけに付くもの(片頭)がある。

谷二○○九)。

松海道で検出された石棒のうち形態、形状が出海道で検出された石棒のうち形態、形状が

出土が増加する。
出土が増加する。
出土が増加する。
出土が増加する。

四 に削ったのり面から発見したものである 三書、標高一二〇景程の馬追丘陵の尾根で土地 二次加工が施されている。 所有者鈴木昭廣がブルドーザーで作業道造成 り返して成形し、そのうえ頭部には刻線による <u>35</u> 現在まで発見された石棒のうち最大の 石棒の素材は粘板岩、 五チセン、 昭和五十二年六月、 両端に装飾文様のある長さ九三だ、 重さ三二〇〇ムタッを測る。 キウス周堤墓群 貢岩などで、 体部はよく 敲打を繰 この北東 $\widehat{\mathbb{Z}}$ b

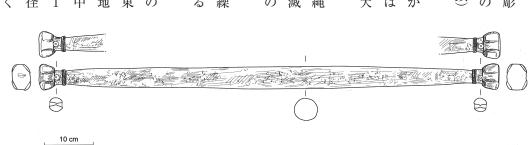


図1-35 千歳市中央出土の石棒

赤彩色土器

いる。 頭部の下には三条の沈線を施し、 両端に瘤状に整形された四角形の頭部があり、 頚部を作り出している。 文様が施されて

墓から出た可能性が大きい。 性がある。体部はほぼ円形である。 頚部に直径 一だ程の小穴が開けられている。 ベンガラが付着していたこともあり、 紐などが通されていた可能

地域から至近の場所であった。 をひいた。なによりキウス周堤墓群やキウス4遺跡など周堤墓が密集する この石棒は大形であること、川など水場から遠く後期後葉の遺跡が発見

いが用途や機能からくるものかは判然としない。 木B遺跡1号環状土籬1008号では片頭の石棒と蛇頭の石棒が出土して 美々4遺跡X-2周堤墓X-207では両頭と片頭の石棒が、 両頭、 片頭、 蛇頭という形態の変化は混在する。 こうした形状の違 また、 柏

損なわれなかったのであろう。 01・3005号、 環状土籬第1112号、 墓に副葬された中には、 美沢1遺跡P-6)。破損しても石棒としての機能は 2号環状土籬第2004号、 破損した状態のものもあった 3号環状土籬第30 (柏木B遺跡1号

線刻と列点を施し特異な形態をしているが、 また、柏木B遺跡2号環状土籬第2004号出土の石棒は体部に二条の 折れた後に新たに刻みがなさ

号、 北見市北川遺跡出土の石棒に、 美沢1遺跡JX-3 同じ文様はなく、 カリンバ3遺跡85号土壙墓、 アイヌ期の祖系を示す祖印 P 1 1 0 頭部の頂部に独特の文様を施したものがあ キウス周堤墓群第4号環状土籬外縁部、 4 柏木 B遺跡 2 号環状土籬第 2 0 0 7 (イトッパ) に似る。

> 現われる 縄文後期は石棒や赤彩土器など日常生活に直接関係のない ハレの道具が

粗製土器と儀礼の時に使う精製土器が作られるようになる。 瘤とを組み合わせた文様が特徴的である。この時期は、 ている。 キウス4遺跡の盛土遺構から注口土器や巻貝形、 器面には 「微隆線」と呼ばれるミミズ腫れ状の細い線と大小の貼 土偶状のもの 日常的に使用する が出 王し

した専門家集団の手によるものであろう。 おき、精緻な製作技術、 赤彩土器は、 (硫化水銀) やベンガラ 精製土器のなかでも特に丁寧に作られ、 入念な施文や仕上げが見られる。 (酸化第二鉄) を塗っている。 器面が磨 おそらくは熟達 装飾性に重きを かれ 水銀

朱

祭祀や儀礼が行われたものと思われる。 窺われる。盛土遺構からはこうした遺物とともに焼土が検出されており ている。 底に赤色顔料が撒かれることが多い。縄文人は赤を強く意識したことが キウス4遺跡の赤彩土器には水銀朱が施されていることが明らかになっ 土器以外にも土製品や木製品に赤く彩色された遺物が見られ、

う。 彩色土器は道南地方を含む地方などとの交易によって得たものであろ

いろいろな道具(土製品・石製品・木製品・漆工技術

湿地 どがある。 た石器が多いが、 この他、 遺跡からは様々な遺物が出土する。 貝塚など以外では残ることは珍しい 木、 しかし、これらは長い年月の間に腐ってしまうことが多く、 植物で作った木製品・繊維製品や骨・角で作った骨角器な これらの道具は何千年経っても腐らず残るためである。 なかでも土で作った土器と石で作 低

(一) 土製品

は住居の炉に土器を据え煮炊きに使われたためである。大型の甕は、食料、れて焦げてしまったと思われる炭がこびり付いているものがあるが、これでまかなってきた。土器の口縁の内側と外側に、調理中に中身が吹きこぼ縄文人は、日常の煮る・炊く・貯蔵・盛るなど生活の広い範囲を土製品

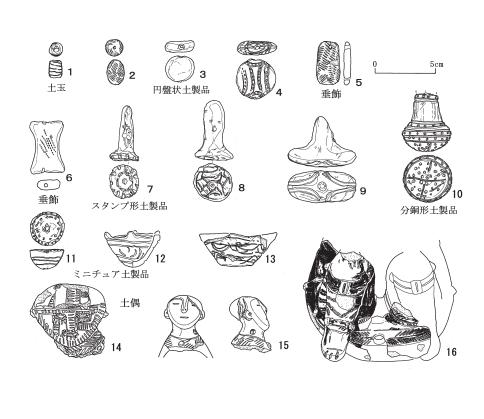


図1-36 キウス4遺跡出土の土製品

ている(図1-36)。 ンプ形土製品、ミニチュア土製品、土偶、動物意匠の土製品などが出土した。こうした日常生活品以外にも土玉、円盤状土製品、垂飾、耳栓、スタ水などの貯蔵に幅広く使用されていた。食料を盛る器類にも利用されてい

れている。 楕円形で、菱形、連弧、渦巻等の沈線文や刺突文が、摘みに穿孔が加えら出土し、摘みのあるスタンプに似た土製品で、印面に相当する部分に円形、出土し、摘みのあるスタンプに似た土製品で、印面に相当する部分に円形、スタンプ形土製品は後期中頃の鯱澗式の頃に道南部から道央部を中心に

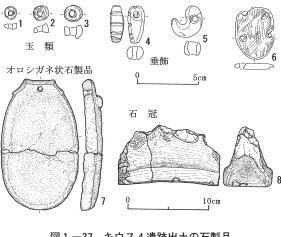
(二) 石製品

たいた。 焼土からは多くの骨が検出され、シカ、ヒグマ、イノシシ、イヌ、タヌ 焼土からは多くの骨が検出され、シカ、ヒグマ、イノシシ、イヌ、タヌ たいた。

る。 角や石で作った釣り針や銛、ヤス、網を張るための石の錘が検出されてい角や石で作った釣り針や銛、ヤス、網を張るための石の錘が検出されていた。類ではサケ科、ウグイ、コイ科などの骨が見つかっている。シカの骨、

開ける現代の錐や裁縫針にも黒曜石や頁岩が利用されていた。 また、動物の皮革を加工して衣服にするため、皮革をなめしたり、穴を

岩などやわらかめの石が使われた。柄には現代と同じように木で作った柄立木の伐採、削ったりくり抜いたりする石の斧には緑泥片岩やカンラン



キウス4遺跡出土の石製品 図1-37

飾品が多量に出ている。

初頭にかけての北海道、

とくに石狩低地帯での出土状況は、

各種形態の装

\equiv 木製品

がセ 材 る 掬さ 具・狩猟具、くさび・ 繊維製品が出土している。 い具などの容器類、 小樽市忍路土場遺跡は北海道で初めて本格的な低湿地遺跡で、 トチの実ネックレス・弦楽器など、また発火具である火鑚石と火鑚板 ットで出土している。 石斧柄・横槌などの加工具、片口舟形浅鉢・脚付皿 柱・梁・桁などの建材、 繊維製品では筌、 木製品は浮子・タモ枠・ヤス・弓などの漁撈 簾だれ 巨大な建造物を示す巨木建 編んぎん 籠・縄などがあ 木製品や

海道では漆工品の出土例が少なく、 漆工品は 漆塗り櫛・ 木胎漆器・ 赤色漆 またウルシの木が自生していないため 染の糸が出土している。 従来北

が付けられていた。 潰すため 皮製容器や赤色顔料を入れた土器などの製作過程で使用する用具や櫛の未 自家製でなく、 交易品と考えられていた。

しかし、

漆液を溜めた土器・樹

に安山岩などで作られたすり 堅果類などを叩き、 **石製品には玉類・垂飾等の装** たたき石が使われてい

物石器、 製品、 飾 図 1 37 。 品 用途不明の黒曜石製の遺 石冠などが出土している 石棒、 オロシガネ状石

や周堤墓の墓の副葬品として出 玉の緑色のヒスイが、 土している。 玉類・垂飾等の装飾品では硬 後期中葉から晩期 環狀列石

製品と伴に出土したことで、この地に住んでいた人々が漆工技術をもち る漆の部分には透かし文様の付くものもある。 色漆弓一などがみられた。 櫛などの装飾品は自家生産していたことが明らかになった。 美々4遺跡では赤色漆櫛 櫛の歯の部分は腐って失われている。残って 黒色漆弓一、木胎器二や丸子山遺跡では赤

六 縄文文化の終末

亀ヶ岡文化と北海道

時期区分で示される となっている。 とBCとの間に一型式存在することに気がつき一九三二年には七型式とし В で、 れ、 につけたのだが、あまりの精巧さから石器時代のものとしても最も新しい として図示されていた。 地名から ものと、 は人食い人種であったと述べたモースが縄文土器という名をこの種の土器 九型式とした。 には大洞B1、 た。その後もBの前、 土器の研究を生涯続けた山内清男は一九三○年に最初の分類として、 亀ヶ岡式土器は、 Е 亀ヶ岡式の文化が一○○○年近く続いたと考えられている。 「弥生式」などと区別されるようになる。 明治二十一年頃には考えられていた。その頃まで津軽地方の出 C 1, 「かめがおか焼」と言われていたが、 В 2 今日では後継者により更に細分され、 全国の晩期の細かい時期を表示する場合、 C 2 江戸時代の一八〇〇年頃には北海道から出土した土器 В С 1, Aの後にそれぞれ一型式を加え、 A、A式という六段階を考えたのだが、 明治十年に大森貝塚を発掘し、 В С 2 C 1, C 2 縄文時代終末の時期が晩期 やがて「亀ヶ岡式」と呼ば A 1, 少なくても十数段階 晩年の一九六四年 日本の石器時代人 この亀ヶ岡式 A 2, 亀ヶ岡式 A 式の

卷 は相対的に人口が少なく、 である。太平洋側では白老町あたりに及んでいる。それ以外のところでは、 ていることが知られており、 出土する。それらが違和感なく、祭器とみなされる壷、 形文が盛んに用いられ、それらに伴って大洞B式などの本州渡来の土器も な日常生活を営むことで、 活力ある社会が形成されていたと考えられるのに対し、 こととなる。 縄線文の多い幣舞式化が顕著である。 在地化する地域とに分かれることとなる。 なものもある。これらの傾向は、 からなる土器群が認められる。文様にも共通するものが多いけれども独自 **歐殿山式** 後半の土器とでは、 北 と称するならば、 海道 日常容器としての深鉢、浅鉢などの亀ヶ岡式と共通の組成を示す器種 各種手工業が行われ、遺物の共通性などから、 の晩期は、 (山内一九六四 a) 亀ヶ岡文化と幣舞文化の大きい差は、 大洞C2式の時期には日本海側では北の礼文島にまで達し その前半、 その雰囲気に違いがあるように思われる。 一時的に礼文島から白老町あたりまでがそれに入る あまり余裕のない社会を形成していたところに おのおのの家族が狩猟、 の時期から晩期にかけてもり上がりのある爪 さらに北にのびていることも考えられる状況 大洞C1式あたりまでの土器と、 晩期中葉となると亀ヶ岡式化する地域と 亀ヶ岡式化した地域を「亀ヶ岡文化 大洞C1式の時期に函館周辺が 亀ヶ岡文化では人口が 漁撈、 各種の規制の強い、 幣舞式系の文化で 注口土器、 採集等の季節的 それ以後 後期末の 台付土

の他の地域が広く幣舞文化に覆われることとなる。し、また、東北地方の文化とは少し違う地域色を保持したものとなり、そが悪化したためか、亀ヶ岡文化の範囲が道南から噴火湾沿岸あたりに縮小このような大洞C2式前葉の状況が、その後半になると一変する。気候

違いがあったように思われるのである

その道南の亀ヶ岡文化の土器は日ノ浜式と称されたが、その前半、大洞

埋調報一 群のようなものと、さらに東北地方からもたらされた本格的な亀 は、 認められるようになる。ママチのものにやや先立つ駒里上層式のものに 式 式の時期には幣舞式、 I 群、 は 道には及ばなかった。本州の亀ヶ岡文化は弥生文化へと転換し、 半と言われていた砂沢式の時期に水田耕作が受け入れられているが、 なるようである。 しても函館附近の津軽海峡沿岸あたりで、ほとんど道内には認められ 的文化に置換されることとなり、 かれる傾向を示す。 では駒里上層式あるいは中期のタンネトウL式、 た亀ヶ岡式は顕著ではない。大洞C2式後半の幣舞式の時期の後、 類の四者が共存する場合がある。 式の類が認められる。千歳市付近では、 層式の一部にかけて、 道央では、幣舞式に相当する大洞C2式の時期は千歳市駒里下層式から上 C2式後半に相当するものを聖山式、 た亀ヶ岡式風の器形と文様を持ちながら、やや厚手作りの在地的な土器が 砂沢式相当の時期から続縄文文化となる 幣舞式の系統のものと、 後半に千歳市ママチ遺跡の土器が相当する。 その間の大洞C2式末葉に相当するものを湯の里六式などと呼ぶ(北 一九八八)。道東では、 更に弥生文化については、 しかしそれらもやがて幣舞式系の氷川式などの北海道 大洞 A、 尾白内Ⅰ群・大洞A式の時期には前半に駒里上層 大洞 C 2 式後半、 在地化した亀ヶ岡式の類と、 A式相当の時期には緑ヶ岡式が存在する。 道東の同時期の緑ヶ岡式では、 後半の大洞A式相当のものを尾白内 駒里下層式の次に尾白内I群と似 本州の北端では大洞A式の後 道南の聖山式から湯の里六 道東では緑ヶ岡式 大洞A式の時期には氷川 道南の尾 在地化し の岡式の へと分 道央部 白内 北

盛土墳墓と動物形土製品

利夫等は北海道中央部の晩期初頭から前葉の土器を、キウス遺跡の層位的千歳市内の晩期初頭の遺跡にはキウス遺跡と美々4遺跡とがある。大場

8

後

期

末

葉 大

洞

B1

古 式

大

洞

B₁

新

式

大 洞

B₂

古

太 大

洞

B₂

新

式

大

洞 BC1 式

大

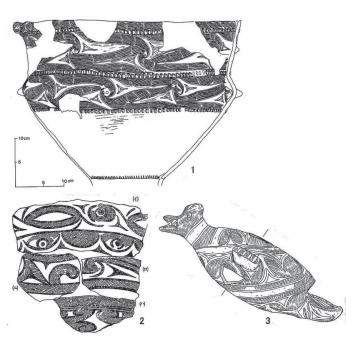
洞

BC2

式

略を述べると、 大洞B式からC の土器を除外して、 から キウスI 資料の 1式あたりのものと考えたのであった。 式 あらためて東三川Ⅰ式として晩期初頭 少ないⅢ式を除きⅠ、 同 II式 同 \blacksquare 式と名付 Ⅱ式はそれに混在 H た (大場 その後の経過の概 利夫 他 0 してい 大洞B式 九六七)。 た後

雨



- 1:美々4遺跡出土『眼鏡状突起』のある土器(『道埋文年報3』 2002):美々4遺跡出土動物形土製品(道教委『美沢川流域の遺跡群
- I 』 1977) 3:三叉文の例(山内清男「続縄文式研究史における茨城県遺跡
- の役割」『茨城県史研究』第4号)

図1-38 晩期初期の資料と三叉文

 $\underbrace{39}_{\circ}$

式

不備

遺跡の土器については、 はキウスⅡ・ 式と同 一式が古新の二段階に佐藤剛によって区分された 滝式相当に位置 九八三)。 あることが知られ撤回され 2式とに相当するの \prod しかしこれは、 式に相当する土器が含まれることになった。 付けたの 林謙作が晩期初頭のものとして美々4式を設け が野村崇であ であるが、 苫小牧市の た 林 古段階にはキウスI式、 0 九九五) 柏 た 原5遺跡 (野村 (佐藤二〇〇八)。 九六九)。 0) 調査結果により 方、 新段 0) 大洞 東 Þ Ш

には大洞B1、 る土器の例として、 1式古段階相当として考えなおされることとなった。 最近晩期初頭の から 同 100七)。 様にBC1 の移行期と古新の三 B2式の各段階のものがあるようで、 小林は大洞B1式をさらに古新の1 研 ・2式やC1式も古新等に区分してい 美々4遺跡の土器 究を進めている小 一段階に区分してい 林 図 1 圭 が晩期に ı 38 る 初 1 (小林二〇〇 一段階、 氏 頭 を取り上げ 0) 0 る。 紹介例を大 眼 同 B 鏡状 美 22式を 次突起 々 図 7 洞 遺 11 0 1 あ

教委 まり 土製品と盛土墳墓とはどの なお、 例 重 九七七、 美々 のない埋葬様式が明らかにされている。 要文化財に指定されている資料が出土して 4遺跡では森田 森田一九七八)。 ような関係にあるの 知忠が大洞B式相当の動 それとも関連して盛土 晚期 だろうか (V 初頭 物形 る 墳墓と称され 図 土 0) 土器群と 製品として紹 1 38 た、 動 3

図1-39

縄文晩期前葉 の注口土器(小林圭一「東北北洋における縄文晩期 前葉の注口土器」より)

大場利夫の研究

形

あ

である とになったのであろうか。 それまでの研究歴が関係していたように て、 大場等がキウス遺物包含地 晚期 が、 どう 初 頭 0) てその様な認識を持 キウス各式を設定したの これには、 の発掘調 査を うこ

思われる。大場は東北の出身で亀ヶ岡式などの土器には若い頃から関心を思われる。大場は東北の出身で亀ヶ岡式などの土器には若い頃から関心を思われる。大場は東北の出身で亀ヶ岡式などの土器には若い頃から関心を深めていったことが考えられる。一九五五年に上ノ国町大澗遺跡の報告書作成のため上ノ国町を訪られる。一九五五年に上ノ国町大澗遺跡の報告書作成のため上ノ国町を訪れた際、町内の旧竹内屋敷遺跡の土器を直ちに解明することが出来ず、とれた際、町内の旧竹内屋敷遺跡の土器を直ちに解明することが出来ず、とれた際、町内の旧竹内屋敷遺跡の土器を直ちに解明することが出来ず、とれた際、町内の旧竹内屋敷遺跡の土器を直ちに解明することが出来ず、とれた際、町内の旧竹内屋敷遺跡の土器を直ちに解明することが出来ず、とれた際、町内の旧竹内屋敷遺跡の土器を直ちに解明することが出来ず、とれた際、町内の旧竹内屋敷遺跡の土器を直ちに解明することが出来ず、とれた際、町内の旧竹内屋敷遺跡の土器を直ちに解明することが出来ず、とれた際、町内の旧竹内屋敷遺跡の土器を直ちに解明することが出来ず、とれた際、町内の旧竹内屋敷遺跡の土器を直ちに解明することが出来ず、と

た編年表に表示されたのであった(芹沢一九五六)。する土器を一九二六年に発掘していて、一九五六年には芹沢長介の編集し室蘭市本輪西のポンナイ貝塚の下層から大洞B式あたりの亀ヶ岡式に相当亀ヶ岡式等晩期の土器についても本格的な研究を行っていたのであるが、東京では、当時日本考古学協会縄文式研究部会長の山内清男は北海道の

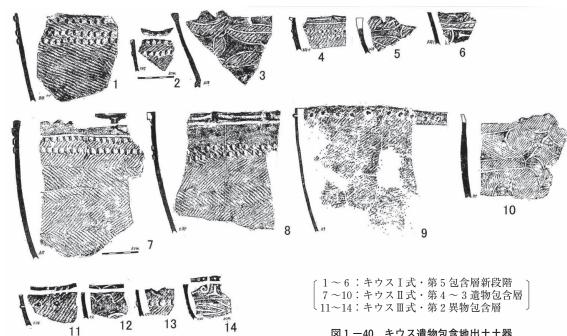
いていた(大場他一九六一)。 かのにはわずかの差があるが、同型式とみて差支えない」ということを聞際山内より「室蘭本輪西遺跡下層より氏が採集した土器は、本式土器と部式前半期に相当する土器であることを知り、上ノ国式と命名したが、その式にはわずかの差があるが、同型式とみて差支えない」ということを聞いていた(大場他一九六一)。

り指摘された(大場・渡辺一九六六)。他方、大場は一九六二年七月に恵庭内屋敷出土のようなものが混土貝層上部から出土することが渡辺兼庸によがあり、一九六四年八月の乙部町三ツ谷貝塚の発掘調査では、爪形文に盛が、その爪形文には旧竹内屋敷出土のものと草間屋敷出土のものとに違いが、その爪形文には旧竹内屋敷出土のものと草間屋敷出土のものとに違いが、

ことを知った。

「この問題については、 者まったく逆の主張をしていたのであった。 岡文化の周辺文化の一つとしてキウス式の文化を考えようとしたものであ 瘤のある土器を伴うことから、 うに思われたのではなかろうか。 によれば大洞B式、 でまたとない良好な遺跡と考えられたのではなかろうか。そこでは 査研究からむしろB式もBC式もさらに二型式に増加すべきであると、 べきであると主張していた 式としてキウスI、 したのであって、芹沢の主張より、 べていた。キウス包含地遺跡は、 B・BC式の二型式は層位的に区分出来ず、 当時、 図 1 40 。 一九六〇年に芹沢長介が岩手県雨滝遺跡の ľ B C 式、 更に層位の良好な遺跡によって考察したい」と述 Ⅲ式を設け、 (芹沢一九六〇)。これに対して山内は長年の調 C1式あたりに相当する土器が層位的 上ノ国式期の道央部の地域色を示す土器型 また上ノ国式には認められなかった、 大場にとって学術上の課題を検討する上 山内の見解が妥当であることを示すよ 関東地方の安行式文化と同様 大場は上ノ国式の報告書で、 型式の雨滝式として把握 調 査から山 内 この大洞 の亀 に出 両

B1式直前のものと見なされるが、第五包含層出土の土器には十腰内Ⅵ群地住居址出土土器に相当する古段階のものは、十腰内Ⅵ群以前、即ち大洞報告がなされた(今井他一九六八)。第五包含層出土のキウスI式の内、平千歳遺跡の報告の翌年、山内が大洞B1式の例とした十腰内Ⅵ群土器の



が共通に存在す

ることから、

キ

ス

ⅠⅡ式を一

示そうとしていい方をするかを

キウス遺物包含地出土土器 図 1 -40 叉文や口 がなされた。 ら ど大洞B式的な 面 丌 |徴を持つ上器 土 は n た。 一器の存在な 遺跡の A突起を付 由 仁町 九六九年 その翌 縁の 報告 の東 \equiv 側

階

0

É

のも認っ

相当する新段

括して雨滝式に 相当する東三川 しようとしたの が野村の考えで あった。大場は

> る。 ВС 文の 前の 近年の 七四年には上ノ E2遺跡 共により ウス第5遺物包含層のキウスⅠ式古段階の土器などとともに、 て、 式の旧竹内屋敷出土の資料はほぼ大洞BC2式に相当するものと考えら 土し報告されている 式古段階に相当する資料を発掘し報告している 討を要する。 化する変化の過程を跡付けるためⅠ、Ⅱ、 層位 あるものはキウス式にはなく、 後期末とみなされるものがあるようだ。 1 『式に相当するものとみなされキウスⅢ式と似たものもある。 小林等の論考によると、 新しい時期の 的な変化を三叉文から、 (恵庭市教委) 野村はこの後木古内町札苅遺跡で上ノ国式の末期の 、国式のより古い時期に相当する資料が松前町高野遺跡で出 峰 100六) 余市町沢町遺跡 Щ 九七四)。 東三 の資料等と共通するものと考えら 無文帯 一川
>
> 工式の
>
> 三叉文などのある
>
> 土器には
> キ 一九七一年報告の柏木川 高野遺跡の土器は大洞B2式と大洞 (宮他 、Ⅲ式を設定していたのであった。 が広がり、 東三川I式の 九八九)、 (野村一九七四)。 沈線文化 恵庭市ユ 内、 遺跡 し、 器面 大洞 また カン 大洞C れ 羊歯状文 0 上 土器と B 式 以 再検 ・ボシ 鋸 国 九 歯

盛土墳墓

が、 され との関係から、 箇 で、 包含地とよく似た遺跡の存在することに気づ ど経ち、 ことから墳墓の類と見なされた。 所 キウス遺物包含地の遺跡は たいる。 それらは墓であり、 同 .時期の盛土をしない土壙墓による単独の埋葬もあるので、 美沢1遺跡で六箇所あり、 美々4遺跡と美沢1遺跡の発掘をした森田知忠らは、 これらの墓には複数の遺体が認め 後期末頃から形成され、 火山灰などを二次的に盛り上げたマウンド 特異な遺跡であ この際に識別されたのは美々4遺跡で七 その後の美々 晩期前葉に及ぶと見なされるのだ 0 i V た。 5 4遺跡の調査で七箇 た。 れた例もあ その報告から一 人骨が発見されたの ŋ キウス遺 晚期 出 〇年 - である 所注意 土 遺 前 物

盛り平たい石を敷いた配石遺構が調査されている。 礫を積み上げただけの墓が知られている。 れる処置であったのかもしれ 頃の多様な埋葬形態の一 例で、 ない。 時に多数の死亡者が出た場合などにとら なお、 松前町高野遺跡では、 八戸市中居遺跡では遺体の上に 小砂利を

で動

Ļ

動物形土製品

ロックの調査が行われた際、 美 々4遺跡の一 九七六年の調査で、 径 一〇㍍超の広大なM Ŧī. つの マウンドが重なっていた第 - 五マウンドの下面

期

0

ではなかろうか。

ウンド 精製土器の類とみなされるもので、 る部分もあった。 相当するもので、 ものと思われる 物 の下には小規模なM 部欠損しているがほぼ全形を知りうるものとなった。 形土製品の主体部が発見され、 それらの報告された土器の例を見ると、 大洞B1式からB2式にかけての亀ヶ岡式に並行する時 図 1 | - 二マウンドがあり、 41 動物形土製品は大洞B1式の亀ヶ岡式 道南か青森県あたりで製作されたも 五景以上離れて一 また多量の土器が出土す 部の破片 ほぼキウス式に こ の M が出 五.

M - 3A M-4 0 00 1 M-6 M-70 図 1 -41美々4遺跡盛土墳墓の遺物(道教委『美沢川流域の遺跡群 I』1977) 0 で、

M-2

(SEC)

M-5下

M-5

様の配置という当時の人々の観点を復原するも と想像され図解されたこともあった。 文様の配置の状態から見て、 形の穴がある。 には上に円形、 を具えた中空の製品で、 二〇〇六)。その体部に施された文様が晩期初頭 突起をくちばしを開けた姿と観るのである 庁美術工芸課の調査官の観るところでは、 この土製品は、 甚だ真実味があるように思われる。 岡式土器の文様であるところから、 たものとの意見が出されていて、 動物形土製品として重要文化財に指定されたも 眼に相当する一対のくぼみがある。 最大厚さ九・ 動物種については各種の想像説がある。 下に三角形の穴、 何らかの哺乳動物の類とも 八だの頭、 全長三一・ 頭部には二個の突起をも 横にして置かれたも 五チセン、 頸、 背面には 胴、 最大幅一六・二 頭部の二個 この観方は文 および上下肢 胴部 通常のその この三叉文 水鳥を (土肥孝 類 個 0) 文化 発さ の円 正 0 面

そのような墓制と関連するものとも解されている。 げた形で口を真横にして飛び立ったところを象っているように見える 的であるので、 れがマウンドの築かれる位置に築造に先立って置かれていたとみなされ、 を配置した文様の付け方は、 38 | 3 | ° より本当らしく思われるがどうだろう。 体部の文様を水平になるようにして観ると頭部を斜めに上 横に水平の帯状の区画を設けて施すの 出 土状 態から、 が一 **図** ح 般

副葬品と装身具

並行のものに近いと見なされる。
らの出土品は、キウス式より新しい、余市町沢町遺跡などの大洞BC2式クにはM-六、第三ブロックにはM-七マウンドが存在した。この上部かウンドが重ねて造られ、その上部にM-七マウンドが存在した。第二ブロッキ々4遺跡の第一ブロックではM-五マウンドの上にM-三、M-四マ

亀ヶ岡式文化の特色を示すものでもある。 基部が長方形に変わるようである。 かもしれない。 には製作地が地元になく、 跡など、漆器の製作が北海道でも盛んになされていたようであるが、 玉と赤い漆塗りの櫛がある。この組み合わせは、後期から継続するもので、 腕飾り、 へ移動していて、 晩期前葉の墓の副葬品には、装身具とみなされるものに首飾り、耳 頭飾りなどが存在する。それらのうち特徴的なものにヒスイの勾 櫛の形態は後期のものに似ているが、 ヒスイの勾玉とともに遠隔地からもたらされているの あるいは青森県八戸市などの亀ヶ岡文化の中心 後期には恵庭市のカリンバ三遺 透しはなく、 やがて 飾り、 晩期

も出土していて、 も半球形の石器が出土している。 図 美 1 々 4 遺跡 41 変朽安山岩が出土し、 の M 晩期前葉の特色を示す葬具とみなされる 2 M 3 同種の遺物は、 Μ 美沢1遺跡のM -6の人骨とともに半球形の方鉛 余市町沢町遺跡の墓から - 1の頭骨の北側から 鉱

晩期中葉と後葉の遺跡

道的な文化を示すが、ママチ遺跡の資料は特徴的であった。は駒里遺跡とママチ遺跡を始めとして、市内では多数存在し、ともに北海学附属植物園の博物館に展示されている。発掘調査されたこの時期の遺跡どこの遺跡か判明すればよいと思うが依然不明である。壺は今も北海道大どこの遺跡か判明すればよいと思うが依然不明である。壺は今も北海道大いの遺跡が大正初期に千歳から巨大な壺が発掘され、札幌の博物館に納め明治末か大正初期に千歳から巨大な壺が発掘され、札幌の博物館に納め

とも称すべき資料が出土していたが、 樽前C火山灰の上部のみ調査され、 灰の年代は一 も得られている。 九八七)で、火山灰下の調査がなされ、 年の三次に亘り調査がなされている。 式相当とされたが、現在では大洞C2式からA式相当と考えられる。 で上層式、 されたのは、 発掘調査が行われて以来、一九八一・一九八二年、 晩期中葉の遺跡の調査は、 下層式と呼ばれた。当時の遺物の時期判定では、ともに大洞 一五○○年前頃と考えられた。ママチ遺跡は一九七○年に最初 樽前

に火山

灰を挟み

その上

下から

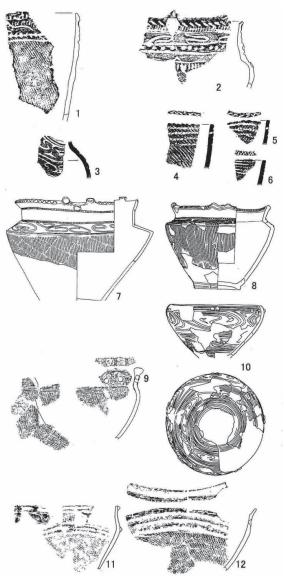
晩期

の遺物

が出土する

状態 駒里遺跡で最初に行われた。ここでまず注 駒里上層式に続く晩期後葉のママチ式 最初の調査 その後の調査 駒里遺跡と同様な晩期中葉の資料 (石川他一九七一)では、 (北埋調報 一九八五・一九八六

だねられている。 マチ遺跡に認められるが、 出土した 式は古新の二段階、 古内町札苅遺跡で注意され、その後寿都町朱太川右岸六遺跡の調査で多く 晩期中葉の時期は大洞C1式とC2式とに相当する時期であるが、 上ノ国式末葉の大洞C1式古段階に相当する資料は三ツ谷貝塚と木 (内山一九八五)。この種の土器は千歳市内では、 道南から道央部の状況は、 C2式は古前中後末の五段階に区分する 甚だ量が少ない。 上ノ国式末葉のC1式古段階 実態の解明は今後の調査にゆ 美々四次 図 1 1 遺跡やマ С



 $1\cdot 2$:大洞 C 1 式古段階相当、 $3\sim 6$:大洞 C 1 式新段階相当、 $7\cdot 8$:大洞 C 2 式古段階相当、 $9\cdot 10$:大洞 C 2 式前段階相当、 $11\cdot 12$:大洞 C 2 式中段階相当

(出典) 1・2: 道埋文『ママチ遺跡』北埋調報9 1982 3~6:「東三川遺跡」『北海道由仁町の先史遺跡』1969

では大洞

€2式古~

中

段階

頃

に伴う

跡で \$ 0

も出土していて、

美々3遺

文の

あ 浜

る土

一器が出

土してい

同

は

美々 3遺跡や苫

小牧市 る。

0

0)

中 市

シビシウス

4

遺跡

では

古段

大曲式の資料とともに縄

7~12:石狩市『シビシウス第4遺跡『シビシウスⅡ』1979 図1-42 晩期中葉の土器

と見なされる縄線文を主体とする土

器に美

々3式の名称が与えら

れて

期がこの く作られてい 壺形土器 甚だ少ないようである。 式に相当する駒里上層式古段階のもの 階 る 0) /々5遺跡では、 で、 末段階と知られるのである。 マ から末段階に (野村 マチ て、 安平 声 九六七) -町豊栄 千歳の例と共にこの 遺 跡 0) 火山 か ただし、 樽前 は口縁の け 遺跡 ての 灰 C 火 八の直上 幣舞式に (佐藤 野村崇が紹介した馬追丘陵出土 Щ 内面に蓋受けのような張り出 灰下の駒里下層式は、 の竪穴住居跡などから末段階 最末期頃の特徴を示しているように が出土していて、 火山灰直上の土器が大洞C2式最末 一九八〇) 相当すると見 の資料も なされる 樽前C火山 知られ 主に大洞C2式 0) 7 が 0 図 いる 灰 大き ハの時 個 幣 1 が

県宇鉄遺跡の 大洞 A 式 の 時 調 期 0 查報 遺跡は 告 (児玉他 近 年新潟県青田遺跡 1100四) 等により (新潟県教委) 詳 細 検討され 100四 7

それらの

間に大まかな並行関係は成り立つようであるが、

で五段階ほどの区分を発表している

(鈴木

九

思

わ

れ

細部

0) 九

検討は残

0)

観点を受け継い

九

九

九九三)、

た東北南部の

資料につ

e V

, て鈴木.

加津

子

が

馬

目

順

五段階を設け(高

が、 遺

その後

青森県、岩手県の資料について高橋龍三郎が詳細に検討し

札苅Ⅱ群から湯の里六式まで五段階ほどの区分をしていた

められ、

東

川遺跡のⅡ式、

Ⅲ式の

部もこの類に相当する

大洞C2式

0)

北

海道の編年につい

ては

九

八八八年

. (7)

新道

4

跡

0)

報

告

期

0

b

及び太平洋側では白老町に及んでいる。

・牧では縄線文の土器が多くなり、

マ

美々3遺跡にも

同

.様に認

相当の次に函館市日吉町

丁目

遺跡や札苅Ⅰ群などの亀ヶ

岡式その

0

里、

る。

る

遺構 式的

が調査されてい

る。

次第に幣

な文様の特色を示すものとな

はこの

時期の

)竪穴住日

居跡とみら

n

理調報一九九二)。

美

人々3遺

期となる。

この

種

0) Ć

1式新段階

0)

土器は

では泊

村

石

狩市 も の

0)

後段

道南 チ遺跡、

ごが亀ヶ 日本海側

岡式化した時期

に、

苫

 $\underbrace{43}_{\circ}$

美



晩期中葉~後葉の土器 図1-43

では、

大洞A2式相当の土器は分離され

ずにA式かA

含

I め ら

れ

る傾

向

があ

0

たが今後 式の

仮の検討

課題

であ

大洞

Ä

2式あたり

0

ものと考えら

れる。

これ

まで道内

る。

なお大洞A式相当の

氷川

類と見なされ

る市

マ

、遺跡の調査

マ

マ チ

チ

遺跡は三次までの

、調査結果によると、

樽前

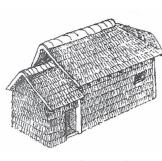
C

土器にはポンオサ

ツ遺跡の資料がある

うに思っ に行 耕をす な事例となる。 ら従来と異なる北海道的な文化が定着しつつあっ 111 開 山 灰 わ ع 下 Ŀ 灰 れていたと考えられている。 み 層 る人々が渡来し、 わ 0) 0) れる。 焼土からサ なされる土坑の から三〇ヵ所程の墓壙が発見されてい 上 下に晩 州 期 ではこの頃に朝鮮半島から ケの骨が多数発見されていて、 の包含層があ 存在から 定着しつつあったのと対 季節的 ŋ この時期 焼 光と土は な作業が盛 があたり が稲作農 る。 坑が多 たよ 照 的 貯 か N 火

が変化したことが想像される。 や器形を示す ママチ遺跡ではやがてこの る。 群 る 0 :古段階に相当するこの時期 新潟 小ピ 図 土器などがやや多くなる傾向がみられる。 続けられたようであるが、 火山灰上にも同 1 県 ツ } $\underbrace{44}_{\circ}$ 0) 青田遺跡では柱穴の配置から が多くみら 千歳市内で平地住居跡として報告され なお、 画に墓地が営まれ、 .様の焼土と土坑 れ 第 住 の竪穴住居跡 一次調査の 居跡 大洞A式 が あ が あ Ď, た可 掘立柱による 集落や作業場 が多く発見され 0) \bigcirc 傾に亀 (能 美沢2遺跡 同 四ライン .様な生 性 が ケ 岡系 強



穴に遺体 遺体は

:を埋

0

種

0)

遺構

磨器等の特殊なもの 本州西部に 示するかのような、 な組み合わ 弥 せを形成 生前期 が認め、 図1-44 晩期(大洞A新)の掘立 柱住居復元図 (宮本長二郎「第Ⅲまとめ」『日本海 してい 北海道的文化を主体的に形成し始めたの 5 の文化が広まり 沿岸東北自動車道関係発掘調査報告 机 書V青田遺跡』新潟県教育委員会 2004より) る。 これがママチ式ともいうべき幣舞式 葬した土壙墓があり、 例 解明が 大洞 A 0) イ 遺 墓 b 形 多量 地には うあり、 フ、 態で従来と変化はないが、 始め、 石鏃、 1式新段階 0 副えられた器物には 望まれる シ黒曜 た時期である。 楕円形の 今後ともこ

棒状

原

石

薄片な

石製

そ

石製品に

加

え、

矢

から

A 2 式の

期

豊富な

丘

式

七 アンの墓にも認められることから、 重要文化財 文化の土面等が類型的な顔立ちをしているのとは明らかに異なっており、 ような人々であったのだろうか。 、趨勢とは異なる北海道的な文化の る諸民族 **損したのではないかと考えている。** マ キウスムラとキウス川流域の暮ら 仮 チ 面 墓標に付けられてい 遺 「が発見された の文化との 跡 に指定されている。 の第一 三次調査で、 関連を示唆している。 $\widehat{\Box}$ 絵) た可能性があり、 報告者は、 A P この 極めてリアルなもので、 方向を 極北地域を含む、 仮 また矢柄研磨器がアメリ 面にまつわる人々 ○号と名付けられ 鮮明に示す エ 当時 スキモーの それが落 0 本州 北方にひろく認めら 例となるであろう。 下した 仮 弥 面 そ は が生文化 た墓 0 0 13 際に周辺が 0 カイン 用法を参考 頃 一の脇 0) た 亀 e V ディ どの 向 か 岡 ら

ウス川は、 追丘 一陵 南部 に位置する標高約 | | | | | 0 コ 4 力 ラ峠 0 麓

> 七万平 する ウ 横 み たのち北 を源とし、 (V え川 断 られる自然環境であり、 が水量は豊富である。 湿地帯へと注いでいた。 自 動 右岸のキウス4・ 車道 流して、 丘 |や国道337号の高規格道路建設 陵裾部を西に流 かつて広がってい 周囲には落葉広葉樹林が広が 5遺跡と わ 流域には数多くの遺跡が残されて れてい 長さ二 下 L 左岸のキウ |〜||==|の たオサツトー オ ル イカ **Ź** 7 小川 Ш などに伴 (現十五号排 で、 9 マ 遺跡 ŋ Ш オイトー 幅 多 は 0 これ いる。 種の あまり 水 -をは 実に計約 に合流 までにキ 動 広くな じめと 北 植 海道 物 が

用されたことがうかがえる。 していたようである。 東方面との関係が深い 中葉 、土器が出土している。 一上で定住生活が始まり、 キウス川流域に縄文時代の人々が活動 (七五〇〇年以上前) 石刃鏃が九○点以上と、 方約一 該期 竪穴住居を建て替えながら数世 である。 の住 三〇〇㍍離れた左岸のキウス9 一居跡は確認できず キウス 5遺跡東 した跡が見ら 周辺に早期 部 n 狩猟場などとして 始め 中 代にわたり暮 Α ・葉の 地区 るの 遺跡では、 アル は では段 縄文早 道 1]

このころなのであろう。

系

0 研

特徴的

時期には、

曜

石を誇

高四 長 が 向 半まで続き、 0) 早期後半には、 は 化が進み、 小型の きの キウス 密集しているが、 軸 縄文早期後半から前期前半 Ŧ. 急斜面にも竪穴住居 ○ がほど が程のキウス7遺跡

のおりまります。

のおります。

のおりまする。

のおりまする。

のおりまする。

のおりまする。

のおりまする。

のおりまする。

のおりまする。

のまずる。

のまずる。< 方形、 4遺跡低地部にも集落が展開した。 食料となる動物 キウス 9遺跡 あるいは円形 キウス5遺跡東部の集落は一 0) 隅 **党**丸長方形 住居以 外 に進出 が造られた。 ・キウス5遺跡中 ルが多い は の大型住 の用途を指 植物も豊富となり、 Ļ V が、 わ 居が 下流のキウス9 ゆ キウス 特に急斜 る 摘する声 一手に分か 軒 央部 キウス4遺跡の 「縄文海進」 みら 4遺跡には 流域 もある。 面 \widehat{B} 品には四 れ れたほ 遺跡 る。 地 の集落が増 区 0 低 掘 0 や 頃 地側 軒以 集落は ·標高 か、 で気気 りこみが深く 0))低平 ころの では 対岸 上 加 候 前期 0) 地 0) いけケ 住居 一竪穴 や南 前 0 温 前

のの

されている。

縄文後期になると、ややまとまった範囲に集落が形成される。

。後期前

n

くの実用的 かがえる。このころの墓には、 漁などが盛んに行われていたことが、 な石器類が副葬されたりするキウス5遺跡の例がある。 赤色顔料が撒かれたり、 焼土から出土した多量の骨片からう 石鏃や石斧など多

 $\overline{\mathbb{X}}$ ていたことが推定されている。 かって続いており、 行するものがみられる。 集落が継続的に営まれた様子がうかがえる。 半にはキウス5遺跡中央部やキウス4遺跡、 戻り始めたようで、 して営まれている。 に泥炭や土砂が堆積したようで、 、ス5遺跡西部および南部では多数の住居跡が重複して見つかっており、 集落の規模は縮小した。 た柵列の 前期後半になると、 に 再びキウス川全域にわたり活動の跡が見られるようになった。 軒検出されているに過ぎない。 痕跡が複数発見されている。これらはキウス川河畔付近に向 竪穴住居のほかに、 水を得るために近づいてきたシカを追い込んで捕獲し キウス5遺跡の東部と西部に小規模な集落がやや散在 キウス川流域ではこれまで陸域だった低地部に急速 またこの時期に廃絶された住居にまたがって築か この時期の住居跡は、 人々は適地を求めてこの地を離れ、 平地住居が出現している。 しかし中期前半には流域に人々が キウス7遺跡にも集落が分布 特徴的な焼土として、二列併 キウス 5遺跡西部 中期後 特にキ (C地 流

それぞれの領域内で移動を繰り返し、 の覆土に大規模な焼土が残された「竪穴様遺構」、土坑などがある。 キウス川上流のキウス7遺跡では、 時期に築かれた可能性もあり、 その間約一*」の流域にはキウス9遺跡にわずかに土坑や焼土が見られ 住居や遺物の多出 下流のキウス4遺跡では、 がみられない。 狩猟・採集の場であったと考えられ 竪穴住居や大型の貯蔵穴などが多数残 集落を維持し続けたと考えられる。 土器囲い炉をもつ竪穴住居廃絶後 前述のシカ捕獲用の柵列がこ

縄文早期~前期の集落 早期後葉~前期前半 キウス5遺跡D 才 キウス4遺跡 キウス5遺跡C ル 前期前半 キウス5遺跡 ウス5遺跡B カ ゥ ス 111 前期前半 早期中葉 キウス5遺跡A 期後菜 (早期中菜) Ш キウス9遺跡 ____ キウス7遺跡 早期後葉

図1-45 キウス川流域の集落の変遷(早期~前期)

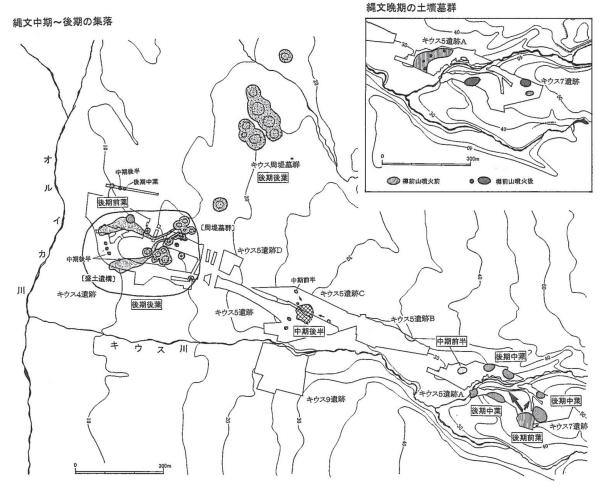


図1-46 キウス川流域の集落の変遷(中期~晩期)

小する。

模は縮小する。

上流側の集落も

では壺が副葬された土壙墓のある墓が見られる程度で、

東端部付近から対岸のキウス7遺跡全域には、

貯蔵穴、

土壙墓など多数の遺構がある。

方、

キウス4遺跡

集落の規

竪穴住居

や平

地

キウス 5遺跡

このような様相は後期中葉の手稲式期まで続く。

しなくなり)、 ながり、 型の建物群が並んでいたとみられる。盛土遺構は南北の帯状につ その周縁に盛土遺構が形成されている。 岸のキウス7遺跡では多数の土壙や焼土が集中してみられ、 とんど見られない るようである。そしてついにこの規模を維持できなくなり 約三〇〇㍍北西に巨大な周堤墓群が造られ、 場など計画的な空間の利用が行われたことがうかがえる。 規模を大きくして、 周堤墓群が出現する。 低地側から集落の形成が始まり、 上流側には生活の跡がみられなくなる。 流域では、 於前後の台地縁辺部にあたる、 晩期初葉から中葉にかけてはキウス川流域全域で活動 後期後葉になると、 このように、 盛土上では多くの焼土が形成されている。 キウス9遺跡にわずかに遺構 周堤墓の造成は急速に衰えた。 が、 居住域・墓域が明瞭に分化し、 次第に祭祀の場としての機能を整えてい 以後集落の密度は増加し、 キウス4遺跡の集落が繁栄した。 晩期末葉になると、 湧水を利用した水場の遺構がある 台地上を削平し居住域を設け、 そして遺跡東部に小型 キウス 5遺跡東部と対 遺物があるが、さらに 集落の主体も移 このほかキウス 作業場や祭祀 ある時期には大 周堤墓はその の跡 その (維 墓 が 動 ÍП ほ 持

として利用されたと考えられる。

小型の墓が多く、

環状や弧状

たと考えられる。 たと考えられる。 たと考えられる。 たと考えられる。 たと考えられる。 たと考えられる。 たと考えられる。 たと考えられる。 たと考えられる。 たと考えられる。

人々の生活の跡が縄文時代を通じて断続的に残されていた。き生業の場として河川や林などを利用するなど、環境に適応して暮らしたこのように、キウス川流域では自然や社会の変化に応じて集落や墓を築

↑.美沢川ムラの移り変わり

船着場や建物跡など数多くの遺構が発見された。 めとする集落、 域一・五㌔の範囲に縄文時代早期~晩期の約三○○軒の竪穴住居跡をはじ である。支笏火砕流堆積物層を基盤とする台地を深く開削しているため、 台地との高低差がやや大きく、 美沢川は、太平洋に注ぐ美々川の支流で、 年から平成八(一九九六) 縄文中期~晩期の墓群、 年に行われた大規模な発掘調査により、 河岸段丘崖が目立つ。 貝塚、 全長三世にも満たない小河川 Tピット、 昭和五十一(一九七 アイヌ文化期の 流

とまって築かれた。 南岸の美沢2遺跡で、河岸の緩斜面上に大小さまざまな竪穴住居が数軒ま南岸の美沢1遺跡で、河岸の緩斜面上に大小さまざまな竪穴住居が数軒ま

美々川の奥深くまで海水が流入し、汽水域が広がり多種の海産資源を得ら早期末から前期前半にかけてのいわゆる「縄文海進」のころになると、

である。 である。 である。 である。 である。

え、 ある 考えたり、「集会所」としての利用が想定されたりしている。このほか美 沢川流域からやや離れた台地上に、 まった集落がみられる。この時期に見られる大型住居は、 れ、 地上の美々5遺跡で土壙墓群があるという程度である。 様に活動の範囲を狭めたようで、 たび活動の領域が広がり始める。北岸の台地上に大型住居が単独でみら 前期後半から中期前半には気候が寒冷化に向 中には一六ばを超える美沢1遺跡の例があり、 南岸の美沢1・2遺跡の低平地では大型住居を中心とし十数軒のまと (美沢11遺跡他)。 流域の南岸に竪穴住居跡が数件、 中規模の竪穴住居で構成される集落が かい始め、 複数家族が居住したと 中期半ばにはふた 長径が八㍍を超 キウス川 流域同

ある。ヒスイなどの副葬品が比較的豊富である。そして後期後葉、キウス期中葉に円形や楕円形の墓が数基から二十数基まとまった「土壙墓群」がして集落が営まれた。この時期に多様な形態の集団墓が展開する。まず後して集落が営まれた。この時期に多様な形態の集団墓が展開する。まず後中中期後半から晩期中葉にかけては、やや上流北岸の美々3・4遺跡を中

い。集団墓とはやや距離を置き、それぞれの領域を分離させていた。 集団墓とはやや距離を置き、それぞれの領域を分離させていた。 ない、集団墓」、「墳墓」が出現した。住居跡は後期中葉ではやや掘り込みがやや浅土墓」、「墳墓」が出現した。住居跡は後期中葉ではやや掘り込みがやや浅土墓」、「墳墓」が出現した。住居跡は後期中葉ではやや掘り込みがやや浅土墓」、「墳墓」が出現した。住居跡は後期中葉ではやや掘り込みがやや浅土墓」、「墳墓」が出現した。住居跡は後期中葉ではやや掘り込みがやや浅土墓」、「墳墓」が出現した。 住居跡は後期中葉ではやや掘り込みがやや浅土墓」、「墳墓」が出現した。 外径一三~二五片とやや大型で、にやや遅れて「周堤墓群」が築かれた。外径一三~二五片とやや大型で、

が多数残されており、 線状に樽前 穴は配列に規則性がみられない。 土壙墓群がみられる。美々3遺跡の住居は、 た。 浅い掘り込みの大型竪穴住居である。 晩期中葉から後葉では、 また美沢川流域から少し離れた台地上の美沢11遺跡では、 発掘調査の際に深さ三~四ザのわずかなくぼみとして点状もしくは 最大幅約四〇セン、 山の火山灰が残っていたため確認することが出来たものであ 間隔や形からキツネと判断できるものがある。 長さ約一四五景にわたり河川に併行して残されて 中流域の美々4遺跡から美々3遺跡にかけて、 住居跡は少ないが、 中央からやや外れて炉をもち、 長楕円形を呈する長軸約九點 人々の往来を示す道 動物の足跡 柱

いる。径は約五㍍で、ほぼ円形を呈するものが多い。
は五○≒もの火山灰や軽石・礫に覆われ、土地の様相が一変した。それでは五○≒もの火山灰や軽石・礫に覆われ、土地の様相が一変した。それでし、三○軒あまりの住居跡を残した。住居跡は斜面に構築されているため、し、三○軒あまりの住居跡を残した。住居跡は斜面に構築されているため、し、三○軒あまりの住居跡を残した。住居跡は斜面に構築されているため、し、三○軒あまりの住居跡を残した。住居跡は斜面に構築されているため、

場所に戻ることは少なかったようである。河川の流量や動植物相の変化とど、時期によって生活の場所を選んで変化させてきたが、以前に使用した「このように美沢川流域では、低平地や川の屈曲部に臨む斜面、段丘上な

流域に生活し続けてきた(図1-18)。いった周辺の自然環境に適応しながら、縄文時代を通じて人々は繰り返

九。動物意匠のある土器

道内では動物意匠のついた土器が縄文時代で二〇点ほど出土しており、、土器の突起や把手など一部に表現したものが少数みられる。発掘調査で出土した遺物の中には動物の形を線刻画として土器に描いた

道内では動物意匠のついた土器が縄文時代で二○点ほど出土しており、道内では動物意匠のついた土器が縄文時代で二○点ほど出土しており、道内では動物意匠のついた土器が縄文時代で二○点ほど出土しており、道内では動物意匠のついた土器が縄文時代で二○点ほど出土しており、

ものがある 描かれたものがあり、口と舌の表現からヘビと解釈されている。しかし「舌」 ある 姿であると考えている。さらに同遺跡からはクマであろうかと考えられ が土器の擦痕であると観察した長沼孝は、 0) を盛り上げたうえ棒状工具を用いてくちばしを形造っている。また同遺跡 ていることがわかった。粘土紐をめがね状に貼り付けて目を表現し、 およぶ縄文時代後期末の大型深鉢の口縁部の貼付文として動物が表現され 包含層から出土した破片が接合したもので、 小型壺形土器 千歳市内では美々4遺跡でフクロウの顔を表現したと考えられるもの (図1-47-4)。台地上の周堤墓覆土から出土した破片と台地下の 図 1 -47 図 1 47 3 $\begin{matrix} 1 \\ \vdots \\ 2 \\ \end{matrix} \bigcirc_{\circ}$ には、 胴部に沈線で四体の動物の頭部が 誕生まもない鳥の雛が餌を待つ 復元した結果、 口径四七サンに 中央

土している。クマを模した土製品は道内各地の続縄文・オホーツク文化の壺形や香炉形など特殊な器形の土器の頂部にクマを表現したものが複数出そのほかキウス4遺跡では縄文後期後葉の深鉢形土器の把手、あるいは

ヒスイ

出土のヒスイ製品の蛍光X線分析での産地同定では、新潟県糸魚川市青海

と考えられる。 がるものと思われる。その萌芽的な遺物が縄文時代にみられる。 を象徴とする観念、信仰に基づく祭祀、儀礼など特殊な用途に用いられた 遺跡で数多く出土しており、 イ製品が挙げられる。ヒスイ(ヒスイ輝石岩)は硬玉の代表である。 〇. 交 本州方面を含めた広域的な交易によりもたらされた遺物の代表に、 動物意匠のある土器は一般的な容器も多いが、これらのさまざまな動物 易 クマを神聖視したアイヌ文化の考え方につな ヒス

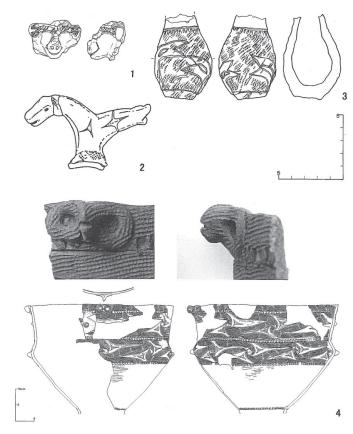


図1-47 美々4遺跡出土の動物意匠のある土器(長沼2006他)

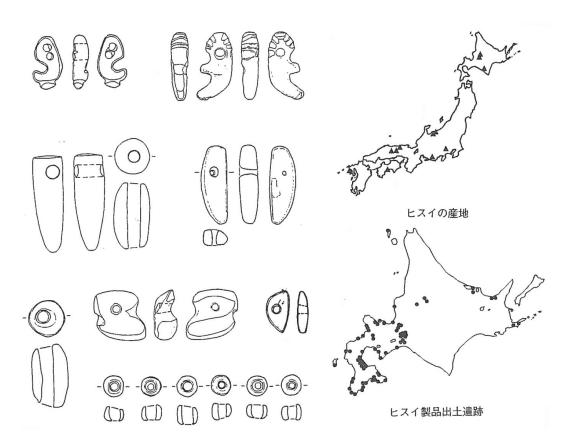


図1-48 美々4遺跡・美沢1遺跡出土のヒスイ製品(柳瀬2005、道埋文2004他)

じ原産地からはるか離れた北海道に運ばれた。 道内では七○遺跡六五○個以上が出土しており、日本海ルートの交易を通新ひだか町三石からわずかにヒスイ原石が発見されている。ヒスイ製品は地方産のものがほとんどを占める。道内では旭川市神居古潭、幌加内町、

そして後期後葉に最多となり、晩期後葉に激減する。央、東北部へと展開し、配石墓などの土壙墓に副葬されるものが多くなる。み、東、東北部へと展開し、配石墓などの土壙墓に副葬されるものが多くなる。のが初現で、後期前半までは大珠と呼ばれる大型の製品や、やや小型の玉のが初現で、後期前半までは大珠と呼ばれる大型の製品や、やや小型の玉のが初現では、縄文前期末とみられる八雲町シラリカ2遺跡の舟形をしたも

王や勾玉のほか刻みのある玉など特殊な形状のものもある。○点あまりが出土している。そのほとんどが縄文時代後期中葉~後葉である。周堤墓をはじめとする土壙墓に副葬されるもののほか、キウス4遺跡のは大部分が盛土遺構から出土している。形状は平玉・管玉が多いが、曲のは大部分が盛土遺構から出土している。形状は平玉・管玉が多いが、曲では大部分が盛土遺構から出土している。形状は平玉・管玉が多いが、曲では大部分が盛土遺構から出土している。形状は平玉・管玉が多いが、曲では大部分が盛土遺跡では美々4遺跡一五八点、キウス4遺跡で四一点のほ子歳市内の遺跡では美々4遺跡一五八点、キウス4遺跡で四一点のほ

葬品など祭祀・儀礼に供されている。その色彩・形状の美観から、装飾品や装身具としての役割のほか、墓の副とスイ製品は、原産地が限られ加工の困難さが伴うなど希少性が高く、

黒曜石

地から交易を通してもたらされたものが多いと考えられる。石鏃や槍先、大産地は良く知られている。千歳市付近では産地がないため、遠距離の産までに述べられたように、産地は全国各地にある中でとりわけ北海道の四石器作りに最も良く使われた石材の一つに、黒曜石が挙げられる。これ

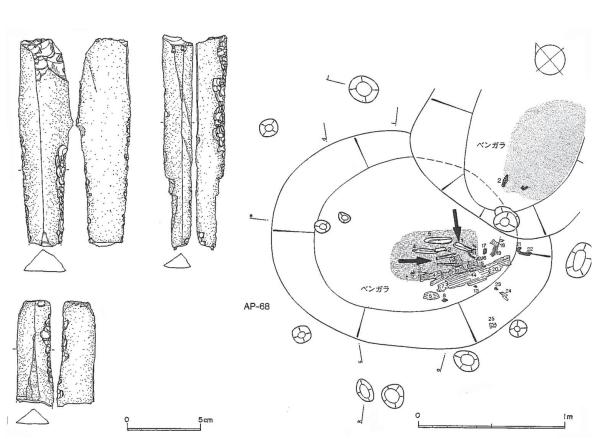


図1-49 ママチ遺跡出土の角柱状の黒曜石原石(道埋文1987)

利用された。 サイフといった利器だけでなく、複雑な形状に加工して装飾品とするなど

石も流通していた。

和文時代早期中葉、キウス9遺跡の石刃鏃はいずれも道東の産地と同定組文時代早期中葉、キウス9遺跡の石刃鏃はいずれも道東の産地と同定

まであるが、以後も道内外各地の産地から黒曜石がもたらされている。の大釈迦産などと同定されている。各遺跡によって原産地の比率はさまざ勝三股産、約二○評が白滝赤石山・あじさい滝産のほか、置戸産、青森県勝期のキウス4遺跡の石鏃では、三○評以上が赤井川産、約二○評が十前期のキウス4遺跡の石鏃では、三○評以上が赤井川産、約二○評が十

が大半を占める。 不明が数種類ある。 勝三股・美蔓といった道東方面と、 が盛んに行われたことがうかがえる。肉眼観察では球顆の多い赤井川 イクチップのほか大型剥片や原石も出土しており、 割合が高く、 後期後葉の例として、 球顆などの不純物が少ない石材が選択されているようであ それ以外では、 一方、 キウス4遺跡では盛土遺構から多量の微細なフレ 周堤墓の墓壙に副葬される黒曜石製品は白滝産 白滝あじさい滝・置戸ケショマップ・十 道南の豊泉が同定されたほか、 石器製作や微細な調整 産出地 産

い産地の赤井川産の流通量が十分でなくなった可能性もある。白滝産の原石が得やすい、または選択的利用が進んだ、あるいは比較的近縄文晩期では一転、赤井川産の割合が減少し白滝産が増加する。良質な

る

が納められた例として、余市町栄町5遺跡・栗山町鳩山遺跡ほか、千歳市では、現在でも露頭でみられる。土壙墓の壙底に棒状または角柱状の原石ところでこの時期に特徴的な原石の種類に棒状原石がある。白滝赤石山

れていた。は、長さ三〇~三五キン、重さ二五〇〇ジ前後の二本の角柱状原石が並べらば、長さ三〇~三五キン、重さ二五〇〇ジ前後の二本の角柱状原石が並べらではママチ遺跡(図1-49)・梅川3遺跡にみられる。オルイカ2遺跡で

現れている。 時期によって、黒曜石の入手先や形状の選択に変化が生じている様子が

アスファルト

石狩・ によりその方法を確立するに至った。 秋田県旧昭和町豊川・旧二ツ井町駒形、新潟県大入がある。道内では天北 れる場合が多いことなどから困難であった化学分析は、 どの用途で利用されてきた。複雑な化学構造と少量の付着物として発見さ て生成されたもので、 ト供給地は現在のところ判然としない。 アスファルトは油田付近などで地表に湧出した石油の揮発成分が失われ 日高・長万部の四産油地帯があるものの、 粘着性 ・耐水性があることから、 アスファルトの産地は、 縄文期におけるアスファ 近年小笠原正明ら 古くから接着剤な 油田 のある

跡では、 跡が確認されており、 に数多い。 で出土したものがある。また磨光B遺跡では後期後半のアスファル 遺跡出土のアスファルトは、 やや小型の深鉢形土器にアスファルトが内法一杯に詰まった状態 分布は道南~道央部に多く、 周辺地域への分配行為が想定されている。 道内では縄文中期からみられ、 旧南茅部町 (現函館 市 後期 豊崎N遺 上 晚期

房のような施設は確認できなかったものの、遺跡内で加工していたことがファルト塊、内面にアスファルトが付着する土器片がみつかっており、工付着する黒色物質もアスファルトが付着しているものがあり、接着剤や補修材茎の部分などにアスファルトが付着しているものがあり、接着剤や補修材茎の部分などにアスファルトが付着しているものがあり、接着剤や補修材



図1-50 アスファルトの産地と出土遺跡(小笠原・阿部2007)

遺

る。

る。 通 文島まで達する一 産は青森県〜道南に広がり ル か 新潟県大入産が一 がえる。 ただし、 トを介して複数の 部は近隣の未知の産地からもたらされた可能性もまだ残されて 試 たとえば石狩や馬追丘陵北部などの石油 料 方、 九 点 サ 点 産地からキウス4遺跡に運ばれてい *7* \ 0 リン サ 石狩低地に達し、 産 ハ 地 産も礼文島まで運ばれている。 リン産が四点という結果であっ 分析では秋 田 北上した新潟県産の 早豊川 産 が 湧出 大部 地があること たことが 分を占 こう 部は礼 した流 秋 判 田 8 崩 る

維 製品

た木製品 湿 地 や繊維製品などの有機質の遺物が出 の遺跡調査では、 土器・ 石器とともに、 土することがある。 湿 地 の環境により 繊維 残され 製品

> 縛結束に使用したものがある。 は、 に加工したものである。 皮 やイネ科植物の茎などから繊 また木製品と組み合わせて製品化したも 繊維を作 ŋ 籠ご や敷物、 縄、 編みぬの 0) や、

数種類の とみられ 底に堆積した泥炭層の中から編み布が出土した。 跡 糸 近年では平成十八年の 縄 縄 着 市 (文早期) 模様編みが確認され など撚糸による狭義の 性の高い カリ 日 コ糸をル バ 遺 標茶町伊茶仁チシネ竪穴群 漆塗り製品でようやく残存している。 跡・ 1 プ状に引き出 小樽市忍路土場遺跡 調査で、 てい 繊維製品はその る 恵庭市柏木川 「したり、 タ (後期) 恵庭市 細さから非 縄文時代後期後葉の テ糸の間隔を変えるなど 4遺跡にお などで出 西島松3遺跡 函館 常に 11 市 残 土 垣 して 旧 ノ島 りにく 時期 !河道 (前 13

千歳市内では、 丸子山遺跡・キウス4遺跡で漆塗り Ó 飾 り弓の 巻糸とし

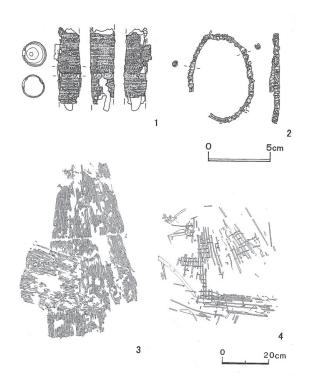


図1-51 キウス4遺跡出土の繊維製品(道埋文) 1:飾り弓の巻糸 2:樹皮製品 4:筌(ウケ) 3:すだれ状製品

など

緊急

几 たとみられる。 中空の茎が密に並んだ状態で出土した。 敷物やアク抜きのための水さらしなどに用いたと考えられるものである。 とヨコ糸のもじり編みで、タテ糸は二~六、一の樹皮製の平紐状で、 に縁辺部が形を保って出土していることから、 は径二、前後のつる状の植物を素材としている。 円筒状のものが展開したとみられ、 ス4遺跡で て木製品と組み合わせた繊維がみら 「ヵ所から見つかり、 は漁撈で用いられたと考えられるものである。端部を円錐形に束ねた 「ウケ」および 最大長約七五於、 「簾状」製品が出土している 約五〇だの範囲で見つかった。 n **図** ヨコ糸は確認できなかったが、特 最大幅約四〇ホンで、 $_{\parallel}^{1}$ 端部などに編みこまれてい 51 1 簾状製品は、 繊維製品ではキウ 図 1 | 径三~四ッの ゴザなどの 51 ヨコ糸 タテ糸 ーウ

さまざまな道具やその材料としてさかんに加工されていたとみられる。 土・石の製品だけではわからない生活 これらの繊維製品は、 今後も出土することが期待される。 遺跡の周辺で入手できる植物を素材としており、 什 器の組成を探る上で重要であ

参考文献 **第** 章

館

狩市紅 二○○○年/秋元信夫『石にこめた縄文人の祈り大湯環状列石』 環状土籬外縁部墳墓について」 ジャーナル』№四五二 ニューサイエンス社 ア・赤石慎三「襟裳沖発見の尖頭器」『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報』2 、石川徹・佐藤一夫・金山哲夫 『ママチ遺跡』 /阿部明義「堂林式・御殿山式土器」 葉山 二〇〇八年 49号遺跡発掘調査報告書』 /阿部千春 『北海道考古学』5 「北海道におけるアスファルト利用」 二〇〇五年/石川徹 『総覧 一九九九年/石狩市教育委員会『石 千歳考古学研究会・市教委 縄文土器 北海道考古学会 株 "北海道千歳市キウス 新泉社 アム・プロモー 一九六九年 『考古学 100 九

ンス社 石川徹 棒 と組織 年/大島直行「北海道の貝塚調査」『考古学ジャーナル』Ndニニー 第2貝塚の再整理資料」 〇六年 期前葉の生業」『粟津湖底遺跡第3貝塚』 七一年 九六三年 狩猟の柵」 正明・阿部千春 代早期の土器」『美々・美沢』道埋文 E地点』二○○五年/同 北海道出版企画センター 文化財調査報告書Ⅲ』一九八五/恵庭市教育委員会『ユカンボシE2遺跡』二○ 磯崎正彦「十腰内遺跡」『岩木山』 告書 1) 変遷に関する日仏比較研究』二〇〇七年 本における定住生活の始まりと生業」『先史時代における居住様式と動物相の 育委員会・江差町教育委員会 『日本の考古学を学ぶ(3)原始・古代の社会』有斐閣選書一九七九年 千歳市、 『縄文時代研究事典』 雄山閣出版 九九〇年 「恵庭遺跡調査概要」『北海道の文化』 一九八四年/大谷敏三「環状土籬」『縄文時代研究9-縄文人の精神文化 / 宇田川洋 「動物意匠遺物とアイヌの動物信仰」 『アイヌ考古学研究・序論 縄文時代の考古学6』同成社 泉拓良・西田泰民 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 同 『動物考古学』第9号 千歳教委 『恵庭遺跡』 「天然アスファルトの利用と供給」『ものづくり 一九八三年/同 、同「千歳の遺跡」 『古代に遊ぶ』 一九六七年 『北海道立埋蔵文化財センター年報2』 『ユカンボシE2遺跡』二○○六年/遠藤香澄 東京堂出版 二〇〇一年/恵庭市教育委員会『カリンバ1遺跡C 恵庭町・恵庭町教育委員会 『縄文世界の一万年』集英社 九五五年/ 岩木山刊行会 一九六八年/内山真澄 「石棒」 動物考古学研究会 大場利夫他 一九九七年/同 二〇〇七年/大泰司統 九九四年 / 伊庭巧「第3貝塚からみた縄文時代中 『原色日本の美術第1巻原始美術』 (琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財調 大場利夫、 特集号 札幌文庫90一九九九年 / 大塚和義 『檜山南部の遺跡』 一九九七年/大竹幸恵 北海道文化財保護協会 一九九七年 「美沢4遺跡の第1貝塚と 松崎岩穂 九六六年 九九九年 「縄文時代の葬制 道埋文 「縄文時代のシカ 道具製作の技術 ニューサイエ / 今井富士雄 渡辺兼庸 同 大場利夫 稲田孝 11001 ノ国 『寿都町 「縄文時 E

有五・五十嵐八枝子 編年について」『考古学雑誌』第六○巻第四号 海道考古学会 海道爾志郡三ツ谷貝塚」『考古学雑誌』第五十一巻第四号 -施文原体の変遷 – 東釧路式土器 – 」『季刊考古学』第一七号 /国遺跡』 一九九一年/帯広市教育委員会 同「道央部の前期土器群の編年について」『北海道考古学』第 『考古学ジャーナル』№三六二 ニューサイエンス社 上ノ国村、 第二七冊) 一九八一年/同 『縄文土器大観Ⅰ』小学館 『北海道の自然史 二〇〇六年 上ノ国町教育委員会 「北海道道央部における縄文中期から後期初頭 『帯広・大正遺跡群2』(帯広市埋蔵文化財 氷期の森林を旅する』北海道大学図書刊 一九八九年 一九六一年/大場利夫・渡辺兼庸 日本考古学会 一九八一年 同 一九六六年 「北海道東部の円筒土 雄山閣出版 一九九三年/小野 一七輯 人大沼忠春 /同「北 九 北 北

年 員会 北海道新聞社 二〇〇三年/小杉康 土器について」 論縄文経済」 文 史民俗博物館 カ・加藤邦雄 生古希記念論文集刊行会 『斜里町史』斜里町 石器・縄文文化』 同 朝日新聞社 九九七年 一九六二年 /木村英明編『北東アジアにおける石刃鏃文化』 「縄文時代晩期初頭に固有の 『研究紀要』 『縄文文化の研究2生業』 「墓制論 一九九九年/熊谷仁志 『研究紀要』 同 北海道新聞社 二〇〇一年/河野広道「斜里町史先史時代史 / 児玉大成・相馬俊也 九九六年 第七号 一九六〇年/河野広道・沢四郎 「北海道の縄文土器」『新北海道の古代1旧石器・縄文文化』 (北海道を中心に)」『縄文時代3』 二〇〇七年 創 青森大学考古学研究所 刊号 / 小林圭一「東北北半における縄文晩期前葉の注口 「巨大記念物の謎を探る」 「眼鏡状突起」 財 雄山閣出版 「縄文時代前期の土器」『美々・美沢』 「宇鉄遺跡における縄文晩期中葉~末葉 山形県埋蔵文化財センター 『列島の考古学Ⅱ』 一九八三年/同 『東釧路貝塚』釧路市教育委 二〇〇四年/小林達雄 (考古学資料集六) 縄文時代研究会 『新北海道の古代Ⅰ 『縄文人の世 110011 渡辺誠先 国立歴 道埋 総 九

社

モーション 二〇〇八年 二〇〇四年/同 七年 ション 二〇〇八年/佐原真「手から道具へ・石から鉄へ」『図説日本文化の歴中 会・苫小牧市青少年センター 二〇〇六年 の考古学9』二〇〇七年 第九一号一九九一年/鈴木公雄編 OF EAELY MAN. London 1989/鈴木加津子「安行式文化の終焉(二)」 広遺跡における考古学的調査(下)』一九八二年/同 七六年/佐藤剛 追分町教育委員会 文時代の社会構造』 を渡った環状列石-重環状構造を持つ「葬祭型環状列石」の系譜と環状周堤墓」 キウス4遺跡 緑色・青色片岩製磨製石斧の流通」『日本考古学協会第七二回総会研究発表要旨』 サ・斎藤 古学的調査』一九八三年/同 1』小学館 九五六年 『キウス4遺跡における考古学的調査』 一九九七年/J. HAWKES 『送りの考古学』 一九八八年/鈴木克彦「硬玉研究序論」『玉文化』創刊号 /市教委『千歳市における埋蔵文化財上・下』一九七九・一九八○年✓ 九八七年 岳他 同 日本考古学協会 一九七九年/同 (10)』北埋調報一八七 『石器時代の日本』 「東三川I式・上ノ国式」『総覧縄文土器』 $\overline{9}$ 「宝ヶ峰式・手稲式土器」 100三年 一九八〇年/ 同成社二〇〇七年/佐藤一夫 縄文〜続縄文時代における北海道中央部から東北地方への /芹沢長介 /瀬川拓郎 『丸子山遺跡における考古学的調査』一九九四年 『大系日本の歴史①日本人の誕生』 佐川俊 一九七六年 /沢四郎 佐藤一夫・大谷敏三『美々貝塚』 『縄文人の生活と文化 築地書館 「縄文文化」『日本考古学講座3』 「縄文-続縄文移行期の葬制変化」 道埋文 「Ⅱキウス4遺跡の遺構と遺物」 『釧路の先史』 『総覧 同 二〇〇三年/佐々木富士夫 『追分町の埋蔵文化財』 九六〇年 『植苗貝塚』苫小牧市教育委員 縄文土器 『メボシ川2遺跡における老 釧路叢書第 古代史復元(2)』講談 仙 (株) アム・プロ 日本玉文化研究会 台市富沢遺跡保存 株 小学館 THE ATLAS 四 河出書房 アム・プロ 追分町 『縄文時代 一九八 九

同

高倉純・出穂雅美・中沢祐一・鶴丸俊明 「北海道上川 那下 川町 ハベの 沢 遺跡 市 館

〇年 植物篇』 の旧 遺跡群Vおよび同付篇』 の考古学Ⅱ』 中央公論社 会へ」『季刊考古学』第98号 第Ⅰ遺跡』 九四年 保護協会 調報一八〇 歳市キウス四遺跡出土R地区出土動物依存体」『千歳市キウス四遺跡(9)』 ウス4遺跡 (2)』北埋調報一二四 歳市美々貝塚北遺跡」 3遺跡」 〇〇二年/土肥研昌 『縄文沼遺跡発掘調査報告書』 九九九年 九九三年 九九九年 一九八一年/同 『縄文文化の研究2生業』 一九九一年 石器時代石器群」 同 / 高橋正勝他 知里真志保著作集別卷Ⅰ 『美沢川流域の遺跡群12』 『美沢川流域の遺跡群皿』 一九六七年/谷口康浩 考古篇1 / 高橋理、 一九七 二〇〇三年/高橋稀一・越田賢一郎「美沢川流域の遺跡群」『北海道 一九九五年/堤隆 武内収太 六一書房 九八七年 土肥孝 ^{、同「大洞C2式土器細分のための諸課題」 『先史考古学研究』 四} 年 「さいたま市東北原遺跡出土の動物形土製品について」『埼玉 「縄文時代後期後半~晩期前葉の編年試案」『季刊考古学』 『ママチ遺跡』 『萩ヶ岡遺跡』 清文堂出版一 太子夕佳 『古代文化』 『日本考古学年報五○』(一九九七年度) 同 『函館空港整備事業の内遺跡発掘調査実績報告-函館空港 北埋調報七 二〇〇六年 同 「涌元式土器」『縄文時代研究事典』東京堂出版 『新道四遺跡』 雄山閣二〇〇七年/知里真志保『分類アイヌ語辞典 雄山閣出版 小泊村教育委員会·早稲田大学文学部考古学研究 「千歳市キウス四遺跡出土動物依存体」 「旧石器の種類」『考古学キーワード』有斐閣 53 北埋調報五八 「縄文時代の社会-文節的部族社会から階層社 九八四年 北埋調報九 平凡社 江別市教育委員会 一九八二年/高橋龍三郎 9 九九八年 道埋文 一九八二年 九八四年 北埋調報五二 二〇〇一年 一九八三年/辻井達一 一九七六年 『美沢川流域の遺跡群Ⅳ』 / 高橋正勝 /高橋理・山崎京美・太子夕佳「千 同 一九八三年 同 九八九年 『千歳市ママチ遺跡Ⅲ』 『フレペッ遺跡群』 / 辻秀子 『柏木川』北海道文化財 九八八年 同 日本考古学協会 理 同 『美沢川 「可食植物の概 『日本の樹木』 「美沢3遺跡 『千歳市キ 同 北埋調報 北海道千 流域の 一九八 北埋 北埋 一九 70

B地区』 七年 〇八年 歳市キウス4遺跡 一 五 五 遺跡』 九一年 る北海道の歴史』 北埋調報一八七 キウス4遺跡(9)』北埋調報一八〇 ○○五年/同『千歳市キウス9遺跡』 跡 北埋調報一三四 キウス7遺跡(5)』北埋調報一二七 歳市キウス 5遺跡 一 六 ユカンボシC9遺跡』北埋調報一○○ 歳市オサツ2遺跡(1)・オサツ14遺跡』 五周年記念誌 Ⅳ』北埋調報六九 『美沢川流 九九二年/同 研究 九九三年 北埋調報一八九 二〇〇二年) 九九二年 北埋調報八二 同 同 同 郷土研究叢書第 北埋調報一○四 『調査年報20』 域の遺跡群14』 九九七年/同 九九七年/同 『千歳市梅川四遺跡 (一)』 「美々7遺跡」「美々8遺跡」 同 同 二〇〇四年 『千歳市ユカンボシC2遺跡』北埋調報八六 一九九八年/同『柏台1遺跡』北埋調一三八一九九九年/同 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群』 十五周年記念誌 二〇〇三年 5 (10)』北埋調報一八七 二〇〇三年 『芽室町北明1遺跡 一九九 一九九三年/同 二〇〇八年/苫小牧東尋常高等小学校郷土部 A - 2地区 一四輯 北埋調報六九 「縄文時代の遺構」『美々・美沢』 一九九七年 『千歳市キウス5遺跡 (4) B地区・C地区』 一九九六年 年 同 /同『千歳市キウス9遺跡』 /同『余市町フゴッペ貝塚』 『美々・美沢 発行年不詳 同 一九九四年 二〇〇三年/同『千歳市キウス4遺跡 一九九八年 北埋調報二五二 北埋調報一二五 北埋調報 2 『オイルカ2遺跡 、同『千歳市キウス5遺跡(3)』 一九九五年/同『千歳市キウス5遺跡 『美沢川流域の遺跡群 北埋調報九六 『美沢川流域の遺跡群15』 九九一 音更町 / 苫小牧市教育委員会 新千歳空港の遺構と遺物』 同 VIII 五三 年 /同『千歳市キウス4遺跡(3)』 西昭和2遺跡池田 『遺跡が語る北海道の歴史』二 同 二〇〇八年 一〇〇八年 一九九八年 2 、同『千歳市オルイカ2遺 『美沢川』 北埋調報 九九五年/同 北埋調報七二 一九九四年/ 16 北埋報二二一 北埋調報八三 川流域の 北埋調報 同 『美沢11遺跡 同 同 五二二〇 町十日 北埋 遺跡 『千歳市 『千歳市 同 一九九 同 10 $\widehat{2}$ 子 九

别 取武光 年 40 居でない方形竪穴」『北海道考古学』第三六輯 俗博物館研究報告』 会 年 尖頭器について」『釧路市立博物館紀要』 ナ・中田裕香 北海道の原始絵画資料 新潟県教育委員会)東釧路Ⅱ式土器について」『考古論集』潮見浩先生退官記念事業会編 版二〇〇四年/同 仁町教育委員会 市教育委員会 - 北海度 I 』 保育社 同 同 第三輯 九九三年 「縄文時代前期の土壙墓ついて」『北海道考古学』第二 「北海道の土器」 「縄文時代後期の土器」『美々・ 一九六七年/同 / 西本豊弘 『登別市富岸川右岸遺跡』二〇〇八年) (北海道・東北北部) 一九六九年/同 第四集 『青田遺跡』二〇〇四年 「遠くまで運ばれた翡翠 一九六三年 『人類学先史学講座』 『原始絵画の研究 「北海道の縄文続縄文文化の狩猟と漁労」 国立歴史民俗博物館 「由仁町東三川遺跡」 『北海道由仁町の先史遺跡 同 『札苅遺跡』 の玉文化」 第一六輯 「馬追丘陵発見の三個の土器」 論考編』六一書房 ·美沢』 第一○巻 / 西幸隆 北海道考古学会 二〇〇〇年/登 北海道の玉文化」『ヒスイ文化 『季刊考古学』第八九号 木古内町教育委員会 一九八四年/西脇対名夫 一九九一年/西田茂「ふたた 道埋文 /野村崇 「北海道釧路沖発見の有舌 雄山閣出版 二九輯 一九九七年/長沼孝 二〇〇六年/名 『日本の古代遺跡 北海道考古学 『国立歴史民 一九三六年 一九七四 『北海道考 雄山閣 九九三 「住

〇七年/福田友之 ト検出遺跡について」 の考古学9死と弔い葬制』 研究事典』 『縄文時代研究事典』 林謙作「美々四式の構成」『考古学論叢Ⅰ』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行 『古代史の論点4権力と国家と戦争』小学館 九八三年 東京堂出版 同 「津軽海峡を巡る交易の品々」『縄文時代の考古学 6 』 東京堂出版 『美々四式の再検討』 『安平町富岡6遺跡・源武15遺跡』安平町教育委員会 二○ 同成社 九九四年 一九九四年 一〇〇三年 / 藤原秀樹 一九九五年 同 「北海道後期の周堤墓」『縄文時代 同 一九九八年/平林彰「環状列石」 「葬送儀礼」「墓制」 「Nまとめ1 同 「縄紋社会は階層社会 北海道のTピッ 『縄文時代 ものづく

ーラム二〇〇三』二〇〇三年

研究叢書第二集 숲 海道の地名』二〇〇三年/北海道教育委員会『美沢川流域の遺跡群Ⅰ』一九七七 『長都16遺跡 同 道具製作の技術と組織 「美々5遺跡」 (2)』一九九七年 苫小牧地方史研究会 『美沢川流域の遺跡群Ⅲ』 同成社 /堀江敏夫 『苫小牧地方鉄道史』 苫小牧地方史 二〇〇七年 一九六八年 一九七九年 /平凡社 「キウス周堤墓群」 / 北海道文化財保 北

年

九九三年 年 回南北海道考古学情報交換会 も の _ 海道千歳市・美々四遺跡出土の動物形土製品」 В の歴史1列島創世記』 マ・松下亘他 堂出版 『古代文化』第21巻第3号 一九六九年/皆川俊一「北斗市 九七八年/森田知忠・遠藤香澄「Tピット論」『北海道の研究1考古篇1』 九九七年 九七四年/宮本長二郎「住生活」『日本考古学を学ぶ (三)』有斐閣 遺跡』 /武藤康弘「縄文時代前・中期の長方形大型住居の研究」 『住の考古学』同成社 『信濃』第20巻第4号 一九八四年/森町教育委員会 二〇〇二年/峰山巌 / 宮宏明 「付篇美々貝塚」『千歳遺跡』市教委 『沢町遺跡』余市町教育委員会 一九八九年 小学館 一九六八年 『松前町高野遺跡発掘調査報告』 二〇〇八年/南茅部町埋蔵文化財調査団 二〇〇七年/水野正好 『尾白内』一九八一年 |同「縄文時代集落復原への基礎的操作 『考古学雑誌』 一九六七年 「環状組石墓群の意味する 館野二遺跡」第二九 第六十四卷第 松前町教育委員会 同 /松本武彦 『尾白内2』 / 森田知忠 一九七九 Ę ラ島

遺跡から出土した植物遺体と遺物包含層の花粉分析について」『千歳市ポンオサツ 号 から出土した植物遺体について-堅果類を中心として」 北 海道の縄文時代ヒスイ玉出土地名表」『玉文化』 ヤ・安田喜憲 〇四年 海道5万年史』 古代学協会 /矢吹俊男、野中一宏「縄文時代の墓制 – 縄文後期の区画墓について – 」 『環境考古学事始』 郷土と科学編集委員会 九九三年 同 日 「ポンオサツ遺跡、 本放送出版協会 一九八五年 創刊号 オサツ18遺跡、 『古代文化 山田悟郎 九八〇年 日本玉文化研究会 「北海道の遺 柳 第四五卷第四 ケネフチ5 瀬由佳

ワ・渡辺誠『増補縄文時代の植物食』雄山閣出版 二〇〇七年/米村衛 年 年/同「一六二 一 三 五 七年度大会研究発表要旨』日本考古学協会 二〇〇七年/同「キウス5遺跡A-九九七年/同 遺跡 た人々の食生活」『生物の科学 1地区南北断面から検出された花粉・胞子」『キウス五遺跡A-2地区』 一吉崎昌一他 「縄紋式研究史における茨城県遺跡の役割」『茨城県史研究』第四号 /横山英介「北海道の特殊性」 2 道埋文 一九九八年/山内清男『日本先史土器図譜』 オサツ18遺跡 「北海道における栽培植物種子の出土状況」『日本考古学協会二○○ 『祝梅三角山地点』 注口土器 「栗沢式土器」 (2)ケネフチ5遺跡(2)』北海道文化財保護協会 御殿山式」『日本原始美術1』講談社 一九六四年 遺伝』V o l 16 No. 2 『季刊考古学』第69号 市教委 一九七四年/米田譲「北海道に暮らし 『縄文時代研究事典』東京堂出版 一九八四年 (株) エヌ・ティー・エス 雄山閣出版 第十輯 一九九九年 一九六六 九九四年 九四一 北埋調報